

リー群SU(3)によるエニアグラムの幾何学的再定式化 —対称性の破れと身体化に基づく構造モデル—

春井 星乃

Hoshino Harui

The Geometry of the Enneagram:

A Reformulation via SU(3) Symmetry Breaking and Embodiment

要旨

エニアグラムは広く知られた性格類型論であるが、九タイプの順序、三センター、ウィング、統合・分裂方向といった基本構造を支える理論的原理はこれまで明確ではなかった。本研究は、エニアグラムの九タイプ構造を、経験的性格分類や象徴的類型論としてではなく、リー群SU(3)の幾何学的・群論的配置原理に基づく構造モデルとして再定式化することを目的とする。本研究ではヌーソロジーの意識発達理論および春井（2023）のエニアグラム性格形成論を理論的基盤とした。SU(3)は三項関係を最小次元で表現するリー群であり、三センターと九タイプ構造を記述する数学的枠組みとして用いられる。このSU(3)の生成子配置に、前後・上下・左右の身体三軸を導入することで対称性の破れをモデル化し、そこから九タイプおよび三センターの対応を幾何学的に導いた。また、タイプ1-9の順序とウィングをSU(3)構造内の連続性として説明するとともに、ヌーソロジーの「自己他者連結構造」を適用することで、統合・分裂方向に対応する動的循環構造を示した。加えて、SU(3)の判定軸と非対角生成子の概念により、この循環構造と方向性の意味が数理的に説明可能であること、各生成子や判定軸の数学的特性と春井（2023）による臨床的タイプ特性との間に高い整合性があることが確認された。さらに、リソ,D.R.（1992）の発達論的分類との比較検討を通じ、本研究の発達段階順序がSU(3)構造と深い同型性を保つことを示した。以上より、九タイプ、三センター、ウィング、統合・分裂方向といったエニアグラムの主要構造は、SU(3)の生成子配置に身体化という制約を導入することで、一貫した構造対応として記述可能であることが示唆される。結論として本研究は、エニアグラムをSU(3)の内部対称性と人間の意識発達過程との間に成立するホログラフィック対応として記述する構造モデルを提示し、九タイプ構造を群論的幾何学として理解する理論的枠組みを与えるものである。

キーワード：SU(3), リー群, エニアグラム, 対称性の破れ, 身体化, 意識発達, 精神分析, 発達三段階, ホログラフィック対応

目次

I. 序論	2
II. 理論的前提	5
III. 数学的基盤	12
IV. 対称性の破れと身体化	22
V. 九タイプ配置と同型対応	37
VI. 順序・ウィング・統合分裂方向の構造的導出	56
VII. 考察	71

VIII. 結論	85
付録	
A. SU(3)の数学的基盤	88
B. 対応表一覧	90
C. 各 λ と判定軸の構造的意味とタイプ対応の根拠	92
参考文献	109

I. 序論

1. 問題設定

エニアグラムは、九つの性格タイプをもとに人間の認知傾向、情動反応、対人関係の様式を理解しようとする類型論として、近年ではビジネス、自己理解、教育、心理支援の領域などで広く用いられている。とりわけ、各タイプの基本特性だけでなく、三つのセンター、ウィングによる差異、さらには統合・分裂の方向などが、実践的な理解の枠組みとして重視されてきた。

しかしながら、こうしたエニアグラムの構造には、経験的・臨床的には繰り返し確認される一定の規則性がある一方で、それらがなぜそのような順序や方向を持つのか、またなぜ九つの点として安定した構造を成しているのかについては、必ずしも十分な構造的説明が与えられてきたとは言い難い。先述の各タイプの基本特性、三つのセンター、ウィング、統合・分裂方向の非対称な循環などの概念は、実践上はよく知られているが、それらを統一的に説明する根拠はなお不明瞭なままである。

本研究はこの点に着目する。すなわち、エニアグラムにおける九タイプ構造を、単なる経験的配置や象徴的図式としてではなく、一定の対称構造が身体化されることで生じる必然的配置として捉え直すことはできないか、という問いを立てる。本研究では、その構造的根拠を、リー群 SU(3) の対称構造と、その身体的介入による対称性の破れに求める。

2. 研究目的

本研究の目的は、エニアグラムの九タイプ構造を、ニューロロジーにおける意識発達論と SU(3) の対称構造の対応として再定式化し、その幾何学的・構造的必然性を示すことにある。具体的には、本研究では、エニアグラムに見られる以下の諸要素を対象とする。

- 九タイプの基本特性と配置順
- 三つのセンター（本能・感情・思考）の分割
- ウィング（隣接性）の位置づけ
- 統合・分裂方向の循環構造

これらを、SU(3)のリー代数構造、 A_2 ルート系、カルタン構造、および対称性の破れによって生じる身体的軸（前後・上下・左右）との対応関係の中で捉え直すことにより、エニアグラムを「身体化されたSU(3)構造」として記述することを試みる。

本研究の狙いは、エニアグラムの実践的有効性そのものを否定したり置き換えたりすることではない。むしろ、その背後にある配置原理を明らかにすることで、エニアグラムを従来以上に一貫した理論構造として理解しうる可能性を提示することにある。同時に、意識発達と素粒子構造のホログラフィックな同型対応を構想するヌーソロジーの立場にとっても、本研究は、心理構造と数理構造の接続を具体的に示す一つの試みとなる。

3. 先行研究との関係

本研究の立場は、第一に、春井（2022）において提示された「超越論的無意識研究」の問題系を継承するものである。春井（2022）は、ヌーソロジーを、哲学・心理学における構造主義的超越論的無意識研究と、物理学における素粒子構造研究とを接続する試みとして位置づけ、素粒子構造の内部に超越論的無意識構造を読み解く概念を見出すことを課題として提示した。また同論考では、ヌーソロジーにおける心理学の役割の一つとして、素粒子構造に基づく超越論的無意識構造を一貫した意識発達仮説として再構成することが挙げられている。

第二に、本研究は、春井（2023）における性格形成論を重要な先行仮説として踏まえる。春井（2023）は、乳幼児期における情動体験が、自己イメージおよび他者イメージを無意識のうちに規定し、それが個人の生存戦略として維持され、思春期において性格として固定されると考える。このとき、乳幼児期に決定される生存戦略の型が九つあり、それがエニアグラムの九タイプに対応するとされる。こうした立場は、エニアグラムを単なる後天的な行動パターンとしてではなく、発達初期の深層的な情動構造に根ざす型として理解する点で、本研究の方向性と強く共鳴している。

第三に、本研究はフロイトの発達論、とりわけ口唇期・肛門期・男根期という幼児期の欲動発達と、思春期における性格の固定化という観点を参照する。フロイトは、性格を幼児期の欲動の変形・昇華・反動形成の集積として考え、幼児期の固着が後の持続的行動様式に深く関与するとみなした。本研究では、このフロイト的発達図式を、ヌーソロジーの ψ 系列による意識発達モデルと接続し、さらにSU(3)の三つのSU(2)的部分構造との対応として読み替えることで、エニアグラムの構造的基盤を再解釈する。

以上の先行研究に対して、本研究の独自性は、これらの発達論的・心理学的知見を、SU(3)の数理構造と対称性の破れのモデルに接続し、エニアグラムの配置そのものを幾何学的に再定式化する点にある。

なお、著者の知る限り、SU(3)構造とエニアグラムの対応を論じた先行研究は現時点では存在せず、本研究はこの問いに初めて取り組む試みである。同様に、身体化された対称性の破れという観点

からエニアグラムを理論化した研究も確認されていない。このことは本研究の先行研究引用が限られる理由であると同時に、本研究の独自性そのものを示すものでもある。

4. 本研究の方法と立場

本研究は、エニアグラムに関する経験的統計研究や実証的心理測定を直接の目的とするものではない。むしろ本研究の目的は、エニアグラムに見られる配置規則と運動規則に対して、一貫した構造対応モデルを提示することにある。

そのため本研究では、まず $SU(3)$ の数学的構造を可能な限り心理学的解釈から独立した形で整理する。次に、その等方的構造に対して身体の介入、すなわち前後・上下・左右という方向軸、および発達段階と情動状態の導入を通じて、対称性の破れがどのように生じるかをモデル化する。そのうえで、エニアグラムの九タイプをこの身体化された $SU(3)$ 構造の中に配置し、その順序、分割、循環を読み解く。

したがって、本研究の立場は、エニアグラムを経験的類型の寄せ集めとして扱うのではなく、身体と意識発達を介して具現化された数理的構造として理解するところにある。言い換えれば、本研究は「エニアグラムが正しいか否か」を外在的に判定するものではなく、エニアグラムにおいて経験的に知られてきた構造が、どのような理論的骨格によって支えられているかを記述する試みである。

この意味で、本研究は、数学・物理・心理学を単純に混同するものではなく、それぞれの領域にまたがる構造的同型性に注目し、その対応を明示的なモデルとして示すことを方法論的立場とする。

5. 本研究の構成

本研究は、以下のような構成をとる。

第II章では、本研究の理論的前提として、ヌーソロジーの意識発達理論、フロイトの発達段階論、春井（2023）の性格形成仮説、および本研究で用いるエニアグラムの最小限の定義を整理する。ここでは、心理学的・発達論的背景を確認し、本研究の問題設定がどこに立脚しているかを明らかにする。

第III章では、 $SU(3)$ の数学的基盤を確認し、本研究で用いる9点配置の前提を定義する。第IV章では、その抽象的構造に身体の介入を導入し、前後・上下・左右という軸の生成と、発達段階・情動状態を通じた対称性の破れを理論化する。

第V章では、こうして身体化された $SU(3)$ 構造の中に、エニアグラムの九タイプをどのように配置できるかを示し、第0層および第1～2層における同型対応を提示する。続く第VI章では、その静的配置から動的な循環構造へと進み、九タイプの順序、ウィングの隣接性、統合・分裂方向の構造を導出する。

第七章では、本研究の理論的意義を、ヌーソロジーおよびエニアグラム理論の双方に照らして考察し、本モデルの限界と今後の課題を整理する。最後に第八章では、本研究全体を総括し、本研究の意義と今後の展望を簡潔に示す。

II. 理論的前提

1. ヌーソロジーにおける意識発達理論

本研究の理論的前提の第一は、ヌーソロジーにおける意識発達理論である。ヌーソロジーでは、人間の意識は単なる脳内現象や経験の蓄積としてではなく、観察子の空間構造が段階的に展開する過程として理解される。そこでは、意識の発達は、心理学的な成熟過程であると同時に、素粒子構造に対応する対称性の発現過程でもあり、両者はホログラフィックな同型対応の関係にあると考えられている。

この立場において重要なのは、意識発達を、外界への適応の歴史としてのみではなく、主体と他者、内包と外延、知覚と概念の関係がどのように組み替えられていくかという構造変換として捉える点である。したがって、ヌーソロジーにおける発達とは、心理的内容の増加ではなく、観察空間そのものの座標系が変化していく過程を意味する。

ヌーソロジーでは、この意識の発達は ψ 系列によって記述される。各 ψ は、単なる時間的段階ではなく、主体の知覚様式と他者との関係様式を規定する構造的位相を表している。本研究において直接関係するのは、乳幼児期から思春期に至る以下の発達図式である（半田,2017）。

まず、 $\psi_{1\sim 8}$ は、胎児期的な基底構造に相当する。ここでは、意識はまだ自我として分節されておらず、主体と対象の区別も十分には成立していない。この段階は、後の発達の基盤をなす潜在的構造として位置づけられ、本研究では、SU(2) 的構造に先立つ基準相として理解される。

次に、 ψ_{10} は乳幼児期の意識運動に相当する。ヌーソロジーでは、この ψ_{10} が $\psi_{1\sim 8}$ を順に「なぞる」運動を行うことで、乳幼児期の発達段階が形成されると考えられる。すなわち、 ψ_{10} がどの領域をなぞるかによって、口唇期・肛門期・男根期というフロイト的発達相が構造的に位置づけられる。

具体的には、 ψ_{10} が $\psi_{1\sim 2}$ および $\psi_{3\sim 4}$ をなぞる運動が口唇期に、 $\psi_{5\sim 6}$ をなぞる運動が肛門期に、 $\psi_{7\sim 8}$ をなぞる運動が男根期に対応する。ここで重要なのは、これらの三段階が単なる年齢区分ではなく、主体が他者や対象とどのような関係を取るかという、三つの基本的な構えとして現れる点である。本研究では、この三段階を、後に SU(3) を構成する三つの SU(2) 的部分空間と対応づけるため、理論上の基礎単位として扱う。

とりわけ、 $\psi 7 \sim 8$ は他者側の $\psi^* 1 \sim 2$ と接続し、円環的構造を持つとされる点が、本研究にとって重要である。この円環性は、発達段階を単なる一方向の直線的進行としてではなく、自己と他者の境界をまたぐ循環構造として捉える視点を与える。後に、本研究で論じる統合・分裂方向は、この円環構造を前提とすることで、より自然に理解されることになる。

さらに、 $\psi 9$ は児童期に相当し、言語的・概念的な整理が進行する相として位置づけられる。この段階では、乳幼児期の情動的・身体的経験が、より安定した形で表象化・秩序化される準備が進む。本研究では、この段階そのものを詳細に扱うわけではないが、乳幼児期に形成された基本的構えが、後の固定化へと向かう中間相として重要である。

そして、 $\psi 12$ 前半は思春期に相当し、ヌーソロジーではここに $SU(3)$ が対応すると考えられている。この段階において、乳幼児期に分かれていた三つの基本的構え——すなわち口唇期・肛門期・男根期——は、相互に独立した経験の断片ではなく、一つの全体構造の内部で再配列される。本研究がエニアグラム構造を $SU(3)$ と結びつけるのは、まさにこの点においてである。すなわち、思春期は単なる身体的成熟の時期ではなく、乳幼児期に形成された情動的・対人的構えが、ひとつの性格構造として結晶化する場であり、その統合様式を $SU(3)$ の対称構造として読むことができる、というのが本研究の基本的な立場である。

以上をまとめれば、ヌーソロジーにおける意識発達理論は、乳幼児期の三つの基本位相を経て、思春期においてそれらが全体構造として再編成される過程を示している。本研究は、この再編成の場を $SU(3)$ として捉え、そこにエニアグラムの九タイプ構造が対応すると考える。したがって、エニアグラムを理解するためには、まずその前提として、性格が思春期に突然生まれるのではなく、乳幼児期の三つの構えが思春期において構造化・固定化されるというヌーソロジー的発達観を確認しておく必要がある。

この意味で、本研究における $SU(3)$ は、単なる抽象的な数学構造ではない。それは、乳幼児期の身体的・情動的経験が、思春期において性格構造へと結晶する際の構造的器として理解されるべきものである。次節では、この発達観と接続するかたちで、フロイトにおける性格形成論を確認し、乳幼児期の欲動経験がどのように後の性格へと固定化されると考えられてきたかを整理する。

2. フロイトにおける性格形成論

本研究の理論的前提の第二は、フロイトにおける性格形成論である。フロイトの精神分析理論において、性格は、成人以後に外在的に形成される単なる習慣や行動傾向ではなく、乳幼児期における欲動経験とその処理の仕方が、後の人格全体に持続的な形で刻印されたものとして理解される。したがって、性格とは、現在の意識的な判断や社会的役割の結果というよりも、むしろ乳幼児期における身体的・情動的経験の構造的な残存形態である。

フロイトは、口唇期・肛門期・男根期という発達段階を通じて、乳幼児期の欲動が段階的に展開すると考えた。これらの段階は、単なる生理的成熟の区分ではなく、快・不快、満足・不満、依存・支配、受動・能動といった基本的な対人・対世界関係が形成される場でもある。したがって、各段階でどのような経験が印象的であったか、どのような欲求が満たされ、あるいは抑圧・挫折されたかは、その後の人格構造に深い影響を及ぼすと考えられる。

とりわけフロイトは、いわゆる「性格」と呼ばれるもののかなりの部分が、乳幼児期における欲動成分の変形、昇華、あるいは反動形成によって成り立っているとみなした。すなわち、乳幼児期の衝動は、そのままの形で持続するのではなく、社会化や抑圧の過程を通じて別の形に置き換えられながら、しかしその構造的核を保持したまま、後の思考・感情・行動の傾向として現れる。ここで重要なのは、性格が単なる「あとから身につく性質」ではなく、乳幼児期の欲動構造が変形された結果として理解されている点である。

この見方に立てば、性格形成とは、乳幼児期における欲動経験がその後の発達のなかで組み替えられつつも、一定の反復性を伴って持続する過程であると言える。人は、乳幼児期に経験した満足や不満、接近や拒絶、依存や分離のパターンを、成長後も別の形で反復しやすい。そうした反復が、長期的には「その人らしさ」として観察される。したがって、フロイト的観点からみれば、性格とは、表面的な行動の集積というよりも、乳幼児期の関係様式が反復可能な型として固定されたものである。

さらにフロイトは、乳幼児期のこうした諸傾向が、潜在期（児童期）を経て、性器期（思春期）において再び強い意味を持つようになると考えた。潜在期（児童期）においては、欲動の直接的な表出は相対的に静まり、教育や社会化への適応が進むが、性器期（思春期）に入ると身体的成熟に伴って欲動構造が再活性化される。このとき、乳幼児期以来の固着や未解決の構えが、単なる一時的反応ではなく、持続的な人格の輪郭として前景化する。つまり、性器期（思春期）とは、乳幼児期の欲動構造が再編成され、個人の性格としてより明確に固定化される局面である。

本研究にとって重要なのは、まさにこの「乳幼児期の三段階」と「思春期における固定化」の連関である。ヌーソロジーにおいては、口唇期・肛門期・男根期は $\psi 10$ の運動によって構造化される三つの基本位相として理解され、思春期は $\psi 12$ 前半における SU(3) 的再編成の場として位置づけられる。このヌーソロジー的発達観とフロイトの性格形成論を重ねてみると、両者に共通するのは、幼児期に形成された基本的構えが、思春期において人格として定着するという発想である。

したがって、本研究ではフロイトの性格形成論を、エニアグラムを単なる後天的な性格分類ではなく、乳幼児期の欲動・情動構造が思春期において固定化された型として捉えるための重要な理論的足場とみなす。すなわち、エニアグラムの九タイプが、成人期に現れる行動傾向の表面的分類にとどまらず、その背後に乳幼児期の深層的な構えを保持しているとするならば、その構造的根拠を、フロイトの三段階的発達図式と、その再固定化の場としての思春期に求めることは十分に妥当である。

もっとも、本研究はフロイト理論をそのまま再現することを目的とするものではない。本研究の関心は、口唇期・肛門期・男根期という発達相を、単なる精神分析史的概念としてではなく、後に

SU(3)の三つの部分構造へと接続されうる基本的な発達位相として読み替えることにある。その意味で、本研究におけるフロイトの位置づけは、精神分析の詳細な臨床理論の検討にあるのではなく、性格形成を「乳幼児期の三段階」と「思春期の固定化」という二つの局面から把握するための基礎枠組みを与える点にある。

以上のように、フロイトの性格形成論は、性格を乳幼児期の欲動経験の変形・固定として理解する理論であり、エニアグラムを発達初期の情動構造に根ざす型として捉えようとする本研究の立場に対して、重要な理論的支柱を提供する。次節では、このフロイト的枠組みをさらに具体化したものとして、春井（2023）における性格形成仮説を取り上げ、幼児期の情動体験がどのように九つの生存戦略として整理されるのかを確認する。

3. 春井（2023）におけるエニアグラム性格形成仮説

本研究の理論的前提の第三は、春井（2023）において提示された性格形成仮説である。春井（2023）は、性格には、遺伝的気質や後天的学習の結果という要素と共に、乳幼児期における情動体験が、自己イメージと他者イメージを無意識のうちに決定し、それが個人の生存戦略として固定化されたものの影響が存在するとしている。この立場は、フロイトにおける欲動経験の固着と性格形成という考え方を引き継ぎつつ、それをより明確に「対人的・存在的戦略」として定式化しようとするものである。

この仮説において重要なのは、乳幼児期の体験が単に「記憶」として蓄積されるのではなく、世界の読み方そのものを規定する構えとして沈殿するという点である。すなわち、乳幼児は、養育者との関係や周囲の環境のなかで、満たされる／満たされない、受け入れられる／拒絶される、守られる／脅かされる、といった情動的な体験を重ねる。その結果、「自分とはどういう存在か」「他者とはどういう存在か」「世界とはどのような場所か」といった、最も基礎的な前提が、明示的な言語化以前のレベルで形成される。

春井（2023）によれば、こうして形成された前言語的な自己像・他者像は、のちの発達段階においても単純に消失することなく、むしろ個人が現実を生き延びるための無意識的な生存戦略として持続する。ここでいう生存戦略とは、物理的な生存に限らず、愛されること、見捨てられないこと、傷つかないこと、自分の居場所を保つこと、自分の価値を感じ続けることなど、存在全体を維持するための基本的な反応様式を指す。したがって、性格とは、社会的に獲得された表面的な行動様式という要素の奥に、乳幼児期において形成された生存戦略が、思考・感情・行動の全域にわたって反復される構造をその基盤として持つものである。

この見方に立つと、エニアグラムの九タイプは、後天的に分類された九種の性格ラベルではなく、乳幼児期に無意識のうちに形成された九種の基本戦略として再解釈されることになる。すなわち、個々人は、幼児期における情動体験の偏りや印象の持ち方に応じて、「どのように振る舞えば安全か」「どのような自分であれば受け入れられるか」「何を避け、何を求めるべきか」という基本的な

構えを獲得する。その構えが、思春期においてより統合された人格構造として固定化されるとき、エニアグラムのタイプ差として観察される、というのが春井の基本的な立場である。

この仮説の意義は、エニアグラムを、成人期の行動特徴の記述から、発達初期における深層的構造の表現へと引き戻す点にある。エニアグラムにおいては、各タイプがそれぞれ異なる中心的恐れや欲求、認知の偏り、対人様式を持つとされるが、それらを単なる心理的傾向として捉えるだけでは、なぜそのような一貫性が生じるのかは十分に説明されない。春井（2023）の仮説は、この一貫性を、乳幼児期に形成された自己像・他者像・世界像の組み合わせとして理解しようとするものであり、各タイプの深層的な安定性に対して発達論的根拠を与える。

さらに本研究にとって重要なのは、春井（2023）の仮説が、性格形成を「九つの無意識的生存戦略」として整理することにより、エニアグラムの九タイプを数理的配置と接続しうる単位として提示している点である。フロイトが主として三段階の欲動発達を論じたのに対し、春井（2023）は、その発達段階（口唇期・肛門期・男根期）における情動体験の差異（欲求不満・満足・不安）が、より細かい類型として九つに分化しうることを示唆している。ここにおいて初めて、乳幼児期の三つの基本位相と、エニアグラムの九つのタイプとを、一つの構造の中で関係づける理論的可能性が開かれる。

本研究は、まさにこの点を引き受ける。すなわち、春井（2023）が臨床的・発達論的な観点から提示した「九つの生存戦略」という仮説を、SU(3)の構造における3×3配置と対応づけることで、エニアグラムの九タイプを、心理学的直観だけでなく、幾何学的・群論的な配置として読み替えることを試みる。ここで重要なのは、本研究が春井（2023）の仮説を単に補足するのではなく、その仮説に対して、なぜ「九」という分節が現れるのか、なぜ三つのまとまりや循環構造が成立するのか、といった点に、構造的根拠を与えようとしていることである。

以上のように、春井（2023）における性格形成仮説は、乳幼児期の情動体験が自己像・他者像を無意識に規定し、それが九つの生存戦略として固定され、思春期以後の性格構造として現れる、というものである。この仮説は、フロイトの三段階的発達論を、エニアグラムの九タイプへと具体的に橋渡しする役割を果たしており、本研究にとっては、心理学的・臨床的仮説と数理的構造とを結びつける直接的な媒介項となる。

したがって、本研究は、春井（2023）の提示する九つの生存戦略という視点を出発点とし、それらがどのようにしてSU(3)の3×3構造の中に配置されるのかを問う。そのことによって、エニアグラムを、発達臨床の経験則に支えられた類型論であると同時に、一定の対称構造の身体化によって成立する配置系として再記述することを目指す。次節では、この橋渡しを踏まえ、本研究で前提とするエニアグラムの基本定義を確認し、九タイプ、三センター、統合・分裂方向など、本研究が対象とする要素を限定して整理する。

4. 本研究で扱うエニアグラムの最小定義

本研究は、エニアグラム全体の歴史的起源や、各流派における解釈の差異を包括的に検討することを目的とするものではない。ここでの関心は、エニアグラムを構成する諸要素のうち、SU(3) 構造との対応を論じるうえで必要な最小限の構造を明確にすることにある。そのため、本節では、本研究において前提とするエニアグラムの基本定義を簡潔に整理する。

まず、エニアグラムとは、九つのタイプから成る性格類型論である。本研究において「タイプ」とは、表面的な行動傾向の分類ではなく、前節までで確認したように、乳幼児期の情動体験に根ざした基本的な生存戦略が、思春期以後の人格構造として固定化された型を指す。したがって、九つのタイプとは、九つの行動様式というよりも、九つの認知・情動・対人関係の基本形であり、それぞれが固有の自己像・他者像・世界像を持つ。

この九タイプは、通常、円環上に配置される。重要なのは、この円環が単なる視覚的な図ではなく、各タイプ間の関係性を含んだ構造として理解されている点である。すなわち、タイプは互いに無関係に並んでいるのではなく、隣接性、循環性、方向性といった諸関係を通じて、一つのシステムを成している。本研究が目にするのは、まさにこの「九つがどのような構造として並び、動くのか」という点である。

次に、エニアグラムには、九タイプを三つずつに分ける三センターの考え方がある。一般にこれは、本能（あるいは身体）センター、感情（あるいは心）センター、思考（あるいは頭）センターとして知られ、それぞれ三つのタイプから構成される。流派によって表現の揺れはあるものの、本研究ではこの三センターを、性格を支える三つの基本的な処理様式として扱う。すなわち、世界との関係を主として

- 身体的・衝動的に処理する側面
- 情動的・関係的に処理する側面
- 認知的・把握的に処理する側面

の三つに分け、それぞれが三タイプずつに対応すると考える。

本研究において重要なのは、この三センターが単なる経験的分類ではなく、後に示すように、SU(3) の三重構造の反映として幾何学的に整列するという点である。したがって、本研究では三センターを、エニアグラムの補助的概念ではなく、九タイプ構造の内部に含まれる基本的な三分割として位置づける。

また、エニアグラムにおいては、あるタイプが両隣のタイプから影響を受けるという意味で、しばしばウィング（隣接タイプ）の影響が論じられる。本研究では、流派ごとの細かなウィング理論に立ち入ることはしないが、少なくとも「隣接するタイプどうしは構造的に近接しており、相互影響を持ちやすい」という点は、本研究の数理的配置モデルにとって重要である。そのため、本研究ではこれ

を広い意味でウィングの隣接性として扱い、九タイプの円環配置が単なる順番ではなく、局所的な影響関係をも含んでいることを確認する。

さらに、エニアグラムには、タイプ間の動的関係として、いわゆる統合・分裂方向の考え方がある。これは、あるタイプが成長・安定に向かうときに現れやすい方向と、ストレス・退行に向かうときに現れやすい方向が、それぞれ別のタイプへ向けて示されるというものである。従来、この方向性は、実践的・臨床的にはよく知られてきたが、なぜ特定のタイプどうしがそのように結ばれるのか、その構造的根拠は十分には説明されてこなかった。本研究では、この統合・分裂方向を、単なる経験則としてではなく、九タイプ構造の内部に潜む循環的運動法則として扱う。

ここで重要なのは、統合・分裂方向が、すべてのタイプを一様に結ぶ単一の線ではなく、実際には二つの循環構造から成っているという点である。後に詳しく見るように、本研究ではこれを、六点から成る変化の環と、三点から成る安定化の環という二重構造として読み解く。この意味で、統合・分裂方向は、エニアグラムの外部から付与された補助線ではなく、九タイプ構造そのものの運動相を示すものとして再解釈される。

そして本研究では、エニアグラムの九タイプを、静的に固定されたラベルとしてではなく、位置と方向をもつ構造単位として捉える。各タイプは、単独で意味を持つのではなく、

- どのセンターに属するか
- どのタイプと隣接するか
- どの方向へ統合・分裂するか
- どの循環に属するか

といった、他タイプとの関係の中で初めて、その位置づけが明確になる。したがって、本研究においてエニアグラムとは、九つの独立した性格記述の集合ではなく、九つの位置とその相互関係によって成り立つ配置系である。

ただし、本研究の関心は、配置関係のみに限定されるものではない。本研究では、各タイプに対応づけられる構造あるいは判定軸の数学的・構造的特性が、各タイプに見られる基本的な性格特性とも対応している、という立場をとる。すなわち、各タイプの特性は、経験的な記述の積み重ねとしてのみ理解されるのではなく、対応する生成子の対称性、等化性、固定性、判定性、遷移性といった構造的性質の現れとして読み解くことができると考える。したがって本研究では、各タイプの個別的な臨床描写を網羅的に扱うのではなく、少なくともその核となる構造的特性については、配置原理と不可分のものとして論じる。

以上を踏まえ、本研究で扱うエニアグラムの最小定義は、次のようにまとめられる。すなわち、エニアグラムとは、

1. 九つの基本タイプから成る性格構造であり、

2. それらは三つのセンターに分割され、
3. 円環上の隣接関係を持ち、
4. 統合・分裂方向という動的循環を伴い、
5. 各タイプはその位置関係だけでなく、対応する構造単位の特性に応じた基本的性格特性を持つ、

という多層的な配置システムである。

本研究は、この最小定義に基づき、エニアグラムの個別的な臨床記述のすべてを扱うのではなく、九タイプ構造を成立させている配置原理と、各タイプの核となる構造的特性を対象とする。すなわち、各タイプに関するあらゆる経験的記述を網羅することよりも、「なぜ九なのか」「なぜ三つに分かれるのか」「なぜその順序と方向を持つのか」、そして「なぜ各タイプがそれぞれ異なる基本特性を持つのか」という、構造そのものの問題に集中する。その意味で、本研究は、エニアグラムの実践的応用の解説ではなく、その背後にある幾何学的・群論的骨格と、そこから導かれる基本的性格特性の根拠を明らかにすることを目的とする。

ここまでで、本研究の理論的前提は出そろった。すなわち、ヌーソロジーにおける意識発達論、フロイトにおける性格形成論、春井（2023）における九つの生存戦略という仮説、そして本研究で扱うエニアグラムの最小定義である。次章では、これらの前提を受けて、まず $SU(3)$ そのものの数学的基盤を確認し、本研究で用いる構造単位と配置可能性を、心理学的意味づけから独立した形で整理する。

III. 数学的基盤

1. $SU(3)$ の基本構造

本章では、本研究においてエニアグラム構造との対応を論じるための数学的基盤として、 $SU(3)$ の基本構造を確認する。ただし、ここでの目的は、 $SU(3)$ の数学的理論そのものを包括的に展開することではない。あくまで本研究の関心は、後に九タイプ構造、三センター、タイプ1~9の順序・隣接性、統合・分裂方向を記述するために必要な範囲で、 $SU(3)$ を配置可能な対称構造として理解することにある。

なお、 $SU(3)$ の厳密な数学的定義、各生成子の詳細な性質、ならびに本研究で用いる拡張的解釈については、付録A~Cにおいて補足する。本章では、後の議論に必要な最小限の構造のみを示し、読者が本論の流れを追えることを優先する。したがって、以下では、リー群・リー代数・生成子といった基本概念を簡潔に整理しつつ、本研究における $SU(3)$ の読み方を明確にする。

まず確認しておきたいのは、本研究がなぜ $SO(3)$ や $SU(2)$ ではなく、 $SU(3)$ を基礎的な対称構造として採用するのか、という点である。 $SO(3)$ は三次元空間の回転を表す群であり、身体化を導入す

るにあたって重要な「前後・上下・左右」という三方向を扱うためには一見適しているように見える。しかし、 $SO(3)$ が直接与えるのは三本の空間軸の回転関係であって、本研究で問題としているような、三成分から三つの二成分面が生まれ、それらがさらに九位置配置へ展開する内部構造までは与えない。他方、 $SU(2)$ は二成分系の混合と回転を記述するうえで重要であり、本研究においても後に $RG \cdot RB \cdot GB$ の各面の局所構造を理解する際の基礎となる。しかし、 $SU(2)$ は本質的に二成分系であるため、そこから自然に得られるのは一つの面とその内部変換までであり、三系列と九位置から成る全体構造を直接与えることはできない。

これに対して $SU(3)$ は、三成分系として、 $RG \cdot RB \cdot GB$ という三つの二成分面を自然に含んでいる。このことにより、各面の内部には $SU(2)$ 的な局所構造が現れつつも、全体としては三系列とその交差から成る 3×3 配置へと展開する条件が与えられる。したがって、本研究において $SU(3)$ を採用する理由は、それが単に「三」という数を持つからではなく、三成分から三つの二成分面を生み、それらを一つの全体として統合しうる最小の非可換構造だからである。この意味で、 $SU(3)$ は、エニアグラムの九分構造を導くために必要な最小限の数学的器として位置づけられる。

このことを踏まえたうえで、 $SU(3)$ 自体を簡潔に定義しておく。 $SU(3)$ は、複素3次元空間に作用する特殊ユニタリ群である。すなわち、 3×3 の複素行列のうち、ユニタリ条件を満たし、かつ行列式が1であるもの全体から成る群である。ここでユニタリであるとは、複素内積を保つことを意味し、行列式が1であるとは、全体の位相的な「体積」が保存されることを意味する。より直感的に言えば、 $SU(3)$ は、三つの成分から成る系に対して、その全体構造を壊さずに可能な回転・変換を行う対称性の群である。

本研究において重要なのは、この $SU(3)$ を、物理学における厳密な用途そのまま導入することではなく、三つの独立した方向性を内包しつつ、それらが相互関係の中で一つの全体を成す構造として理解する点である。ヌーソロジーにおいて、乳幼児期の口唇期・肛門期・男根期という三つの基本的構えが、思春期において一つの全体構造へ再編成されると考えるとき、 $SU(3)$ は、この「三つが一つの全体を成す」という構造的器として読むことができる。したがって、本研究における $SU(3)$ の意義は、単なる抽象代数的対象ではなく、三重構造の統合を表す数理的形式として位置づけられる。

群そのものは連続的な変換全体を表しているが、その内部構造を理解するためには、しばしばその無限小変換の集まりとしてのリー代数に注目する。 $SU(3)$ に対応するリー代数は、通常 $\mathfrak{su}(3)$ と書かれ、 $SU(3)$ の近傍で起こる微小な変換の方向を表す。直感的に言えば、群が「実際に行われる連続変換の全体」であるのに対し、リー代数は「どの方向へ変換しうるか」を示す接空間的な骨格である。本研究で後に扱う各種の生成子は、このリー代数の側で与えられる。

$SU(3)$ のリー代数 $\mathfrak{su}(3)$ は、実次元として8次元を持つ。これは、 $SU(3)$ が本質的に八つの独立な変換方向を持つことを意味する。物理学では、これらはしばしば Gell-Mann 行列に対応する八つの生成子として表され、一般に λ_1 から λ_8 までで記述される。本研究でも、この $\lambda_1 \sim \lambda_8$ を、 $SU(3)$ の基本的な構造単位として用いる。ただし、この段階ではまだ、それぞれの λ に心理学的意味づけを与えるのではなく、まずは「 $SU(3)$ を構成する八つの独立な方向性」として把握しておく。

ここで、「生成子」とは何かを簡単に確認しておきたい。生成子とは、群における無限小変換の基本単位であり、連続変換を局所的に方向づける要素である。すなわち、ある生成子は「どのような変化が起こりうるか」を示す最小の方向ベクトルのような役割を持つ。したがって、 $SU(3)$ の八つの生成子とは、この群が持つ変換可能性の基本方向を八つに分解したものである。本研究では、後に各生成子の特性——固定性、等化性、遷移性、判定性など——が、エニアグラムの各タイプに見られる基本特性と対応しようという立場をとるが、その前提として、まずは「各タイプが単なるラベルではなく、ある変換方向の構造的表現として読みうる」という視点をここで確保しておく必要がある。

また、 $SU(3)$ を本研究で用いる際に重要なのは、それが単なる「八つのばらばらな方向の集合」ではないという点である。 $SU(3)$ の生成子は、互いに独立であると同時に、一定の交換関係によって結びつけられており、全体として一つの整合的な対称構造を成している。つまり、ある生成子の意味は、単独で決まるのではなく、他の生成子との関係の中で初めて定まる。この点は、エニアグラムにおける各タイプもまた、単独で理解されるべきものではなく、他のタイプとの隣接性・対向性・循環関係の中でその意味が立ち上がる、という本研究の立場と深く対応している。

したがって、本研究において $SU(3)$ を導入する意味は、単に「九タイプに何かを割り当てるための器」を得ることではない。むしろ、個別の単位が、全体の中で相互関係を保ちながら配置される構造を与える点に、 $SU(3)$ の重要性がある。すなわち、後にエニアグラムの九タイプを数理的に配置するとき、本研究が重視するのは、それぞれのタイプがどこに置かれるかだけでなく、それらがどのような全体的秩序の中で隣接し、分割され、循環するかという点である。この意味で、 $SU(3)$ は、エニアグラムの「九つの要素」を記述するためというより、九つの要素から成る一つの配置系を記述するために導入される。

もっとも、ここで注意しなければならないのは、 $SU(3)$ のリー代数そのものは8生成子から成っており、エニアグラムの九タイプとそのまますべてのタイプと対応するわけではないという点である。この問題に対して本研究では、次節で述べるように、 λ_8 を各参照面のうちRB・GBに固有の判定軸として二方向に分解することで、九つの構造単位を導く。ここではあらかじめ、 $SU(3)$ がもともと八つの独立方向を持つ構造であることを確認しておけば十分である。

以上のように、本研究における $SU(3)$ の基本構造は、第一に、三成分を含む全体構造を保つ対称性として理解され、第二に、その三成分からRG・RB・GBという三つの二成分面を自然に生み出す構造として把握され、第三に、その内部に八つの独立した変換方向を持つリー代数として理解される。そして第四に、それらの方向は互いに関係し合いながら一つの配置系を形成する。この四点が、本研究における $SU(3)$ 理解の出発点である。

次節では、この八つの生成子のうち λ_8 を各参照面のうちRB・GBに固有の判定軸として分解することで、本研究がなぜ $SU(3)$ を「九点配置」として扱うのかを説明し、エニアグラムの九タイプと対応づけるための構造的根拠を明示する。

2. 生成子配置と9点への展開

前節で確認したように、SU(3)のリー代数su(3)は、八つの独立した生成子を持つ。これは、SU(3)が本質的に八つの独立した変換方向を持つことを意味する。本研究が対応させようとするエニアグラムは九つのタイプから成るが、この一見した不一致は、代数構造そのものの拡張によってではなく、「身体化 (embodiment)」という追加的な構造的制約の導入によって解釈される。この制約のもとで、対角生成子 λ_8 が三面構造の確定を通じて二つの判定軸へと機能分化することにより、九つの有効配置点が自然に導かれる。

通常SU(3)では八つの生成子が二次元のカルタン平面として一体的に扱われるが、本研究では身体三軸 (前後・上下・左右) の導入によってRG・RB・GB面をそれぞれ独立した基準面として確定させる。この身体化という制約を前提とするとき、対角生成子 λ_8 が各面固有の判定軸HrbとHgbへと機能分化し、結果として八つの生成子からSU(3)の内部に潜在する区別構造の特定の現れとして九つの有効配置点が導かれる。以下ではこの論理を順を追って説明する。

su(3)の八つの生成子は、その構造的役割によって大きく二つに分けられる。一つは、対角生成子 λ_3 および λ_8 であり、これらはカルタン部分代数を構成し、系の状態を分類・判定する基準軸として機能する。もう一つは、非対角生成子 $\lambda_1 \cdot \lambda_2 \cdot \lambda_4 \cdot \lambda_5 \cdot \lambda_6 \cdot \lambda_7$ であり、これらは成分間の混合・遷移を担う変換方向を表す。

対角生成子のうち $\lambda_3 = \text{diag}(1, -1, 0)$ は、R成分とG成分の差を立てながらB成分を中立化するため、RG面に固有の判定軸としてそのまま機能する。これに対して $\lambda_8 = (1/\sqrt{3})\text{diag}(1, 1, -2)$ は、R成分とG成分を等しく扱いながらB成分との差を全体的に調整する構造を持つ。すなわち λ_8 はR↔G置換に対して不変であり、RとGを区別しない。この意味で λ_8 は特定の二成分面に固有の判定軸ではなく、三面全体のバランスを調整する大域的な生成子として理解される。

ここで、本研究がなぜ三つの参照面 (RG・RB・GB) を独立した基準面として扱うのかを明示しておく必要がある。量子色力学 (QCD) などSU(3)を用いる通常の物理学では、R・G・Bはクォークの色荷を表す三成分であり、 λ_3 と λ_8 という二つの対角生成子は二次元のカルタン平面として一体的に扱われる。三つの参照面を独立した基準面として個別に読み出すことは通常は行わない。

これに対して本研究では、エニアグラムという身体化した現実の人間の性格構造を扱うため、抽象的なSU(3)に身体化という追加的な構造的制約を導入する必要性が生じる。具体的には、IV-2・IV-3で詳しく述べるように、RG・RB・GB面にそれぞれ前後・上下・左右という身体三軸を対応させる。この操作によってRG・RB・GB面がそれぞれ独立した基準面として確定する。そして、この身体化という制約のもとで初めて、各面にその面固有の判定軸が定まることになる。

RG・RB・GBという三つの参照面がそれぞれ独立した基準面として確定するとき、各面に固有の「差を立てる判定軸」が必要となる。その理由は次のように理解される。RG面が独立した基準面として確定するとは、「R成分とG成分の関係がB成分から切り離されて、それ自体として意味を持つ」ということである。このとき、その面の内部で「RとGのどちらに近いか」を測る基準がなければ、その面は「存在するが何も判定できない面」になってしまう。判定できない面は「独立した基準面」

として機能しない。したがって、RG面が独立した基準面として機能するためには、RG面の内部でRとGを区別できる軸、すなわち「差を立てる判定軸」が必要条件として存在しなければならない。

さらに、この判定軸がRG面に「固有」であるためには、B成分の影響を受けてはならない。もしBの影響を受ける軸でRとGを測ろうとすると、「RとGの差」なのか「BとR・Gの差」なのかが混在してしまい、「RG面に固有」とは言えなくなる。したがって、RG面固有の判定軸はRとGだけを区別し、Bを中立化する（Bの影響をゼロにする）軸でなければならない。これが「第三成分を中立化する」という要請の理由である。この要請を数学的に言い換えれば、各面に対して「その面を構成する二成分だけを区別し、第三成分を中立化する」カルタン方向が存在しなければならない、ということである。

なお、各面に固有の判定軸が必要であるという要請は、三面を独立した基準面として扱うという本研究の設計思想に由来するものであり、論理的な絶対必然ではなく、身体化という制約のもとでの必然として理解されるべきである。

RG面については λ_3 がこの要請をそのまま満たす。しかしRB面の判定には「RとBを区別しGを中立化する」軸が、GB面の判定には「GとBを区別しRを中立化する」軸がそれぞれ必要である。 λ_3 単独も λ_8 単独もこれを満たさないが、カルタン部分代数は2次元であるため、その内部で λ_3 と λ_8 の線形結合として、

$$\text{Hrb} \propto -\lambda_3 + \sqrt{3}\lambda_8 = \text{diag}(-2, 0, 2) \times \text{定数}$$

$$\text{Hgb} \propto \lambda_3 + \sqrt{3}\lambda_8 = \text{diag}(0, 2, -2) \times \text{定数}$$

という二方向が一意に定まる。HrbはまさにRとBだけを区別しGを中立化し、HgbはGとBだけを区別しRを中立化する。すなわちHrb・Hgbは、カルタン部分代数の内部で三面構造の確定が特定の射影方向を選び出すことによって顕在化する判定軸であり、その出現は代数の拡張によって得られるものではなく、身体化という制約のもとでSU(3)の内部に潜在する区別構造が選択的に現れたものとして理解される。

ここで改めて確認しておくべき点がある。Hrb・HgbはSU(3)の数学の中に潜在的に存在しているものの、それを「三面それぞれの固有判定軸」として読み出すのは本研究固有の操作である。この読み出しが正当化されるのは、前後・上下・左右という身体軸をSU(3)の三成分に対応づけるという身体化の操作によってであり、この身体化という制約のもとで初めて、 $\lambda_3 \cdot \text{Hrb} \cdot \text{Hgb}$ が各面固有の判定軸として機能的意味を持つようになる。したがって、 λ_8 はHrb・Hgbの「背景にある基盤」というよりも、より正確には「三面への特化以前の大域的調整役」として理解される。三面が独立した基準面として確定する過程で、 λ_8 はHrbとHgbという二方向へと機能的に再配分され、 λ_8 それ自体は有効配置点として前景化しなくなる。

以上より、エニアグラムの九タイプに対応する有効配置点は、非対角生成子 $\lambda_1 \cdot \lambda_2 \cdot \lambda_4 \cdot \lambda_5 \cdot \lambda_6 \cdot \lambda_7$ 、RG面の判定軸 λ_3 、そしてRB面とGB面の判定軸Hrb・Hgbの九点として自然に導かれる。この九点構造は代数の拡張によって得られるものではなく、SU(3)の対称性と身体化という制約との相互

作用によって生じる表現上の再構成として理解される。その前提として身体化という操作が不可欠である。

このように、八生成子から九有効配置点への展開は、外部からの付加によるものではなく、 $SU(3)$ 内部の対称性が身体化を通じた三面構造として具体化される過程において生じる機能分化として理解される。この意味で、本研究が採用する九点配置は、 $SU(3)$ の厳密な代数構造を変更するものではなく、その内部に潜在する区別構造の特定の現れとして位置づけられる。

この九点配置の意義は、後に示す 3×3 構造を準備する点にある。九つの有効配置点は、単なる円環上の連なりとしてではなく、三つの三項構造へと再編成可能な配置として扱うことができる。この再編成可能性こそが、後に三センター、三つの発達段階、三つの情動状態、さらには統合・分裂方向（六点環と三点環という二重構造）を導く土台となる。したがって、本節での九点配置の導入は、後の議論全体を支える構造的前提である。

本節では、 $SU(3)$ の八生成子が身体化という制約を通じた三面構造によって λ_8 の機能分化を経て九つの有効配置点へと展開することを確認した。次節では、この九点系の内部にさらに秩序を与えるものとして、カルタン部分代数と A_2 ルート系を取り上げ、 $SU(3)$ の内部構造がどのように三重性と循環性を含んでいるのかを整理する。

3. カルタン部分代数と A_2 ルート系

前節では、 $SU(3)$ を、八つの生成子と一つの基準点から成る拡張的な九点配置系として扱うための枠組みを確認した。本節では、その内部にさらに秩序を与えるものとして、カルタン部分代数と A_2 ルート系を取り上げる。これらは、 $SU(3)$ の内部構造において、どこに安定軸があり、どこに変換の方向があるのかを理解するための基礎となる。本研究において後に重要となる三点的安定構造と六点的循環構造は、まさにこのカルタン構造とルート構造から読み取られる。

まず、リー代数 $\mathfrak{su}(3)$ の内部には、互いに可換な生成子から成る最大の部分代数が存在する。これをカルタン部分代数という。 $SU(3)$ の場合、その次元は 2 であり、通常は二つの独立な対角方向によって張られる。物理学では、これに対応する代表的な生成子として、先述のように λ_3 と λ_8 が用いられる。本研究において重要なのは、これら二つが「他の方向を分類し、全体に基準を与える軸」として働く、という点である。すなわち、カルタン部分代数とは、変換そのものを引き起こす方向というよりも、変換がどのような位置関係にあるかを規定する座標軸にあたる。

この意味で、カルタン部分代数は、 $SU(3)$ の内部における安定的な基準面を与える。後に本研究で三点環を「有効カルタン点の循環」として読むのは、この安定軸の発想に基づく。もっとも、数学的に厳密な意味では、カルタン部分代数は二次元であり、三つの独立な生成子から成るわけではない。しかし本研究では、この二次元の基準面上に生じる複数の安定領域を、身体化と対称性の破れを通じて三つの有効安定点として読む立場をとる。その意味で、本節で押さえておくべきなのは、まず $SU(3)$ の内部に「変換を支配する基準面」が存在するという点である。

次に、このカルタン部分代数に対して、可換ではない他の生成子は、カルタン面に対する相対的位置によって分類される。このとき現れるのが、いわゆるルートである。ルートとは、カルタン部分代数に対して各非対角生成子がどのような固有的方向を持つかを表すものであり、直感的には、カルタン面を基準としたときの変換方向のベクトルにあたる。SU(3) の場合、このルートは全部で六つ存在し、互いに対をなすかたちで配置される。

この六つのルートは、通常、二次元平面上に正六角形として表される。これが、SU(3) に対応する A_2 ルート系である。 A_2 ルート系とは、SU(3) の非対角的な変換方向が、二次元平面上で六方向に等角的に分布していることを示す幾何学的表現である。ここで重要なのは、SU(3) の内部において、変換方向が無秩序に散らばっているのではなく、六方向の対称的配置をなしている、という点である。

本研究において、この A_2 ルート系が重要なのは、後にエニアグラムの統合・分裂方向を読む際に現れる六点環の数学的骨格を与えるからである。すなわち、エニアグラムにおける六つの主要な遷移点の循環は、単なる経験的な矢印の集まりではなく、SU(3) の内部にすでに存在している六方向の変換可能性として理解できる。言い換えれば、 A_2 ルート系は、本研究が「変化の回路」と呼ぶ六点環に対して、その原型を与えている。

つまり、SU(3) の内部構造は二つの異なる種類の秩序を同時に持っていると言える。ひとつは、カルタン部分代数が与える安定的な基準面であり、もうひとつは、 A_2 ルート系が与える六方向の変換ベクトルである。前者は「どこに位置づけられるか」という座標的・安定的な秩序を担い、後者は「どの方向へ移りうるか」という運動的・遷移的な秩序を担う。本研究が後に、エニアグラムの内部に三点環と六点環の二重構造を見出すのは、まさにこの SU(3) 自体が、すでにこの二重性を含んでいるからである。

さらに、 A_2 ルート系は単に六つの方向が並んでいるだけでなく、互いに対向し、かつ巡回しうる構造を持っている。六つのルートは、正負の対をなしつつ、順にたどれば一周する閉路を形成する。この点は、本研究において六点環を単なる六つの点の集合としてではなく、循環する変換系列として読むうえで重要である。すなわち、 A_2 ルート系は、「六つある」という数の問題だけでなく、「その六つが閉路をなしうる」という位相的性質を含んでいる。この閉路性が、エニアグラムの変化方向を後に数理的に支えることになる。

一方で、カルタン部分代数の側は、ルート系のような露骨な循環を持つわけではない。むしろ、それは変換を分類し、全体に基準を与える静的な構造である。しかし本研究では、この静的基準面が、身体化された対称性の破れを受けることで、単なる二次元の座標面ではなく、複数の安定領域を分節する場として読まれる。その結果、厳密には二次元であるカルタン構造が、本研究のモデルの中では三つの有効安定点として再編成され、三点環の基礎を与えることになる。したがって、この段階では、カルタン部分代数を「3点がある場所」と理解する必要はない。ここで必要なのは、あくまで、後の有効安定点を生み出す基準面としての性格を確認することである。

このように、 $SU(3)$ の内部には、カルタン部分代数による基準面と、 A_2 ルート系による六方向の変換構造とが共存している。この二重性は、本研究の後半で示されるエニアグラムの

- 三要素的な安定分割
- 統合・分裂方向としての六点遷移
- 三点環と六点環の重なり

を理解するうえで、最も基礎的な数学的骨格となる。ここで重要なのは、これらがまだ心理学的解釈のものではない、という点である。本節で確認したのは、あくまで $SU(3)$ の内部に、安定と遷移の二重構造を読みうるだけの数学的条件がすでに存在している、ということである。

以上をまとめれば、カルタン部分代数は、 $SU(3)$ における基準的・安定的な座標面を与え、 A_2 ルート系は、その座標面を基準とした六方向の変換系列を与える。前者は後に 三点環の原理へ、後者は後に 六点環の原理へと接続される。したがって、本研究がエニアグラムに見出そうとする二重構造は、外部から恣意的に持ち込まれるものではなく、 $SU(3)$ 自体の内部構造に根ざしたものである。

本節では、カルタン部分代数と A_2 ルート系が、 $SU(3)$ における安定と遷移の二重性を支えていることを確認した。次節では、この構造をさらに明示的に取り出し、本研究の中核となる六点環と三点環の構造的可能性をより直接的に整理する。

4. 三点環と六点環の構造的可能性

前節で確認したように、 $SU(3)$ の内部には、カルタン部分代数による基準面と、 A_2 ルート系による六方向の変換系列とが共存している。本節では、この二重構造が、本研究において後にエニアグラムへ対応づけられる 六点環 と 三点環の原型として、どのように読みうるかを整理する。ここで重要なのは、まだ心理学的意味づけを行うことではなく、あくまで $SU(3)$ の構造の内部に、そうした二重循環を受け止めうる配置可能性がすでに存在していることを示す点にある。

まず、 A_2 ルート系の六つのルートは、二次元平面上に正六角形として表される。この幾何学的配置は、単に「六つの方向がある」という事実を示すだけではない。むしろ、それらの方向が互いに等角的に配置され、正負の対を成し、順にたどれば一周する巡回可能な閉路を形成していることが重要である。すなわち、 $SU(3)$ のルート構造は、初めから「六方向に並んだ変換可能性」として存在するだけでなく、それらが連続的な回転や順次的な遷移として読めるだけの位相的性質を含んでいる。

この性質に注目すると、 A_2 ルート系は、本研究が後に扱う 六点環、すなわちエニアグラムにおける主要な遷移系列に対して、その数学的原型を与えていると考えることができる。ここで言う 六点環とは、六つの位置が単に存在するという意味ではなく、一つの環としてたどりうるということであ

る。SU(3) のルート系において、各ルートは他のルートと孤立しているのではなく、六角形上の隣接関係を通じて連続的な巡回を構成しうる。したがって、本研究における 六点環は、外部からエニアグラムに付け加えられた操作ではなく、SU(3) 自体の内部にある六方向の巡回性を、配置モデルとして取り出したものとみなすことができる。

一方、カルタン部分代数は、ルート系のような露骨な巡回を直接的には示さない。カルタン部分代数が与えるのは、あくまで変換を分類し、各方向を位置づけるための静的な基準面である。しかし、本研究において注目するのは、この静的基準面が、後に身体化された対称性の破れを受けることで、単なる連続的座標面ではなく、複数の安定領域を生み出す場として読まれる点である。すなわち、厳密な数学的意味では二次元であるカルタン構造が、本研究のモデルにおいては、いくつかの安定的な位置のまとまりとして分節され、そのまとまりが後に「有効カルタン点」として取り出されることになる。

この意味で、三点環とは、SU(3) の内部にあらかじめ「三つの生成子がある」ということを意味するのではない。そうではなく、カルタン部分代数が与える基準面と、そこに対する身体化された選択の結果として、三つの安定的な位置が有効に区別されるということである。本研究が後に 三点環を「有効カルタン点の循環」として読むのは、この安定位置の三重性に基づく。したがって、ここで言う 三点環は、厳密なリー代数の生成子概念の問題ではなく、静的基準面が分節されたときに立ち上がる三つの有効安定領域の問題である。

以上を踏まえると、SU(3) の内部には、すでに二つの異なる循環の原型が読み取れる。第一は、 A_2 ルート系に由来する六方向の巡回であり、これは変換・遷移の環として理解できる。第二は、カルタン部分代数に由来する安定的な基準面が、後に複数の有効安定位置へと分節されることによって生じる三重性であり、これは安定・再配置の環として理解できる。本研究が、後にエニアグラムの中に 六点環と三点環の二重構造を見るのは、このように SU(3) 自体が、変換の側と安定の側において、異なる循環可能性を内包しているからである。

ここで重要なのは、この二重構造が、単に「六つ」と「三つ」という数の対応にとどまらないことである。六点環と三点環は、それぞれ別の役割を担っている。六点環は、主としてある位置から別の位置へ移る運動性を表す。すなわち、それは変化、推移、遷移、あるいは別の位相への移動の原理である。これに対して 三点環は、主として変化の後にどこへ落ち着くか、どこで再び位置づけられるかという安定化の原理を担う。したがって、六点環は動的な流れを、三点環はその流れを受け止める安定的な節点を表している。この意味で、本研究における二重構造は、単なる二つの図形ではなく、運動と安定の役割分担を含んだ構造である。

また、この二重構造は、互いに独立して並存するだけでなく、後に重ね合わされることによって、一つのより複雑な配置系を形成する。すなわち、六点環だけでは、変化の流れは表現できても、それがどこで安定し、どう再編成されるかを十分には説明できない。他方、三点環だけでは、安定領域の分節は表せても、そこに至る具体的な移行の経路を十分には表現できない。両者が組み合わさる

ことによって初めて、変化しつつ安定する構造、あるいは安定しながら変化する構造が表現可能になる。本研究におけるエニアグラムの読みは、まさにこの二重性の重なりに依拠している。

この点から見ると、本研究がエニアグラムに見出そうとする循環構造は、単なる図的な対応や象徴的な類推ではない。むしろそれは、 $SU(3)$ の内部に存在する、変換系列としての六重性と、安定領域としての三重性という、二つの異なる秩序の重ね合わせとして理解される。したがって、本研究において六点環と三点環を取り出すことは、 $SU(3)$ に対して外部から意味を押しつけるのではなく、その内部構造を、配置モデルとして読めるかたちに展開することに他ならない。

もっとも、本節の段階では、これらあくまで「構造的可能性」として示されているにすぎない。すなわち、ここで確認したのは、 $SU(3)$ の内部に、六点環および三点環として読めるだけの数学的条件が存在しているということであり、それがどのようにして人間の意識発達やエニアグラムの九タイプ構造に具体的に接続されるかは、なお別の段階を必要とする。そのためには、抽象的な対称構造が、身体の介入を通じて具体的な方向性と順序を持つ必要がある。すなわち、対称性の破れと身体化の過程が導入されなければならない。

以上のように、 $SU(3)$ の内部には、 A_2 ルート系に由来する六方向の巡回可能性と、カルタン部分代数に由来する三重の安定可能性とが共存している。本研究は、この二重構造を、後にエニアグラムにおける「変化の回路」と「安定の回路」の原型として読み替える。しかしその読み替えは、本節の段階ではまだ数学的可能性にとどまる。次章では、この純粋な構造に、前後・上下・左右という身体軸、ならびに発達段階と情動状態を導入することで、抽象的な $SU(3)$ 構造がどのようにして具体的な意識モデルへと移行しうるのかを検討する。

5. 本章の位置づけ

ここまで本章では、 $SU(3)$ の基本構造、八生成子と身体化を通じた λ_8 の機能分化による九有効配置点、カルタン部分代数と A_2 ルート系、そしてそこから読み取られる 六点環と三点環の構造的可能性を確認してきた。これにより、本研究がエニアグラムの九タイプ構造を $SU(3)$ と対応づけて論じるための、最小限の数学的骨格は提示されたことになる。

ただし、ここで確認されたのは、あくまで純粋な対称構造としての可能性にすぎない。すなわち、本章で示された $SU(3)$ は、三重性、循環性、安定と遷移の二重構造を内包してはいるが、それ自体としてはなお等方的であり、そこにはまだ「前後・上下・左右」といった身体的方向性も、「口唇期・肛門期・男根期」といった発達段階も、「欲求不満・満足・不安」といった情動状態も与えられていない。したがって、本章の段階では、エニアグラムに似た構造が数学的に配置可能であることは示されても、それがなぜ人間の意識発達や性格構造として具体化するのかは、まだ説明されていない。

この点において、本章の役割は明確である。本章は、エニアグラムの九タイプ構造が、少なくとも数理的には受け止めうるだけの骨格を $SU(3)$ の内部に持つことを示す、いわば純粋構造の提示を担っている。ここではまだ、数学的構造と心理学的意味とのあいだに、直接的な同一視は行っていない。むしろ重要なのは、後に心理学的・発達論的意味を受け取るための器として、 $SU(3)$ にどのような配置可能性があるかを先に確保しておくことであった。

したがって、本章で示した六点環や三点環も、この段階ではなお「変化の回路」「安定の回路」としての形式的可能性にとどまる。これらが、エニアグラムにおける統合・分裂方向や三センター、さらには各タイプの基本特性と結びつくためには、抽象的な対称性に対して、具体的な選択が導入されなければならない。その選択こそが、次章で扱う対称性の破れと身体化である。

すなわち、次章では、ここで確認した純粋な $SU(3)$ 構造に対して、身体の介入による前後・上下・左右という軸の導入、ならびに発達段階と情動状態の付与を通して、いかにして等方的な配置可能性が具体的な方向性と順序を持つ意識モデルへと移行するのかを論じる。言い換えれば、本章が「構造の器」を提示したとすれば、次章は、その器に身体的・発達の意味を流し込む段階にあたる。

この意味で、本章は、本研究全体の中で、数学と心理学、あるいは対称構造と意識発達論とを接続するための前提条件を整える章であった。以後の議論では、ここで確認した純粋構造を土台として、対称性の破れを経た具体的配置へと進み、その結果として、エニアグラムの九タイプ構造がどのようにして読み取られうるかを明らかにしていく。

IV. 対称性の破れと身体化

—抽象的 $SU(3)$ 構造から意識発達モデルへ—

本研究では、エニアグラムと $SU(3)$ の対応を考えるにあたり、全体として五層の構造を想定する。すなわち、 $SU(3)$ の純粋抽象相としての第-1層、純粋配置としての第0層、発達段階が導入される第1層、情動状態が導入される第2層、そして思春期以後の性格固定相としての第3層である。これらの層は、抽象的な対称構造が、身体化と発達を経て、具体的な性格配置として現れるまでの段階的な構成を示している。

ただし、本研究の中心的関心は、この五層すべてを同じ比重で扱うことにはない。とりわけ重要なのは、抽象的な $SU(3)$ 構造が、どのようにして具体的な方向性と配置秩序を持つ意識発達モデルへと移行するか、という点である。そのため本研究では主として第0層から第2層までを扱う。

なお、本研究における層構造は、ヌーソロジーの意識発達論における ψ 系列と対応関係を持つ。第-1層および第0層は $\psi 1\sim 8$ (胎児期) に対応し、この段階では $SU(3)$ の構造はいまだ現実の発達体験として刻まれておらず、イデア的な配置可能性として存在している。第1~2層は $\psi 10$ が乳幼児期において $\psi 1\sim 8$ をなぞる過程に対応し、ここで初めて現実の情動体験を通じた機能的固定が起きる。第3層

は思春期 (ψ 12前半) におけるSU(3)的再編成として、エニアグラムタイプの結晶化に対応する。ただし、この ψ 系列との対応の詳細な検討は次稿の課題とする。

第-1層は、SU(3)の内部対称性がいまだ身体空間の座標系へと埋め込まれておらず、前後・上下・左右という方向性も与えられていない純粋抽象相として定義される。この段階では、SU(3)は完全に等方的であり、いかなる方向への優先性も持たない。言い換えれば、第-1層はエニアグラム構造のイデア的基底として、後の全ての配置可能性を含んでいるが、それはまだいかなる具体的な形にも現れていない。

これに対して第0層においては、SU(3)の内部対称性はすでに前後・上下・左右という身体空間の座標系へと埋め込まれている。したがって、第0層には、後に配置図として可視化されるための座標的条件がすでに備わっている。しかしこの段階では、まだどのSU(2)部分代数(後の発達三段階)を実際の観測軸として採用するかという機能的選択は起こっていない。ゆえに、第0層は、身体空間への座標固定(embedding)が行われた段階ではあるが、なお対称性を保ったままの純粋配置相であり、実質的対称性の破れは、第1~2層における軸の選択と機能固定において初めて成立する。

以下では、まずこの第0層を、身体空間への埋め込みを受けた純粋配置の相として定義し、そのうえで、発達段階と情動状態が導入されることにより、いかにして具体的な配置構造が成立するかを順に検討する。

1. 第0層：純粋配置としてのSU(3)

まず第0層は、SU(3)の内部対称性が、前後・上下・左右という身体空間の座標系へとすでに埋め込まれてはいるが、なお力学的選択の起こっていない純粋配置の相として定義される。先述のように、「純粋配置」とは、座標そのものは与えられているにもかかわらず、まだどの軸が主導的な機能を担うか、どのSU(2)部分代数が観測軸として採用されるかが決まっていない状態を指す。したがって、第0層は、身体空間と無関係な抽象的真空ではなく、身体空間への座標固定はすでに済んでいるが、機能はまだ未固定である段階として理解されるべきである。

この意味で、第0層においては、前章で確認した九点配置、カルタン構造、 A_2 ルート系、六点環および三点環の構造的可能性は、すでに身体空間上で読み取られうる形に置かれている。たとえば、 $\lambda_1 \sim 3$ 、 $\lambda_4 \sim 5$ 、 $\lambda_6 \sim 7$ の各系列は、それぞれ異なる参照面と回転様式を持つものとして、前後・上下・左右の座標の中に位置づけられる。しかしこの時点では、それらはまだ「どの軸が現実の基底として働くか」という意味で選ばれてはいない。すなわち、第0層では、構造はすでに座標化されているが、まだ機能化されていないのである。

したがって、第0層におけるSU(3)は、もはや完全に無方向な等方性そのものではない。より正確に言えば、それは、内部対称性が身体空間の中へ埋め込まれることによって、方向を読み取りうる形にはなっているが、その方向にまだ優先順位は与えられていない状態にある。たとえば、前後・上下・左右という区別はすでに存在しているが、それらはなお対等な座標軸として共存しており、どの軸が中心的な観測軸となるかは未決定である。この意味で、第0層は、「方向が存在しない相」では

なく、「方向は存在するが、まだどれも主導的には選ばれていない相」として理解するのが適切である。

ここで重要なのは、第0層が「未分化」であることを意味するわけではない、という点である。むしろ、第0層には、後に身体化された配置へと展開しうるだけの秩序が、すでに座標的なかたちで存在している。A₂ルート系に由来する六方向の変換可能性は、この段階ですでに六点的な巡回構造の原型を与えているし、カルタン部分代数に由来する基準面も、後に有効安定点として読みうる三重性の基礎をすでに含んでいる。したがって、第0層とは、何も決まっていなかった空白ではなく、意味づけ以前にすでに秩序立った身体空間上の配置相である。

このように考えると、第0層は、本研究におけるエニアグラム構造のイデア的相と呼ぶことができる。ここでいうイデア的とは、まだ心理学的意味や発達の機能が具体化していないということであって、構造そのものが曖昧であるという意味ではない。むしろ逆に、第0層では、後に現実の意識発達や性格配置として具体化されるべき秩序が、座標的原型としてもっとも純粋な形で保持されている。したがって、第0層においては、エニアグラムの九タイプそのものが完成された形で存在しているわけではないが、少なくとも後に九タイプとして読まれることになる構造単位の配置条件は、ここですでに準備されている。

本研究において第0層が重要なのは、後に現れるすべての配置が、この純粋配置を基盤として成立すると考えるからである。もし最初から発達段階や情動状態、あるいは特定の観測軸の選択を直接導入してしまえば、後の配置は、単なる経験的な割り当てに見えてしまいかねない。しかし、第0層を明示的に設定することによって、本研究は、後に導入される口唇期・肛門期・男根期や、欲求不満・満足・不安といった区別が、すでに身体空間に埋め込まれた秩序に対する具体的な機能選択であることを示すことができる。したがって、第0層は、恣意的な意味づけを避けるための理論上の基盤であり、以後の議論全体の整合性を支える。

ここで改めて強調しておくべきは、第0層において行われているのは、座標固定 (embedding) であって、まだ実質的対称性の破れではない、という点である。すなわち、第0層では、SU(3)の純粋な内部対称性が身体空間の座標系へと写し込まれ、前後・上下・左右という方向の中で可視化されるようになる。しかしそのこと自体は、どの軸が実際に主導権を持ち、どのSU(2)部分代数が観測の基底として働くかを決定するものではない。この段階では、構造は配置されているが、まだ機能は選ばれていない。したがって、第0層は、対称性を保ったまま、配置だけが準備される段階なのである。

このことは、第0層における「三重性」や「六重性」の理解にも関わる。ここでの三重性は、まだ固定された発達段階そのものではなく、後に発達段階として選び取られうる三つの位置的差異である。同様に、六重性も、後に統合・分裂の方向として具体化されるべき六つの動的系列の原型として存在する。したがって、第0層は、すでに身体空間の中に置かれてはいるが、まだ時間化も情動化もされていない。ここで起こっているのは、「身体の中で読めるようになった」ということまでであり、「どのように働くか」はまだ決まっていないのである。

以上のように、第0層は、SU(3)の内部構造が、身体空間への埋め込みを受けながらも、なお未機能化のまま保持されている相である。そこには、後に九タイプ構造へと展開しうる九点の配置可能性、三重の分節可能性、六重の遷移可能性がすでに存在しているが、それらはなお発達論的・情動的意味を持たない。この純粹配置こそが、以後に導入される発達段階や情動状態に対して、具体的な選択と意味づけの基盤を与える。

したがって、第0層とは、本研究におけるすべての配置モデルの出発点であり、純粹な対称構造が、身体空間の中で可視化されつつ、なお対称性を保ったまま存在している座標的原型である。次節では、この座標固定された純粹配置に対して、より明示的に前後・上下・左右という身体的軸がどのような意味で導入されるのか、そしてそれが各SU(2)部分代数の読みをどのように方向づけるのかを検討する。

2. 身体軸の導入

前節で確認したように、本研究においては、SU(3)の内部対称性は、すでに身体空間の座標系へと埋め込まれる可能性を持った構造として扱われている。したがって、本節でいう「身体軸の導入」とは、無方向な抽象構造に外部から初めて身体性を付け加えることを意味するのではない。むしろここで問題となるのは、SU(3)の三重構造を、前後・上下・左右という身体空間の中で、どのような構造的意味を持つ軸として読むか、という点である。すなわち、本節の課題は、身体空間を単なる図示上の便宜としてではなく、SU(3)の内部構造を読み解くための座標的読解装置として明示化することにある。

本研究において身体的軸とは、単なる三次元空間の幾何学的方向ではない。それは、人間の身体が世界を経験する際の、最も基礎的な定位の形式を表している。人間は世界を、つねに「前」と「後」、「上」と「下」、「左」と「右」という非対称な関係の中で経験する。このとき、前後・上下・左右は、外界に客観的に置かれた単なる座標ではなく、身体を中心として立ち上がる経験的方向性である。したがって、本研究でこれらの軸を導入することは、SU(3)の抽象的対称構造を、人間の意識にとって経験可能な差異へと接続する最初の条件を与えることを意味する。

この身体軸の読解にあたり、本研究では各SU(2)的部分系列を、参照面・垂直軸・回転軸という三つ組として理解する。すなわち、各系列は、ある二次元的な参照面を持ち、その面に対して垂直な方向を一つの基本軸として持つと同時に、その面を回転させるための別の軸を持つものとして読まれる。この区別によって、各系列は、単に「どの方向に対応するか」という静的な位置づけだけでなく、どの方向を基準として、どの方向を運動軸として持つかという、より立体的な構造として記述される。本研究では、この三つ組の関係を、各系列ごとに身体空間の中で可視化する(図1~3)。

本研究では身体空間における三方向(前後・上下・左右)を、SU(3)の三つの参照面(RG・RB・GB)と構造的同型として対応づける。この対応は象徴的対応ではなく、三方向関係を最小次元で同時に表現する群構造としてSU(3)を用いることから自然に導かれる。

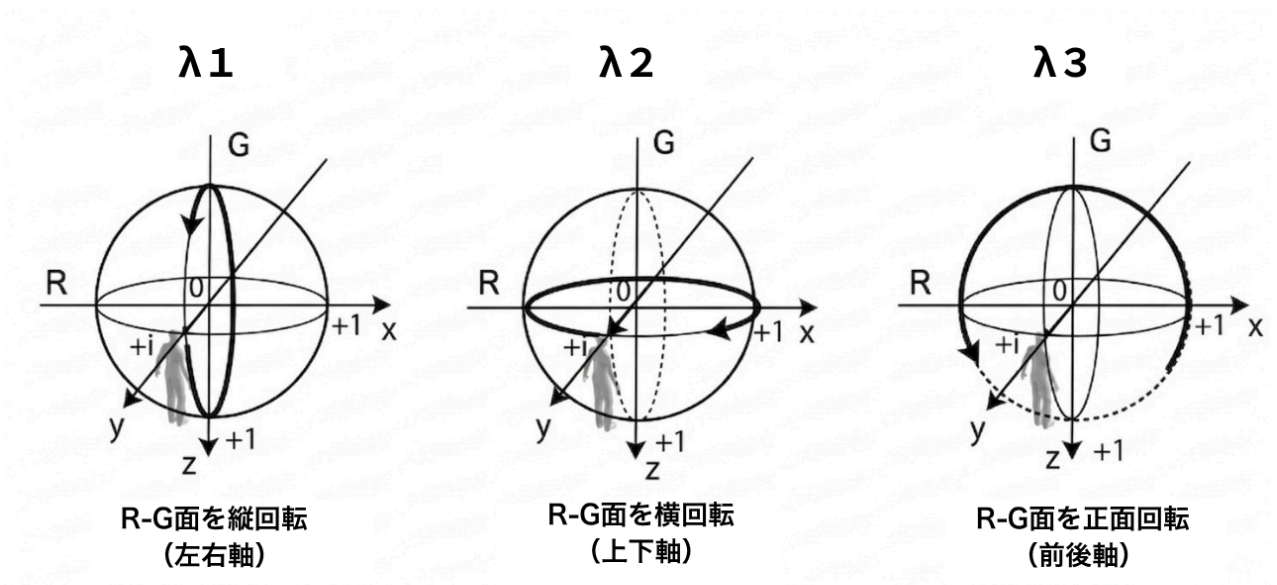


図1. λ1~3への身体軸の導入

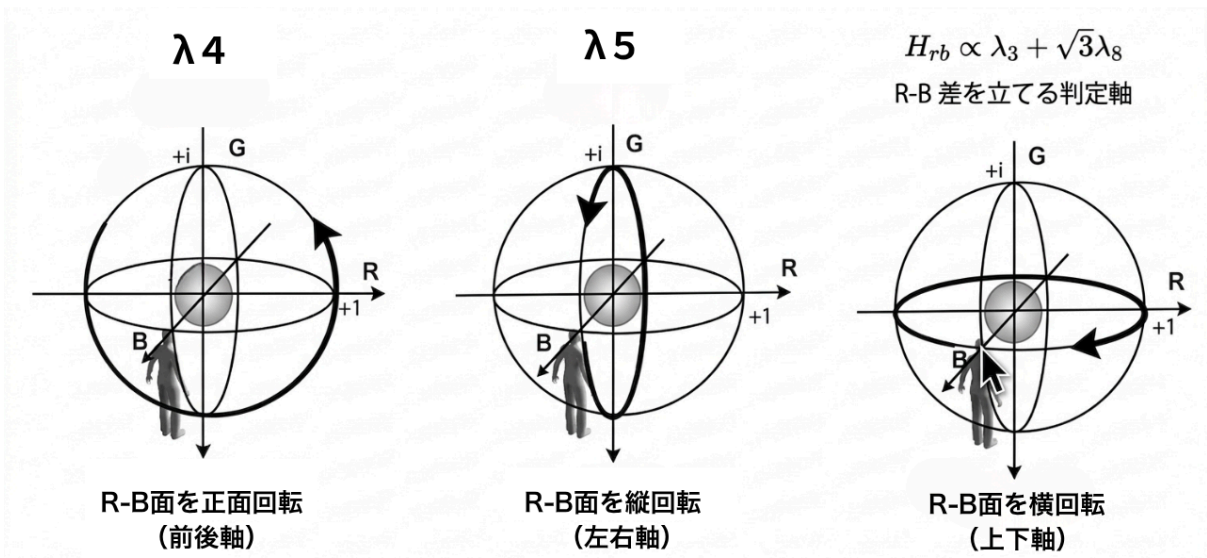


図2. λ4~5・Hrbへの身体軸の導入

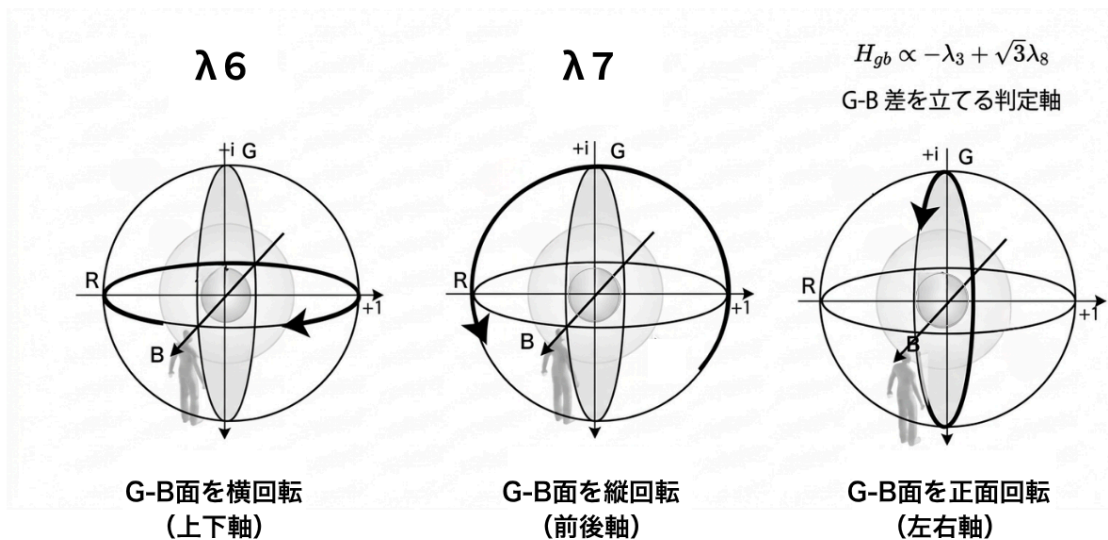


図3. $\lambda 6 \sim 7 \cdot H_{gb}$ への身体軸の導入

$\lambda 1 \sim 3$ の系列はRG面を参照面とし、 $\lambda 4 \sim 5$ の系列はRB面を参照面とし、 $\lambda 6 \sim 7$ の系列はGB面を参照面とする。これらの系列は、抽象的な生成子の集合としてのみ理解されるのではなく、身体空間の中で異なる方向性と回転様式を持つ構造単位として把握されるべきである。したがって、ここで問題となっているのは、数学的対象の単なる模式図ではなく、後に発達段階や情動状態へと接続されるべき、身体化された配置構造の原型である。

まず、 $\lambda 1 \sim 3$ の系列はRG面を参照面とする。このとき、本研究では、この参照面に対して垂直な軸が前後軸であることから、 $\lambda 1 \sim 3$ を全体として「前後」に対応する系列として定義する。すなわち、 $\lambda 1 \sim 3$ は、身体空間において前後方向を基準的に担う系列である。他方で、この参照面そのものを回転させる軸も存在し、それは前後軸とは別の方向として与えられる。したがって、 $\lambda 1 \sim 3$ は、「前後」という垂直軸を持つだけでなく、その構造を変化させるための回転軸をも併せ持つ。

次に、 $\lambda 4 \sim 5$ の系列はRB面を参照面とする。この場合、本研究では、この参照面に対して垂直な軸が上下軸であることから、 $\lambda 4 \sim 5$ を全体として「上下」に対応する系列として定義する。すなわち、 $\lambda 4 \sim 5$ は、身体空間において上下方向を基準的に担う系列である。同時に、この参照面にもまた回転軸があり、参照面に垂直な軸とは別の方向から、その面の運動を規定している。したがって、 $\lambda 4 \sim 5$ もまた、単に一つの方向を表すのではなく、基準軸と運動軸の二重性を持つ系列として理解される。

さらに、 $\lambda 6 \sim 7$ の系列はGB面を参照面とする。このとき、本研究では、この参照面に対して垂直な軸が左右軸であることから、 $\lambda 6 \sim 7$ を全体として「左右」に対応する系列として定義する。すなわち、 $\lambda 6 \sim 7$ は、身体空間において左右方向を基準的に担う系列である。ここでも同様に、参照面その

ものを回転させるための回転軸が存在し、系列内部の運動可能性を支えている。したがって、 $\lambda 6 \sim 7$ もまた、静的な方向と動的な回転様式を併せ持つ構造単位として位置づけられる。

以上をまとめれば、本研究では、各系列を次のように定義することになる。すなわち、

- $\lambda 1 \sim 3$ は、RG 面を参照面とし、その垂直軸が前後軸であることから、前後系列である。
- $\lambda 4 \sim 5$ は、RB 面を参照面とし、その垂直軸が上下軸であることから、上下系列である。
- $\lambda 6 \sim 7$ は、GB 面を参照面とし、その垂直軸が左右軸であることから、左右系列である。

この定義は、本研究における身体的三軸の基本対応を与えるものであり、以後の発達段階・情動状態・タイプ配置のすべてに先立つ基礎的な座標対応となる。

ただし、ここで強調しておくべきなのは、この段階で与えられているのは、あくまで身体空間上の座標対応であって、まだどの軸が実際に観測軸として機能するかという選択ではない、という点である。すなわち、前後・上下・左右という三軸はすでに明示的に読み取られているが、それらはいまだ主従の定まらない座標系として共存している。したがって、本節での身体的軸の導入は、第0層における座標固定の内容をより具体的に確定するものであって、まだ第1～2層における実質的対称性の破れそのものではない。換言すれば、ここでは「どのように読めるか」が確定されるのであって、「どれが選ばれるか」はまだ次の段階に属する。

さらに、本研究において重要なのは、各系列が垂直軸だけでなく、回転軸をも持つという点である。垂直軸は、その系列の基準的な方向を与えるが、回転軸は、その系列の内部における運動や位相変化の可能性を与える。したがって、各系列は、単なる静的な身体軸ではなく、静的な方向性と動的な回転性をあわせ持つ構造として理解されるべきである。

この観点から見ると、各生成子・判定軸は、どの系列に属するかという垂直軸の違いだけでなく、それぞれどの回転軸を持つかという点においても区別される。具体的には、 $\lambda 1$ は左右回転軸、 $\lambda 2$ は上下回転軸、 $\lambda 3$ は前後回転軸、 $\lambda 4$ は前後回転軸、Hrb は上下回転軸、 $\lambda 5$ は左右回転軸、 $\lambda 6$ は上下回転軸、 $\lambda 7$ は前後回転軸、Hgb は左右回転軸を持つものとして整理される。ここで重要なのは、これらの対応が外から恣意的に与えられたものではなく、各生成子・判定軸を、どの参照面に属し、どの垂直軸を基準とし、どの方向を回転軸として持つかという三つ組の構造から読んだとき、それぞれ自然に定まるという点である。

したがって、本研究で後に用いる九位置の基本配置は、前後→上下→左右という順序で整理されたRGB面の垂直軸を縦軸とし、同じく前後→上下→左右という順序で整理された回転軸を横軸とする3×3配置として構成されることになる。言い換えれば、各生成子・判定軸の独自性は、「どの方向を基準軸として持つか」と「どの方向を運動軸として持つか」という二重の差異によって与えられているのである。この二重軸構造は、後に第0層の基本配置を構成する際の基盤となる。

また、この身体的軸は、単なる個体身体の内部に閉じた方向ではない。それは、観察者が世界を定位する最小単位であると同時に、他者とのあいだで共有可能な座標系でもある。したがって、この三軸は、個人的な知覚方向であると同時に、後に対人構造や客観性の成立を論じる際の、自他間で共有されうる空間形式でもある。この意味で、身体的軸の導入は、単なる主観の側の問題ではなく、後の「配置の共有可能性」を支える基礎条件でもある。

以上のように、本研究における身体軸の導入とは、各 $SU(2)$ 的部分系列を、参照面・垂直軸・回転軸の三つ組として身体空間の中に明示し、それぞれを前後・上下・左右の系列として定義することである。これにより、 $SU(3)$ の内部対称性は、人間の経験にとって意味ある差異として可視化される。しかし、この段階ではなお、どの軸が観測の基底として機能するかは未決定である。したがって、本節は、実質的な対称性の破れに先立つ、座標的な身体化の確定を担う節として位置づけられる。次節では、この身体三軸に対して、さらに前後→上下→左右という固定順序を与えることにより、身体化された対称性の破れの順序を明示する。

3. 前後→上下→左右の順序

前節では、 $SU(3)$ の三面構造を、身体空間における前後・上下・左右という三軸へ対応づける枠組みを導入した。しかし、本研究において重要なのは、これら三軸が単に並列的に与えられているのではなく、前後→上下→左右という一定の順序のもとで成立すると考えられる点である。この順序は、後に第0層の配置や九タイプの巡回順序を構成する基礎となるため、ここでその成立理由を明確にしておく必要がある。

この順序の成立には、性質の異なる二つの根拠がある。第一は $SU(3)$ の内部構造に由来する循環性であり、第二は身体化による対称性の破れに由来する出発点の決定である。以下、この二段階を順に論じる。

第一段階：三項循環の内部的根拠

$SU(3)$ は三成分 $R \cdot G \cdot B$ から自然に $RG \cdot RB \cdot GB$ という三つの二成分面を生み出す。これら三面は互いに独立しているのではなく、 $RG \rightarrow RB \rightarrow GB \rightarrow RG$ という三項的な閉じた循環構造を内部的に持っている。この循環の方向性は $SU(3)$ の構造そのものに由来するものであり、外部から与えられる条件を必要としない。したがって、前後→上下→左右という三軸の循環順序そのものは、身体化や物理的条件に先立って、 $SU(3)$ の数学的骨格から直接導かれる。

言い換えれば、三軸がなぜ循環的な順序を持つのか、そしてなぜその順序が一方向に定まるのかという問いに対しては、 $SU(3)$ の内部構造だけで答えることができる。この点において、三軸の循環性は身体化以前にすでに $SU(3)$ の対称性の中に内在していると理解すべきである。

第二段階：出発点の決定——対称性の破れ

しかし、循環構造の内部的性質によって定まるのは循環の順序のみであり、この循環のどこを出発点とするかは、循環構造のみからは決定されない。 $RG \rightarrow RB \rightarrow GB \rightarrow RG$ という循環は確定している

が、 $RB \rightarrow GB \rightarrow RG \rightarrow RB$ や $GB \rightarrow RG \rightarrow RB \rightarrow GB$ も同等に可能な出発点として残される。したがって、 RG 面を最初の基準面として前景化させるためには、この三面の対等性を破る外部条件が必要となる。

本研究では、その条件を身体化による対称性の破れに求める。 $SU(3)$ の理想的な対称性のもとでは三つの二成分面は等価であるが、現実の物理系においてはこの対等性が破れる。クォーク系を想起するならば、 $u \cdot d \cdot s$ のあいだには質量階層が存在し、**strange** クォークを含まない $u-d$ 系、すなわち I -spin に対応する RG 面が最初の基準面として前景化する。本研究ではこの質量階層を構造的類比として用い、 RG 面が循環の出発点として選ばれることを仮定する。前後方向は、この最初の基準面に垂直な方向として成立する。

次に必要となるのは、残る二面に対するさらなる拘束である。本研究では、この段階で身体と重力という物理的条件を考える。重力は上下方向に安定と不安定の差を与え、身体に一意的な方向づけをもたらす。このため、 RG 面に続いて RB 面が第二の基準面として確定し、その法線方向が上下軸として意味づけられる。最後に残る GB 面は、前後と上下が定まった後の残余の自由度として第三に成立し、その法線方向が左右軸となる。

以上をまとめると、前後→上下→左右という順序の成立には二つの段階がある。第一に、 $RG \rightarrow RB \rightarrow GB \rightarrow RG$ という三項循環の順序そのものは $SU(3)$ の内部構造から導かれ、外部条件を必要としない。第二に、この循環のどこを出発点とするかは、クォーク系の質量階層を類比的に参照することで RG 面が前景化し、さらに重力という身体的条件によって RB 面が第二に確定し、 GB 面が第三の残余として成立するという対称性の破れの順序によって決定される。

この意味で、前後→上下→左右という順番は、単なる図の読み順ではなく、 $SU(3)$ の内部循環性と身体化された対称性の破れという二つの条件が重なることによって初めて成立する、配置原理の一次的条件として理解されるべきである。

さらに、この順序は空間的配置の順序であるだけでなく、生成の順序でもある。前後は、対象との接近と離隔という最初の関係を与え、上下は、その関係に安定と不安定、評価と判定の基準を導入する。左右は、その上で複数の対象や可能性を並列的に区別し、比較し、配列する働きを担う。したがって、この三軸は互いに交換可能な三方向ではなく、身体的世界がどのように秩序化されていくかの段階を表していると理解されるべきである。

なお、この生成順序は、ヌーソロジーの意識発達論における ψ_{10} が $\psi_{1 \sim 8}$ をなぞる発達の運動の順序（口唇期→肛門期→男根期）とも構造的に整合しており（次節参照）、 ψ 系列と $SU(3)$ の三 $SU(2)$ 部分構造との対応という観点からより内在的な根拠を与えうる可能性がある。この点の詳細な検討は次稿の課題とする。

このことは、後に九タイプの順序や隣接性を導出する際にも決定的な意味を持つ。なぜなら、本研究においてエニアグラムの基本順序は、第0層の 3×3 配置を、この前後→上下→左右という軸順序に従って巡回的に読むことによってはじめて成立するからである。したがって、ここで確認した軸順序

は、単に身体軸の説明にとどまらず、エニアグラム全体の配置原理を支える一次的条件として位置づけられる。

4. 発達三段階の導入

前節では、身体化された対称性の破れの順序として、前後→上下→左右という三軸の固定順序を導入した。ここでは、前後・上下・左右という三方向が、単なる並列的差異ではなく、生成順序を持つ身体軸として成立することを示した。本節では、この軸順序を、さらに意識発達の秩序へと読み替える。すなわち、前後・上下・左右という三軸に対して、口唇期・肛門期・男根期という発達三段階を対応づけることにより、SU(3)の三重構造を、身体化された空間秩序から発達秩序へと接続する。

本研究において発達段階とは、単なる年齢区分ではなく、身体を通して世界との関係がどのような様式で構成されるかという、基本的な位相差を意味する。すでに第Ⅱ章で確認したように、本研究の理論的前提では、乳幼児期の発達は、口唇期・肛門期・男根期という三つの基本段階として整理される。これらは、単なる精神分析史的区分としてではなく、人間が対象や他者との関係を組み立てていく際の、三つの基礎的な構えとして理解されている。したがって、本研究で発達段階を導入するのは、前節で確定した身体軸の順序を、意識発達の順序として読み替えることを意味する。

この対応づけにおいて重要なのは、前後・上下・左右という三軸が、すでに同一ではない構造的位相を持っているという点である。前後は、対象との接近と離隔という最初の関係を与える軸であり、上下は、その関係に対して安定と不安定、判定と評価の基準を導入する軸であり、左右は、そのうえで複数の対象や可能性を比較し、区別し、配列する軸である。したがって、これら三軸は、単なる三本の線ではなく、世界経験の異なる位相を担う三つの構造単位として理解されるべきである。発達段階の導入とは、この構造差に対して、口唇期・肛門期・男根期という時間的順序を与える操作である。

本研究では、この順序を、前後→上下→左右という軸生成の順序に対応させて読む。すなわち、口唇期は、対象とのもっとも基礎的な接近と離隔の関係として前後軸に、肛門期は、その関係に判定と基準を与え、歩行が始まる重力コントロールの段階として上下軸に、男根期は、その後に差異を比較し、位置づけ、実効的に安定化する段階として左右軸に、それぞれ対応づけられる。この意味で、発達段階は、前節で示した身体軸の固定順序に対して外から任意に当てはめられるのではなく、身体空間の生成順序そのものを、意識発達の位相差として読み替えたものと理解される。

もっとも、この段階では、なお各位置における具体的な情動差やタイプ配置までは与えられていない。ここで定まるのは、あくまで九位置配置の第一の軸としての発達秩序である。換言すれば、本節の役割は、SU(3)の三重構造に対して、口唇期・肛門期・男根期という三段階の順序を接続し、3×3配置のうち一方の軸を確定することにある。したがって、本節で導入される発達段階は、すでに具体的なタイプを決定する完成形ではなく、次節で導入される情動三状態と交差することによって、はじめて九つの位置を持つ実効的配置として働く。

また、この発達三段階の導入によって、前後・上下・左右という三軸は、もはや単なる空間方向ではなく、意識発達の通過相として読まれることになる。これは、身体軸が持つ構造差が、そのまま発達上の質的差異とも結びついていることを意味する。すなわち、前後軸は、もっとも基礎的な対象関係の位相を、上下軸は、判定と評価の位相を、左右軸は、比較と配列の位相を、それぞれ担う。したがって、発達段階の導入とは、SU(3)の三重構造を単に時間化するだけでなく、その内部に含まれる構造差を、発達上の質的差異として読むことを可能にする操作でもある。

さらに、本研究において発達段階は、個体の成長過程をそのまま経験的に写したのものとしてではなく、構造上の位相差として理解される。これは重要である。なぜなら、本研究が論じているのは、実際の発達心理学の細部を再現することそのものではなく、エニアグラムとSU(3)の対応を可能にする理論的枠組みだからである。したがって、口唇期・肛門期・男根期という三段階も、本研究では、経験的事実の細部というより、三つの異なる関係様式を順序化するための基本型として導入される。この意味で、発達段階の導入とは、数学的構造に心理学的内容を直接押しつけることではなく、両者のあいだにある構造的対応可能性を、時間順序の形式として明示する操作である。

以上のように、本研究における発達段階の導入とは、前後・上下・左右という順序を持つ身体軸に対して、口唇期・肛門期・男根期という三つの発達位相を対応づけることにより、SU(3)の三重構造を発達秩序へと読み替える操作である。これにより、身体三軸は、単なる空間座標ではなく、意識発達における異なる通過相として位置づけられる。しかし、この段階で確定されるのは、なお九位置配置の第一の軸としての発達秩序にとどまる。次節では、この発達三段階に対してさらに情動三状態を導入し、両者を直交させることによって、九つの位置から成る3×3配置を、より具体的なかたちで構成する。

5. 情動三状態の導入

前節では、前後→上下→左右という順序を持つ身体軸に対して、口唇期・肛門期・男根期という発達三段階を導入し、SU(3)の三重構造を発達秩序へと読み替えた。これにより、本研究で扱う3×3配置のうち、第一の軸が与えられたことになる。しかし、この段階ではなお、各発達段階はそれぞれ一つの位相として与えられているにすぎず、その内部にどのような状態差があるかはまだ定義されていない。そこで本節では、発達三段階と直交する第二の軸として、情動三状態を導入する。

ここであらかじめ確認しておくべきなのは、本研究で用いる情動三状態の区分が、エニアグラム一般における標準的分類をそのまま採用するものではない、という点である。本研究におけるこの三状態は、春井（2023）における臨床的観察と理論的整理に基づき、本研究の構造モデルに即して導入される操作的区分である。具体的には、本研究ではこれを、欲求不満・満足・不安の三状態として設定する。したがって、以下で述べる情動三状態は、一般的な感情分類というよりも、各発達段階の内部をさらに三分割するための、構造的な状態軸として理解されるべきである。

この意味で、本研究において情動三状態とは、単なる気分の変化や一時的感情の一覧ではない。それは、身体を通じた世界経験の中で、各発達位相において反復的に現れうる、基本的な状態差を指している。ここでいう三状態は、発達段階そのものを表すのではなく、各段階の内部で経験されうる関係の状態を示す。したがって、発達段階が「どの位相にいるか」を表すのに対し、情動三状態は「その位相の中で、どのような状態にあるか」を表している。

この区別は重要である。なぜなら、発達段階だけでは、三つの異なる関係様式は与えられても、それぞれの内部における差異化の条件がまだ不足しているからである。もし三つの発達段階しか与えられていなければ、配置は三つの位置にとどまり、九タイプ構造を支えるための十分な分節は得られない。これに対して、各段階の内部にさらに三つの状態差を導入することで、初めて、各段階は単一の相ではなく、三つの内部位置を持つことになる。したがって、情動三状態の導入は、九位置から成る3×3構造を成立させるために不可欠な第二の分節である。

本研究では、この情動三状態を、発達三段階に対して直交する軸として配置する。すなわち、発達三段階が縦方向の構造を与えるとすれば、情動三状態は横方向の構造を与える。これにより、三つの発達段階と三つの情動状態の組み合わせとして、全体で九つの位置が定義されることになる。この意味で、情動三状態の導入とは、単なる心理学的補足ではなく、配置論的には、発達三段階だけでは未完成であった三重構造を、九位置の格子構造へと拡張する決定的な操作である。

本研究がここで採用する欲求不満・満足・不安という三状態は、それぞれ、各発達位相の内部における異なる状態相を表す。欲求不満は、求めるものと現実とのずれ、あるいは充足の不成立として現れる状態である。満足は、そのずれが一時的に解消され、安定や完結が得られている状態である。不安は、充足の有無そのものよりも、位置づけや関係の安定性が揺らぎ、次に何が起こるかが不確定な状態として現れる。ここで重要なのは、これらが一般心理学的な感情カテゴリーとして導入されているのではなく、各発達段階における関係の取り方をさらに三分割するための、状態論的な基本型として用いられている点である。

このとき、情動三状態は、発達段階に従属するものとしてではなく、まず独立した第二軸として設定される。もちろん、実際には各発達位相によって、欲求不満・満足・不安の現れ方は異なりうる。しかし本研究の構造モデルにおいては、まず三つの発達段階と三つの情動状態を、互いに独立した二つの軸として設定することによって、九つの位置を明確に区別する。したがって、本研究における情動三状態は、発達段階の従属変数としてではなく、発達軸と直交する第二の構造軸として理解されるべきである。

また、この情動三状態の導入は、前節までに確認した各系列の回転軸とも関係している。すでに述べたように、各SU(2)的部分系列は、参照面に対する垂直軸だけでなく、その参照面を回転させる回転軸を併せ持っていた。この回転軸は、各系列における運動性、すなわち位相変化や内部状態の変

動可能性を支えている。したがって、本研究では、情動三状態を単なる横並びのラベルとしてではなく、こうした内部運動の位相差が状態差として読み取られたものとして理解する。

本研究では、この回転軸に対応する状態差を、暫定的に、前後回転軸＝欲求不満、上下回転軸＝満足、左右回転軸＝不安として整理する。ここでいう対応は、この段階で完成した心理学的意味づけを与えるものではなく、各系列の内部運動がどのような状態差として読まれうるかを、構造上の第二軸として仮に定めるものである。したがって、この対応の詳細な意味は、後に各タイプ配置と照合しながら改めて明確にされるが、少なくとも本研究の配置論においては、情動三状態は、各系列の回転的運動に由来する三つの状態差として理解される。

言い換えれば、発達段階が各系列の「どの位相に属するか」を表すのに対し、情動三状態は、その系列内部の回転的な動きの中で「どのような状態にあるか」を表している。もっとも、本節の段階では、この回転軸と各情動状態との対応を、厳密な一対一写像として最終固定することを目的とはしない。ここで重要なのは、各系列がすでに静的な垂直軸だけでなく、動的な回転軸を持つ以上、そこに状態差を導入するための構造的条件が備わっている、ということである。すなわち、情動三状態の導入は、外部から恣意的に心理学的ラベルを付加する操作ではなく、すでに身体化された系列の内部にある運動可能性を、状態差の軸として形式化する操作として理解される。したがって、本節では、情動三状態を回転軸と関わる第二の軸として導入しつつ、その詳細な力学的読みは、なお後続の配置論に委ねる。

このようにして、発達三段階と情動三状態という二つの三分割が直交することで、本研究は、九つの位置から成る 3×3 構造を得る。これは、エニアグラムの九タイプに対して、単なる円環的な連なりとは別に、格子状の配置可能性を与えるものである。すなわち、各位置は、「どの発達位相に属するか」と「その位相の中でどの状態にあるか」という二重の座標によって定義される。したがって、九タイプ構造は、もはや単なる九つの点の集合ではなく、二つの独立軸の交差によって生成される、より厳密な配置系として理解されることになる。

本節において重要なのは、ここで成立する 3×3 構造が、まだ「タイプそのもの」ではないという点である。ここで得られるのは、タイプが配置されうるための九つの座標位置であって、そこにどのタイプがどのように割り当てられるかは、なお次の段階に属する。したがって、本節での情動三状態の導入は、心理学的な完成像を与えるものではなく、あくまで発達三段階と組み合わせることで、九位置配置を可能にするための第二の分節を与えるものである。

以上のように、本研究における情動三状態の導入とは、春井（2023）に基づく操作的区分として、欲求不満・満足・不安という三つの状態差を設定し、発達三段階と直交する第二の軸として各発達位相の内部をさらに三分割する操作である。これにより、 $SU(3)$ の三重構造は、発達段階と情動状態という二つの軸の交差によって、九つの位置を持つ 3×3 構造へと展開される。しかし、この段階ではなお、どの位置がどのタイプに対応し、どの軸が実際に観測の基底として選ばれるかは、まだ最終的には決定されていない。次節では、この点を受けて、第0層における座標固定と、第1～2層にお

ける実質的対称性の破れとを区別しながら、どの段階で「配置」が「機能」へ移行するのかを、より明確に整理する。

6. 第1～2層：身体化された配置構造

前節までの議論により、本研究では、SU(3)の内部対称性に対して、身体空間への座標固定、発達段階の導入、情動三状態の導入、そして観測軸の逐次的な機能固定という条件が順次与えられてきた。これにより、抽象的な三重構造は、単なる対称的配置から、具体的な方向性・順序・状態差を持つ記述空間へと移行する準備を整えたことになる。本節では、この条件のもとで成立する第1～2層の身体化された配置構造を、より明示的に整理する。

まず確認すべきなのは、第1～2層とは、第1層と第2層を単に便宜的にまとめた呼称ではなく、発達軸と情動軸とが交差することで、初めて一つの実効的配置空間が成立する段階を指している、という点である。第1層においては、身体的三系列に対して口唇期・肛門期・男根期という時間的順序が与えられた。第2層においては、それぞれの発達位相の内部に、欲求不満・満足・不安という状態差が導入された。これら二つの層は、それぞれ別の役割を担っているが、実際の配置構造としては、両者が結びついて初めて九つの位置が実効的に定まる。したがって、本研究ではこの二つを、単一の身体化された配置相として把握する。

このとき、第1～2層の構造は、三つの発達段階を縦軸、三つの情動三状態を横軸とする3×3の格子構造として表現される。縦軸は、どの発達位相に属するかを示し、横軸は、その位相の内部でどの状態にあるかを示す。したがって、各位置は、「どの発達段階にあるか」と「その段階でどの情動状態にあるか」という二重の座標によって定義される。この二重座標によって、SU(3)の三重性は、単なる抽象的な三分割ではなく、九つの区別可能な位置へと具体化される。

ここで重要なのは、この3×3構造が単なる図式上の整理ではなく、第0層では未確定だった機能差が、初めて配置の中に埋め込まれた形で表れていることである。第0層においては、前後・上下・左右という三系列は、身体空間の中で読み取られてはいたが、なお対等な座標として共存していた。これに対して、第1～2層では、観測軸の逐次固定によって、各系列はもはや完全に等価ではなくなる。すなわち、どの系列が先行的に機能するか、どの系列がその後位置づけられるかという差異が、発達段階と情動状態の導入によって、格子構造の内部に具体的に反映されるのである。

この意味で、第1～2層の3×3配置は、単なる九点の集まりではない。それは、身体空間に埋め込まれた三系列が、時間的順序と状態差を受けて機能分化した結果として成立する操作空間である。したがって、この九位置は、後に九タイプを恣意的に置くための空欄ではなく、すでに構造的な差異を内包した「意味を持つ座標位置」として理解されるべきである。本研究がこの段階を重視するのは、エニアグラムの九タイプを、経験的に与えられた九つの性格類型としてではなく、まず九つの構造的な位置として記述し直そうとしているからである。

さらに、第1～2層においては、縦軸と横軸がそれぞれ独立に存在するだけでなく、両者が相互に規定し合う。発達段階は各列に同じ意味を与えるわけではなく、同じ「欲求不満」であっても、どの発達位相に置かれるかによって、その構造的位相は異なる。同様に、情動状態も各行に同じ意味を与えるわけではなく、同じ「口唇期」であっても、欲求不満・満足・不安のいずれにあるかによって、その内部状態は異なる。したがって、各位置は、縦軸と横軸の単純な和ではなく、二つの差異が交差した固有の位置として定義される。このことによって、九つの位置は、それぞれ固有の構造特性を持つことになる。

また、この段階で成立する配置は、前節で述べた逐次固定原理とも整合している。すなわち、縦軸を構成する発達段階の順序、ならびに横軸を支える情動三状態の分節は、ともに、前後・上下・左右という三系列の機能的先行順序のもとで組織されている。したがって、第1～2層の格子構造は、単に「縦に三つ、横に三つ」でできた抽象的表ではなく、同一の構造原理が異なる位相で反映された結果としての二重分節である。この点において、第1～2層は、発達と情動を別々に並べたものではなく、同一の身体化された対称構造が、二つの軸として展開された空間である。

ここで、本研究が第1～2層を「身体化された配置構造」と呼ぶ理由も明らかになる。第0層においては、身体空間への埋め込みはなされていたが、なおそれは座標的な可視化にとどまっていた。これに対して、第1～2層では、その身体空間上の系列が、発達段階と情動状態という、実際の意識経験に関わる二つの軸として読み替えられている。つまり、この段階で初めて、身体空間に埋め込まれた構造は、単なる位置関係ではなく、経験の差異を記述する配置構造として働き始める。したがって、第1～2層とは、 $SU(3)$ の抽象構造が、人間の意識発達モデルとして実際に読める形へ移行した最初の段階なのである。

もっとも、この段階でも、なお最終的なタイプ対応はまだ完了していない。ここで成立しているのは、あくまで九タイプが配置されうるための構造的な器であって、どの位置にどのタイプが対応するかという具体的割り当ては、次章以降の課題である。この点は重要である。なぜなら、本研究の議論は、「九つのタイプが先にあり、それを数学に当てはめる」ことを目指しているのではなく、「まず九つの位置が構造的に成立し、そのうえでタイプ対応を読む」ことを目指しているからである。したがって、第1～2層は、タイプそのものではなく、タイプ配置の前提空間として理解される。

以上のように、第1～2層における身体化された配置構造とは、発達三段階と情動三状態という二つの三分割が、身体空間上に埋め込まれた三系列の機能的先行順序のもとで交差することによって成立する、九位置から成る実効的な記述空間である。ここでは、 $SU(3)$ の抽象的三重構造は、単なる座標的可視化を超えて、意識発達の差異を記述しうる配置構造へと変換される。

このようにして、IV章で行ってきた座標固定、身体的軸の導入、発達段階、情動三状態、そして機能的選択の整理によって、本研究は、 $SU(3)$ の内部対称性を、九タイプを配置しうる身体化された構造空間として読むための条件を整えたことになる。

V. 九タイプ配置と同型対応

1. 本章の課題

前章では、SU(3)の内部対称性を、身体空間・発達段階・情動三状態の導入を通して、九位置から成る身体化された配置構造として読みうるまで具体化した。すなわち、SU(3)の三重構造は、まず前後・上下・左右という身体軸へと写像され、さらにそれらが前後→上下→左右という順序のもとで固定されることにより、発達三段階へと読み替えられた。加えて、欲求不満・満足・不安という情動三状態が、発達段階と直交する第二の軸として導入されることにより、九つの位置を持つ3×3の配置可能性が与えられたことになる。しかし、この段階で成立しているのは、あくまで九タイプが配置されうるための構造的器であって、どの位置にどのタイプが対応するのかが、なお具体的には与えられていない。

そこで本章の課題は、この身体化された配置構造の中に、エニアグラムの九タイプをどのように対応づけるかを明らかにすることにある。ここで重要なのは、本章が、経験的に知られている九タイプの性格記述をそのまま並べ直すことを目的とするのではない、という点である。本研究が試みるのは、エニアグラムの九タイプを、まず構造的な位置として捉え、そのうえで、それぞれの位置がどのような生成子または判定軸に対応するのかを明確にすることである。したがって、本章で問題となるのは、タイプの表面的な印象や象徴的説明ではなく、九タイプが占めるべき配置上の必然的位置である。

この課題に取り組むにあたり、本章では二つの段階を区別する。第一に、生成子・判定軸の配置である。これは、前章で確定した身体軸、参照面、垂直軸、回転軸、ならびに前後→上下→左右という逐次固定の条件に基づいて、 $\lambda_1 \sim 7$ および Hrb・Hgb の各位置を、第0層および第1～2層の3×3配置の中に定める作業である。この段階では、まだ心理学的意味づけは最小限にとどまり、主としてSU(3)側の構造条件から、どこに何が置かれるかが決定される。したがって、この段階での配置は、まず第一に幾何学的・構造的配置として理解されるべきである。

第二に、タイプとの対応づけである。ここでは、各生成子および判定軸が持つ作用特性を整理し、それをエニアグラム各タイプの基本特性と照合することによって、心理写像としてのタイプ対応を与える。すなわち、本章では、まず構造があり、その後に心理的意味づけが与えられる。したがって、本研究におけるタイプ対応は、「先にタイプありき」で構造を後づけするのではなく、先に構造的な位置を確定し、その作用特性を媒介としてタイプ特性を読み込むという手順によって行われる。この点において、本章は、数学的配置と心理的類型とのあいだを接続する、実質的な対応づけの章である。

また、本章では、第0層と第1～2層とを区別して配置を論じることが不可欠である。前章ですでに確認したように、第0層は、身体空間への座標固定はなされているが、なお機能的選択が完了していない配置相である。他方、第1～2層では、発達段階と情動三状態、そして逐次固定された観測軸の条件のもとで、配置はすでに機能差を持つ構造として働いている。この違いは、同じ九位置配置を扱う

場合でも、どの点が中心的に見えるか、どのような役割が前景化するかに差を生じさせる。したがって、本章では、単に一つの表を提示するのではなく、第0層における配置と第1～2層における配置を、それぞれの理論的位相に応じて区別して扱う必要がある。

さらに、本章の課題は、単に「どこに何を置くか」を決めることにとどまらない。本研究では、九タイプの配置を明らかにすることによって、後に論じるべきいくつかの重要な問題——すなわち、三センターはどのように整列するのか、各タイプの基本特性はどのような構造的な位置から説明されるのか、どの三点が中心的に現れるのか——に対して、共通の基盤を与えようとしている。したがって、本章で行われるタイプ配置は、後続の順序論・ウィング論・統合分裂論のための前提であると同時に、それ自体がエニアグラムの幾何学的再定式化の中核でもある。

以上のように、本章の課題は、前章で成立した身体化された配置構造の中に、SU(3)の生成子および判定軸を配置し、その作用特性を媒介として、エニアグラムの九タイプを構造的な位置として再記述することにある。その際に重要なのは、各構造単位が、どの身体系列に属するかという垂直軸の差異と、どの方向を運動軸として持つかという回転軸の差異とによって位置づけられる、という点である。すなわち、本章で扱う九位置配置は、単なる九つの点の並置ではなく、前後→上下→左右という順序で整理された二重軸構造の交差から構成される。次節では、そのための第一段階として、生成子・判定軸の配置原理を明らかにし、本章全体の対応づけの出発点を明確にする。

2. 生成子・判定軸の配置原理

本節では、前章で整えられた身体化された配置構造を前提として、SU(3)の生成子および判定軸が、どのような原理にもとづいて九つの位置へ配置されるのかを明らかにする。ここで扱うのは、まだエニアグラムのタイプ対応そのものではない。本節の課題は、あくまで $\lambda_1 \sim 7$ および Hrb・Hgb という九つの構造単位が、第0層の配置空間の中で、どのように位置を与えられるかを示すことである。したがって、本節は、タイプ論に先立つ構造位置の決定原理を述べる節として位置づけられる。なお、本研究における対応は、SU(3)の生成子との物理的・作用的な同一視を意図するものではなく、配置構造レベルにおける同型対応として与えられるものである。

前章で確認したように、本研究では、SU(3)の内部対称性は、まず身体空間への座標固定を通して、前後・上下・左右という三つの系列として読み取られるようになった。さらに、各系列は、それぞれ固有の参照面、その面に対する垂直軸、そして面内の運動性を担う回転軸を持つものとして整理された。ここで前提となっているのは、各構造単位が単に「どの系列に属するか」という静的な差異だけでなく、「どの方向を運動軸として持つか」という動的な差異によっても特徴づけられる、という点である。したがって、本研究における九位置配置は、単なる三系列への配分としてではなく、垂直軸と回転軸という二重の身体軸の交差として構成されることになる。

このことから、九つの構造単位を定めるための第一の原理は、各生成子・判定軸を、まず三つの身体系列のいずれかに属するものとして位置づけることである。言い換えれば、本研究における配置は、抽象的な九点を平面上に任意に並べることから始まるのではなく、すでに確定された三つの身体

系列の中に、各構造単位を配分することから始まる。この配分の第一条件は、参照面に対する垂直軸である。前章で定めたように、 $\lambda 1 \sim 3$ は RG 面を参照面とし、その垂直軸が前後軸であることから、全体として前後系列に属する。これに対して、 $\lambda 4 \sim 5$ と Hrb は RB 面を参照面とし、その垂直軸が上下軸であることから、上下系列に属する。同様に、 $\lambda 6 \sim 7$ と Hgb は GB 面を参照面とし、その垂直軸が左右軸であることから、左右系列に属する。したがって、九つの構造単位のうち、まず三つは前後系列、三つは上下系列、三つは左右系列へと、それぞれ幾何学的に配分されることになる。

このとき重要なのは、この三系列への配分が、単なる便宜的な整理ではなく、前章で確定した参照面と身体軸の関係から構造的に与えられる、という点である。すなわち、どの構造単位がどの系列に属するかは、後から心理学的に意味づけるために選ばれたのではなく、まず SU(3) 側の幾何学的条件によって定まる。したがって、本研究における最初の配置は、あくまで構造的配置であり、まだ心理的なタイプ対応はそこに介入していない。この順序を守ることによって、後のタイプ論は、恣意的な当てはめではなく、まず構造的位置の決定を前提として導かれるものとなる。

しかし、本研究における配置原理は、三系列への配分だけでは終わらない。第二の原理として、各構造単位がどの回転軸を持つかを考慮する必要がある。前章で示したように、各系列は単なる一本の軸ではなく、参照面に対する垂直軸と、その参照面を動かす回転軸との二重の軸性を持っている。したがって、同じ系列に属する構造単位であっても、それぞれがどの回転軸を持つかによって、内部で異なる位置を占めることになる。この意味で、各構造単位の配置は、「どの系列に属するか」という一次的差異と、「どの回転軸を持つか」という二次的差異との交差によって定まる。

本研究では、この回転軸の対応を次のように整理する。すなわち、 $\lambda 1$ は左右回転軸、 $\lambda 2$ は上下回転軸、 $\lambda 3$ は前後回転軸、 $\lambda 4$ は前後回転軸、Hrb は上下回転軸、 $\lambda 5$ は左右回転軸、 $\lambda 6$ は上下回転軸、 $\lambda 7$ は前後回転軸、Hgb は左右回転軸を持つものとして理解される。ここで重要なのは、これらの対応が外から恣意的に与えられたものではなく、各生成子・判定軸を、どの参照面に属し、どの垂直軸を基準とし、どの方向を回転軸として持つかという三つ組の構造から読んだとき、それぞれ自然に定まるという点である。したがって、各生成子・判定軸の独自性は、単にどの系列に属するかどうかだけでなく、どの方向に沿って運動可能性を持つかという差異を通して与えられている。

このことから、本研究で後に示す第0層の基本配置は、前後→上下→左右という順序で整理された垂直軸を縦軸とし、同じく前後→上下→左右という順序で整理された回転軸を横軸とする 3×3 配置として理解されることになる。言い換えれば、本研究の九位置配置は、「どの方向を基準軸として持つか」と「どの方向を運動軸として持つか」という二重の差異を交差させた結果として構成されるのである。この二重軸構造によって、九つの構造単位は、まだタイプ名を与えられる以前に、すでにそれぞれ固有の位置を持つことになる。

さらに、ここで注意しておきたいのは、この二重軸構造が、前章で導入された前後→上下→左右という逐次固定の順序とも深く結びついている、という点である。垂直軸は、質量差と身体拘束によって、RG 面、RB 面、GB 面の順に基準面が固定されることに対応し、その結果として前後、上下、左

右の順に整理される。したがって、垂直軸の順序は、単なる便宜的な並びではなく、身体化された対称性の破れの順序そのものを表している。

これに対して回転軸は、これらの基準面とは独立に外から付加される第二の順序ではない。3×3配置表において回転軸（列方向）は、RG・RB・GBという三つの参照面すべてにまたがって現れる。すなわち前後回転軸・上下回転軸・左右回転軸はそれぞれ、特定の一つの参照面に固有のものではなく、三参照面全体を貫く列として配置される。ここで回転軸の順序を決めるのは、RGB面の参照順序（RG→RB→GB）と同一の身体化された軸秩序である。言い換えれば、回転軸は独立した第四・第五・第六の軸として新たに追加されるのではなく、すでに順序づけられたRG面・RB面・GB面の参照順序と同じ身体化された軸秩序のもとで、前後→上下→左右という順序として整理される。

このことは、本研究が後に六点環や三点環の向きを、RGB三系列の参照順序から説明することとも整合している。すなわち、前後・上下・左右という三系列は、単に並列に並ぶ三軸ではなく、互いに一定の順序で次の系列へと役割を引き渡す三項的循環を含んでいる。回転軸もその同じ身体化された参照順序のもとで理解される以上、垂直軸とは別個に任意の順序を持つのではなく、RGB面の循環と同一の軸秩序に従う。ただし、RGB面の三項循環はSU(3)の三成分構造に由来するのに対し、回転軸の循環順序は身体化された軸秩序に由来するという点で、両者の根拠は異なることに注意が必要である。だが、行と列はどちらも最終的に「同一の身体軸（前後・上下・左右）」というフィルターを通して読み解かれるため、両者は結果として同じ順序を共有し、直交する3×3のマトリクスを形成する。

また、この配置原理は、第0層と第1～2層の両方に関わるが、その意味は同一ではない。第0層では、この二重軸構造は、まだ機能固定以前の座標相として働く。すなわち、ここでは九つの構造単位が、どの位置に置かれうるかが問題であり、配置そのものが主題である。他方、第1～2層では、この配置に対して発達三段階と情動三状態の直交関係が導入されることにより、同じ九位置が機能差を持つ構造として読み替えられる。したがって、本節で述べる配置原理は、まず第0層の基本表を構成するための条件として提示されるが、その後、第1～2層においては、発達と情動を媒介として、より具体的な機能相へと展開されることになる。

以上のように、本研究における生成子・判定軸の配置は、前章で整えられた身体化された条件から、段階的に導かれる。第一に、各構造単位は、参照面と垂直軸の条件から、前後・上下・左右の三系列へと配分される。第二に、それぞれの構造単位は、固有の回転軸を持つことによって、系列内部で異なる位置を占める。第三に、この二重の差異は、前後→上下→左右という逐次固定の順序を背景として、一つの九位置配置へと組織される。ただしRGB面の三項循環はSU(3)の三成分構造に、回転軸の循環順序は身体化された軸秩序にそれぞれ由来するという根拠の違いを踏まえたとうえで、両者が同一の身体軸秩序のもとで整合的に読まれることが、本研究の配置原理の基盤をなしている。次節では、この原理に基づいて、まず第0層における生成子・判定軸の配置を具体的に示し、機能固定以前の座標相において、どのような整列と群構造が現れるのかを確認する。

3. 第0層における生成子・判定軸の配置

本節では、前節で述べた配置原理に基づき、第0層において、SU(3)の生成子および判定軸がどのように配置されるかを示す。ここで扱う第0層とは、すでに身体空間への座標固定はなされているが、なお機能的選択は完了していない配置相である。したがって、この段階で示される配置は、発達段階や情動状態を織り込んだ実効配置ではなく、まず座標的・幾何学的に定まる原型的配置として理解されるべきである。本研究では、この第0層の配置を表として図示する（表1）。

表1. 第0層における生成子・判定軸の配置

	回転軸：前後軸	回転軸：上下軸	回転軸：左右軸
λ 1～3 RG面垂直軸 前後	λ 3 判定軸	λ 2 虚軸	λ 1 実軸
λ 4～5 RB面垂直軸 上下	λ 4 実軸	Hrb判定軸	λ 5 虚軸
λ 6～7 GB面垂直軸 左右	λ 7 虚軸	λ 6 実軸	Hgb判定軸

ここで重要なのは、この表が、エニアグラムのタイプ名を先に置いて構成されたものではなく、前章および前節で確定した身体軸、参照面、垂直軸、回転軸、ならびに前後→上下→左右という逐次固定の条件から、生成子・判定軸の位置を順に定めた結果として得られる、構造配置そのものを示している点である。したがって、この図は、後にタイプ対応を与えるための表ではなく、それ以前に、九つの構造単位がどこに位置するかを示すための基礎図版である。

表1において、縦方向には、前章で確定した三つの身体系列が置かれる。すなわち、第一行にはRG面の垂直軸に対応する前後系列、第二行にはRB面の垂直軸に対応する上下系列、第三行にはGB面の垂直軸に対応する左右系列が配置される。この縦方向の区分は、単なる並びではなく、各構造単位がまずどの参照面と垂直軸の組に属するかを示すものである。したがって、行の違いは、そのまま三つの身体系列の違いを意味している。

これに対して、横方向には、各構造単位が持つ回転軸が置かれる。すなわち、第一列は回転軸：前後軸、第二列は回転軸：上下軸、第三列は回転軸：左右軸である。ここでの横方向は、各系列が内部に持つ運動性、すなわちその参照面がどの方向を軸として変化しうるかを区別する軸として機能する。したがって、第0層のこの表は、縦方向に「どの系列に属するか」を、横方向に「どの回転軸に対応するか」を与えることによって、九つの構造単位の位置を定める3×3配置となっている。

この原理に従えば、前後系列には $\lambda_1 \cdot \lambda_2 \cdot \lambda_3$ が、上下系列には $\lambda_4 \cdot \lambda_5 \cdot \text{Hrb}$ が、左右系列には $\lambda_6 \cdot \lambda_7 \cdot \text{Hgb}$ が、それぞれ配置されることになる。さらに、各構造単位は、その系列への所属だけでなく、どの回転軸を持つかによって、列方向の位置も定まる。前節で確認したように、 λ_1 は左右回転軸、 λ_2 は上下回転軸、 λ_3 は前後回転軸、 λ_4 は前後回転軸、 Hrb は上下回転軸、 λ_5 は左右回転軸、 λ_6 は上下回転軸、 λ_7 は前後回転軸、 Hgb は左右回転軸を持つ。したがって、各構造単位の位置は、どの身体系列に属するかという垂直軸の差異と、どの回転軸を持つかという運動軸の差異との交差によって、一意的に定められることになる。

この意味で、第0層の表は、単なる九点の一覧ではない。それは、身体空間に埋め込まれた $\text{SU}(3)$ の二重軸構造、すなわち「どの方向を基準軸として持つか」と「どの方向を運動軸として持つか」という二つの差異を、一つの平面上に交差させた配置図である。各生成子・判定軸は、この二重の条件を通して、まだタイプ対応以前の段階で、すでに固有の位置を持つことになる。したがって、第0層の配置とは、後から意味を付与するために作られた図ではなく、前章までに整えられた身体化条件を、平面上に可視化した結果として理解されるべきである。

このとき、表1の対角線上には、 $\lambda_3 \cdot \text{Hrb} \cdot \text{Hgb}$ が並ぶ。ここで重要なのは、これら三点が「各系列の中央」に置かれているということではなく、それぞれの垂直軸と回転軸が一致する位置に現れているという点である。前後系列で前後回転軸を持つのが λ_3 、上下系列で上下回転軸を持つのが Hrb 、左右系列で左右回転軸を持つのが Hgb である。したがって、この三点は、身体系列と回転軸とが一致する対角成分として現れる。この意味で、表1における $\lambda_3 \cdot \text{Hrb} \cdot \text{Hgb}$ は、各系列における判定軸群が、二重軸構造の一致点として可視化されたものと理解されるべきである。

他方で、対角線以外の位置には、垂直軸と回転軸とが異なる組合せを持つ生成子が配置される。たとえば λ_1 は前後系列に属しながら左右回転軸を持ち、 λ_2 は前後系列に属しながら上下回転軸を持つ。同様に、 λ_4 は上下系列に属しながら前後回転軸を持ち、 λ_5 は上下系列に属しながら左右回転軸を持つ。左右系列においても、 λ_6 は上下回転軸を、 λ_7 は前後回転軸を持つ。このように、各生成子は、垂直軸と回転軸とが一致しない交差位置に置かれることによって、それぞれ異なる構造的独自性を持つ。したがって、第0層の 3×3 配置は、単なる対称的な整列ではなく、判定軸群と非対角生成子群との構造差をも同時に表現している。

また、この第0層の配置が重要なのは、ここで初めて、九つの構造単位が一つの全体像として同時に見えるようになるからである。前章および前節では、各系列ごとの幾何学的条件や配置原理を順に確認してきた。しかし、それらはまだ系列ごとの説明であり、全体として九つの位置がどのように組み合わせるかは、明示的には示されていなかった。これに対して、表1に示される第0層の表は、三系列と三回転軸の交差によって、九つの構造単位がどのように一つの配置系を成しているかを、一つの視野の中に収めている。この意味で、第0層の表は、本研究の配置論における最初の全体配置図である。

もっとも、この段階では、なお第0層の配置は、あくまで座標相にとどまっている。前章で詳しく述べたように、第0層では、身体空間への埋め込みは行われていても、どの系列が実際に観測軸として機能するかという選択は、まだ完了していない。したがって、ここで示される $\lambda 3 \cdot \text{Hrb} \cdot \text{Hgb}$ の対角的一致は、発達段階や情動三状態を通して前景化する機能中心そのものとは区別されるべきである。すなわち、この段階での $\lambda 3 \cdot \text{Hrb} \cdot \text{Hgb}$ は、第0層における判定軸群の構造的位置を示しているのであって、まだ第1～2層における実効中心そのものではない。この区別は、後に第0層と第1～2層とで、中心的に見える三点や中心列が異なってくる理由を理解するうえで重要である。

したがって、本節で示された第0層の配置は、次の二つの意味で基礎的である。第一に、それは、各生成子・判定軸が、タイプ対応以前に、すでに固有の構造的位置を持つことを明らかにする。第二に、それは、後に第1～2層で機能固定が導入されたときに、同じ九位置配置がどのように読み替えられるかを比較するための、原型的基準面を与える。すなわち、第0層の配置は、完成されたタイプ配置そのものではないが、後の配置変換を理解するための最初の座標モデルとして不可欠なのである。

以上のように、第0層における生成子・判定軸の配置とは、前後・上下・左右という三系列と、前後・上下・左右という三回転軸の交差によって、 $\lambda 1 \sim 7$ および $\text{Hrb} \cdot \text{Hgb}$ の九つの構造単位を、一つの 3×3 配置として表したものである。ここでは、各構造単位の位置は、どの系列に属するかと、どの回転軸を持つかという二重の差異から定まるが、なおそれは機能固定以前の座標相に属する。したがって、この配置は、後にタイプ対応を与えるための出発点であると同時に、第1～2層における身体化された実効配置を理解するための基準図として位置づけられる。次節では、この第0層の原型的配置に対して、発達段階・情動三状態・逐次固定された機能差が導入されたとき、同じ九位置配置がどのように第1～2層の実効配置として読み替えられるのかを示す。

4. 各生成子・判定軸の構造特性

前節では、第0層における生成子・判定軸の配置を示し、 $\lambda 1 \sim 7$ および $\text{Hrb} \cdot \text{Hgb}$ の九つの構造単位が、前後・上下・左右という三系列と三つの回転軸の交差の中で、原型的配置として定まることを確認した。しかし、その段階では、各構造単位はまだ「どこに位置するか」が示されたにとどまり、「それぞれがどのような作用を担うか」は十分には述べられていない。そこで本節では、次節で行うタイプ対応の前提として、各生成子・判定軸の作用様式を、本文に必要な範囲で要約的に整理する。ここでの目的は、厳密な行列表現や交換関係を本文中で展開し尽くすことではなく、各記号が配置構造の中でどのような質的役割を担っているかを明確にすることにある。各生成子・判定軸のより詳細な数理的説明については、付録Cを参照されたい。

まず、前後系列に属する $\lambda 1 \sim 3$ は、RG面に関わる系列を構成しつつも、互いに異なる作用を持つ。 $\lambda 1$ は、二つの極の差異を直接比較し、ずれを可視化する方向に働く。したがって、その構造的役割は、単なる混合ではなく、比較・基準化・差異の立ち上げとして理解される。これに対して、 $\lambda 2$ は同じRG面に作用しながらも、内部回転を生成し、状態の大きさを保存したまま位相のみを変化させる。したがって $\lambda 2$ の中心的な性格は、変形や強度変化よりも、ノルム保存・均衡維持・恒常化にある。さらに、 $\lambda 3$ は、前二者のように混合を起こすのではなく、成分間の差そのものを保持・強調

する対角的作用を担う。したがって $\lambda 3$ は、平均化や融合ではなく、差の固定・極性化・強度分離を担う構造単位とみなされる。

次に、上下系列に属する $\lambda 4 \sim 5$ と Hrb は、RB面 に関わる三分節構造を形づくる。 $\lambda 4$ は、二つの極を直接混合する実生成子であり、差異を減衰させ、両者を近づける方向に働く。そのため、 $\lambda 4$ の基本的性格は、差異の増幅ではなく、結合生成・等化的混合・連結化にある。これに対して、 $\lambda 5$ は、 $\lambda 4$ と同じ RB 面に作用しながら、実混合ではなく位相差を導入する虚生成子である。このため $\lambda 5$ は、外向きの結合というよりも、内部コントラストの形成・位相的干渉・内面深化を担う。さらに、Hrb は、前二者のように変換を起こすオフ対角生成子ではなく、対角的に値を与える判定軸である。したがって Hrb の役割は、混合・移送・干渉ではなく、測定・評価・序列化・基準化にある。

左右系列に属する $\lambda 6 \sim 7$ と Hgb も、同様に一つの三分節構造を成す。この系列は、GB面 に関わる構造を担う。 $\lambda 6$ は、二つの極のあいだの実交換に関与し、二値のあいだを往復するような振動を生み出す。このため $\lambda 6$ の構造特性は、単純な固定でも融合でもなく、往復振動・フィードバック・安定点探索・リスク検出として捉えられる。これに対して、 $\lambda 7$ は、 $\lambda 6$ と同じ GB 面にわりつつ、実交換ではなく位相変換を生み出す。そのため $\lambda 7$ は、外から見える大きな状態変化を起こさず、内部基準系のみを変える方向に働く。したがって、その基本的性格は、位相的観測・非干渉的回転・情報化・省エネルギー的保持にある。最後に、Hgb は、Hrb と同じく対角的な判定軸であり、混合や回転を起こさず、状態の配置ポテンシャルや自由度差を測る役割を担う。したがって Hgb は、Hrb が成果や基準の測定に寄るのに対し、より自由度・分散・選択肢の広がり进行评估する軸として理解される。

以上をまとめると、本研究における九つの構造単位は、単なる「九つの記号」ではなく、少なくとも三つの水準で区別される。第一に、前後・上下・左右という系列の違いによって、関与する差異の位相が異なる。第二に、 $\lambda 3 \cdot \text{Hrb} \cdot \text{Hgb}$ のように、各系列の内部で基準を与える判定的中心と、その他の生成子のように具体的な変換を担う作用点とが区別される。第三に、作用点どうしも、比較・恒常化・強度分離・結合・内面化・安定化探索・位相的観測といった、互いに異なる作用様式を持つ。したがって、各構造単位は、単なる記号ではなく、配置構造の中で固有の役割を担う位置として理解される。

本節で行ったのは、あくまでタイプ対応に先立つ作用記述の整理である。ここではまだ、これらの構造単位をエニアグラムの各タイプへ直接割り当てることはしていない。しかし重要なのは、次節で行われる対応づけが、「九つあるから九つを当てる」という数合わせではなく、ここで整理された作用様式の差異を媒介として行われるという点である。すなわち、本節で与えた、比較・均衡化・差固定・結合生成・内面深化・安定化探索・位相的観測・評価・可能性計測といった記述こそが、後の心理写像のための基礎語彙である。これらの作用様式の数理的背景については、付録Cにおいて各生成子・判定軸の定義とともに詳述する。

したがって、本節の役割は、配置図に並んだ九つの記号に対して、それぞれがどのような役割を持つかの輪郭を与えることにあった。これにより、前節で示された第0層の配置は、単なる位置の図で

はなく、すでに異なる機能を持つ点から成る構造図として読むことが可能になる。次節では、この構造特性を媒介として、各生成子・判定軸とエニアグラムの九タイプとの対応を与え、本研究におけるタイプ配置の基本辞書を定義する。

5. 九タイプとの対応

前節では、 $\lambda 1\sim 7$ および Hrb・Hgb の各構造単位について、それぞれがどの系列に属し、どのような作用様式を担うかを整理した。そこでは、各記号が単なる「九つの点」ではなく、比較・均衡化・差固定・結合生成・内面深化・安定化探索・位相的観測・評価・可能性計測といった、互いに異なる構造的役割を持つことを確認した。本節では、この作用記述を媒介として、各生成子・判定軸とエニアグラムの九タイプとの対応を与える。したがって、ここで行う対応づけは、数の一致にもとづく単純な割り当てではなく、構造特性の比較照合による心理写像として理解されるべきである。

本研究では、この対応をまず第0層において定義する。すなわち、機能固定以前の原型的配置の中で、各構造単位がどのタイプに対応するかを定める。ここで重要なのは、第1～2層における発達段階・情動三状態の整理は、なお後続の節に属するという点である。したがって、本節で提示するタイプ対応は、まず第0層における構造的位相と作用様式に対して与えられる基本辞書である。

本研究では、この第0層におけるタイプ対応を、表として図示する（表2）。この表は、前節までに示した第0層基本表と同じ 3×3 構造を保ちながら、各位置に対応するエニアグラムタイプを括弧内に付したものである。したがって、この図は、単に「タイプ名を並べた表」ではなく、すでに確定している生成子・判定軸の配置に対して、タイプ対応を重ねた対応表として読むべきである。

表2. 第0層における生成子・判定軸と九タイプの対応

（T1～T9 は、各生成子・判定軸に対応づけられるエニアグラムタイプを示す）

	回転軸：前後軸	回転軸：上下軸	回転軸：左右軸
$\lambda 1\sim 3$ RG面垂直軸 前後	$\lambda 3$ 判定軸 T8	$\lambda 2$ 虚軸 T9	$\lambda 1$ 実軸 T1
$\lambda 4\sim 5$ RB面垂直軸 上下	$\lambda 4$ 実軸 T2	Hrb判定軸 T3	$\lambda 5$ 虚軸 T4
$\lambda 6\sim 7$ GB面垂直軸 左右	$\lambda 7$ 虚軸 T5	$\lambda 6$ 実軸 T6	Hgb判定軸 T7

具体的に、本研究では次の対応を採用する。すなわち、前後系列の中心位置を占める $\lambda 3$ は Type 8 に対応し、同系列の両側位置にある $\lambda 2$ は Type 9、 $\lambda 1$ は Type 1 に対応する。上下系列では、中心位置を占める Hrb が Type 3 に対応し、その両側位置にある $\lambda 4$ は Type 2、 $\lambda 5$ は Type 4 に対応する。左右系列では、中心位置を占める Hgb が Type 7 に対応し、その両側位置にある $\lambda 7$ は Type 5、 $\lambda 6$ は Type 6 に対応する。したがって、本研究における第0層の基本対応は、次のように要約される。

- $\lambda 1 \rightarrow$ Type 1
- $\lambda 4 \rightarrow$ Type 2
- Hrb \rightarrow Type 3
- $\lambda 5 \rightarrow$ Type 4
- $\lambda 7 \rightarrow$ Type 5
- $\lambda 6 \rightarrow$ Type 6
- Hgb \rightarrow Type 7
- $\lambda 3 \rightarrow$ Type 8
- $\lambda 2 \rightarrow$ Type 9

この対応は、まず各構造単位的位置と作用様式の両方を踏まえて与えられる。たとえば、 $\lambda 3 \cdot$ Hrb \cdot Hgb は、各系列の中心位置を占め、差異を立て、基準を与える判定軸的構造単位である。したがって、それらに対応する Type 8 \cdot Type 3 \cdot Type 7 は、本研究の構造上、まず「系列内部の方向づけに関与する位置」に属することになる。これに対して、 $\lambda 1 \cdot \lambda 2 \cdot \lambda 4 \cdot \lambda 5 \cdot \lambda 6 \cdot \lambda 7$ は、各系列の両側位置に置かれ、中心点との関係の中で、比較・保持・結合・干渉・振動・位相変換といった作用を担う。したがって、それらに対応するタイプ群もまた、中心点そのものではなく、中心を取り巻く作用位置として理解される。

ここで重要なのは、この対応が、単に「似ていそうだから当てた」という印象論ではなく、前節で整理した構造特性を踏まえているという点である。たとえば、 $\lambda 1$ は比較・基準化・差異の立ち上げを担う構造単位として整理されており、したがって Type 1 は、本研究の対応において、まず「差異を基準化する位置」として読まれる。同様に、 $\lambda 2$ は均衡維持・恒常化・ノルム保存を担うため、Type 9 は「均衡を保つ位置」として読まれる。 $\lambda 4$ (Type2) は結合生成・等化的混合を担い、 $\lambda 5$ (Type4) は内部コントラスト形成・位相的干渉を担う。さらに、 $\lambda 6$ (Type6) は往復振動・安定化探索を担い、 $\lambda 7$ (Type5) は位相的観測・非干渉的回転を担う。そして、Hrb (Type3) と Hgb (Type7) は、それぞれ評価・基準化、および自由度・可能性計測という判定軸的役割を担う。したがって、本研究のタイプ対応は、各タイプの経験的特徴をいきなり前面に出すのではなく、まずこれらの作用位置に各タイプを対応づけることによって、構造論的に定義される(付録C参照)。

また、この対応が第0層で与えられることには、明確な意味がある。第0層では、まだ発達段階や情動状態による再編成は起こっておらず、構造単位は、身体系列と回転軸の交差の中で、原型的配置として置かれている。したがって、本節での対応は、後に第1~2層で行われる再配置に先立つ、最も基本的なタイプ辞書を与えるものと言える。ここでいったん第0層で対応を定めておくことにより、後

続の節では、「このタイプがなぜこの群に属するのか」「第1～2層でなぜその行に現れるのか」を、構造的に追跡できるようになる。

ここで改めて確認しておきたいのは、本節の目的が、各タイプの詳細な心理描写を行うことではない、という点である。本研究におけるタイプ対応は、まず各タイプを構造的な位置として定義する作業である。したがって、ここでは「Type 1 はこういう性格である」といった臨床記述を主とするのではなく、「Type 1 は λ_1 に対応し、そのことによって比較・基準化の作用位置を占める」といったかたちで、タイプをまず構造位置として規定する。この順序を取ることによって、後のタイプ論は、経験的描写の寄せ集めではなく、配置構造から導かれるものとして再記述される。

さらに、本節で与えられた対応は、次節で扱う第0層におけるタイプ群の形成の前提でもある。すなわち、ここでタイプが個別に各構造単位へ対応づけられることによって、はじめて「どのタイプが判定軸群に属するのか」「どのタイプが虚軸的配置に属するのか」「どのタイプが実軸的配置に属するのか」といった、より高次のまとまりを読み取ることができる。したがって、本節の役割は、単に九つの対応関係を列挙することではなく、後に現れる三群構造のための最小単位の辞書を与えることにある。

以上のように、本研究では、第0層における生成子・判定軸の配置と、それぞれの構造特性を踏まえたうえで、 $\lambda_1 \sim 7$ および Hrb・Hgb とエニアグラムの九タイプとの対応を定義する。ここで与えられた対応は、本研究全体における基本辞書であり、後に第0層のタイプ群形成、第1～2層への再配置、三センターの整列、さらには順序や統合・分裂方向の導出を論じるための出発点となる。次節では、この対応の結果として、第0層においてどのようなタイプ群が自然に形成されるのかを示し、それが三センター・発達三段階の群分けとどのように同型になるのかを整理する。

6. 第0層における三群構造と発達三段階との同型性

前節では、第0層における生成子・判定軸とエニアグラム九タイプとの基本対応を定義した。ここでは、各タイプを、まず個別的な性格描写としてではなく、 $\lambda_1 \sim 7$ および Hrb・Hgb という九つの構造単位に対応する位置として定義したことになる。本節では、その対応を一つの全体配置として見たときに、第0層の表の中にどのような三群構造が現れるのかを整理し、それが本研究の発達三段階の理解とどのように同型になるのかを明らかにする。

まず、第0層の対応表（表2）をそのまま見ると、最初に明瞭に現れるのは、エニアグラムにおいて広く知られている三センターの区分である。すなわち、前後系列（RG面垂直軸）には $8 \cdot 9 \cdot 1$ が並び、上下系列（RB面垂直軸）には $2 \cdot 3 \cdot 4$ が並び、左右系列（GB面垂直軸）には $5 \cdot 6 \cdot 7$ が並び、したがって、第0層の表においては、横一列ごとに、

- $8 \cdot 9 \cdot 1$ = 本能センター
- $2 \cdot 3 \cdot 4$ = 感情センター

■ 5・6・7 = 思考センター

という、エニアグラムの基本的な三分割が、そのまま自然に現れていることになる。ここで重要なのは、この三センターが、後から象徴的に付け加えられた分類ではなく、生成子・判定軸の配置を第0層で確定した結果として、まず行方向の秩序として読み取られるという点である。

ここで、三センターがなぜこの三系列に対応するのかを簡潔に確認しておきたい。本研究では、本能タイプ(8・9・1)はRG面に対応する前後系列に置かれる。前後軸は、対象への接近と離隔という、身体にとってもっとも一次的な関係を与えるため、本能センターと結びつきやすい。これに対して、感情タイプ(2・3・4)はRB面に対応する上下系列に置かれる。上下軸は、重力のもとでの安定・不安定、高低、評価の差を伴うため、感情の高まりや価値づけと親和的である。さらに、思考タイプ(5・6・7)はGB面に対応する左右系列に置かれる。左右軸は、複数の位置関係を並列的に区別し、比較し、配列する働きを担うため、思考センターと結びつきやすい。したがって、三センターの区分は、単なる経験的分類ではなく、RG・RB・GBという三面構造と、前後・上下・左右という身体軸の差異の中から、構造的に読み取られるものとして理解される。

しかし、本研究において重要なのは、第0層の表には、この既知の三センターとは別に、もう一つの三分類原理が内在しているということである。それは、各タイプに先立つ数学的な三分類であり、各生成子・判定軸の構造特性そのものから与えられる。すなわち、前節で整理した作用様式を踏まえると、九つの構造単位はさらに、判定軸・虚軸・実軸という三つの群に分類することができる。

まず、判定軸とは、各系列の内部で差異を立て、向きを定め、他の位置関係を収束させる中心的な構造を指す。本研究の第0層表においては、これに属するのはHrb・Hgb・ λ_3 である。Hrbは上下系列における評価と基準化を担い、Hgbは左右系列における可能性や自由度の差を測理、 λ_3 は前後系列における極性差を立てる。したがって、これら三者は、系列内部に判断・基準・方向づけを与える判定軸群としてまとめられる。

次に、虚軸とは、外形的な強度変化よりも、位相・保持・内面的差異に関わる作用を担う構造を指す。本研究の第0層表においては、これに属するのは λ_5 ・ λ_7 ・ λ_2 である。 λ_5 はRB面における位相差と内部コントラストの形成に関わり、 λ_7 はGB面における位相的観測と非干渉的回転に関わり、 λ_2 はRG面におけるノルム保存的な内部回転と均衡維持に関わる。これらは、実効的な外向きの強度操作というより、位相変換・保持・内面化に重心を持つため、虚軸群として整理される。

最後に、実軸とは、比較・直接混合・実効的な安定化といった、より外向きで実在的な作用を担う構造を指す。本研究の第0層表においては、これに属するのは λ_1 ・ λ_4 ・ λ_6 である。 λ_1 は差異を比較し基準化する働きを持ち、 λ_4 は二極を等化的に結合する実混合作用を担い、 λ_6 は往復振動とフィードバックを通じて安定点を探索する。これらは、位相の内的変換よりも、差異を現実的に扱い、構造の実効的な組み替えや安定化に関わるため、実軸群としてまとめられる。

ここで重要なのは、この三分類が、エニアグラムのタイプ群を先に想定して外から与えられたものではなく、あくまで各 λ / H 軸の数学的・構造的・特性そのものから区別されるという点である。すなわち、本研究ではまず、各構造単位が判定的中心に属するのか、位相的保持に属するのか、実効的操作に属するのかという作用様式の違いにもとづいて三分類が立てられる。そのうえで、前節で与えた第0層のタイプ対応をこの数学的三分類に重ねると、結果として次の三つのタイプ群が現れる。

- 判定軸群 ($Hrb \cdot Hgb \cdot \lambda 3$) に対応するタイプ群 = $3 \cdot 7 \cdot 8$
- 虚軸群 ($\lambda 5 \cdot \lambda 7 \cdot \lambda 2$) に対応するタイプ群 = $4 \cdot 5 \cdot 9$
- 実軸群 ($\lambda 1 \cdot \lambda 4 \cdot \lambda 6$) に対応するタイプ群 = $1 \cdot 2 \cdot 6$

したがって、ここでの三群形成は、恣意的な群分けではなく、構造対応の結果として現れた群構造である。

そして、この三群は春井（2023）における発達三段階の群分けと、結果として同型になる。本研究では、春井（2023）にしたがい、エニアグラム九タイプの発達段階的な群分けを、

- 口唇期 = $4 \cdot 5 \cdot 9$
- 肛門期 = $3 \cdot 7 \cdot 8$
- 男根期 = $1 \cdot 2 \cdot 6$

として理解する。これを先ほどの数学的三分類と比較すると、

- 虚軸群 = $4 \cdot 5 \cdot 9$ = 口唇期
- 判定軸群 = $3 \cdot 7 \cdot 8$ = 肛門期
- 実軸群 = $1 \cdot 2 \cdot 6$ = 男根期

という対応が成立していることが分かる。すなわち、数学的には「位相的保持・内面化」に関わる群が口唇期に、「判断・基準化・差異の立ち上げ」に関わる群が肛門期に、「比較・実効的安定化・実混合」に関わる群が男根期に、それぞれ一致するのである。この一致は、あらかじめ発達段階を数学へ当てはめた結果ではなく、構造対応の結果として現れた同型性として理解されるべきである。

また、この第二の三群構造が、第0層表の中でどのように現れるかも重要である。三センターは、表をそのまま見れば、横一列ごとのまとまりとして直ちに読める。これに対して、判定軸群・虚軸群・実軸群は、表の静的な一断面を単純に横や縦に読むだけでは直ちには現れない。なぜなら、この三群は、 $SU(3)$ に内在する三項的循環によってはじめて明瞭な群として読み取られるからである。IV-3で述べたように、本研究で前後・上下・左右に対応づけている三系列は、単なる三本の列ではなく、 $SU(3)$ に内在する三成分構造から生じる、三項的に閉じた系列群として理解されるべきである。

このとき、判定軸群・虚軸群・実軸群は、単純な縦一列としてではなく、縦軸の循環反復の中で連続する斜め方向の軌跡として現れる。すなわち、表の縦軸の三行の次にまた同じ三行を連続させると、4・5・9、3・7・8、1・2・6という三群が、それぞれ一つの斜めの連なりとして立ち上がるのである。

さらに、本研究では、第0層表における横方向・縦方向・斜め方向という三つの読みを、SU(3)に内在する三つの基本的な操作様式に対応するものとして理解する。すなわち、横方向に現れる三センターのまとまりは、基底を固定したまま全体構造を保持する恒等的保存の位相に対応し、縦方向に反復可能な基底の移り変わりは、観測基底そのものを連続的に回転させるユニタリ回転の位相に対応し、斜め方向に現れる発達三段階の群構造は、基底の位置関係を離散的に組み替える Weyl反射の位相に対応する。SU(3)は rank 2 の Lie 代数であり、その Weyl 群は S_3 (3元の対称群) である。したがって、本研究で扱う配置構造においては、構造を保持する読み、基底を回転させる読み、基底を置換する読みという三つの基本モードを区別することができる。

第0層の表には、さらに第三の三群構造が存在する。それは、列方向の読みに伴う回転軸の差異として現れるものである。第0層の表を列方向に読むと、各系列の内部で参照面を回転させる軸として、前後回転軸258・上下回転軸369・左右回転軸147という三種の回転軸が区別される。前後回転軸は、対象への接近と離隔の反復から生じるずれや不足に関わり、上下回転軸は、位置づけと安定化に関わり、左右回転軸は、比較や分岐の中で位置が定まりきらない状態に関わる。この三種の回転軸は、第0層表の列方向に潜在する三群として読み取られ、後節で示すように、春井 (2023) における情動三状態——欲求不満・満足・不安——と同型になる。この対応の詳細については次節において論じる。

以上のように、第0層の表には、三つの異なる三群構造が重なっている。第一に、表をそのまま横方向に読むと、本能891・感情・234・思考567というエニアグラムの三センターが現れる。これは、横方向の恒等的保存の位相として読み取られる。第二に、各生成子・判定軸の数学的特性から立てられた判定軸・虚軸・実軸という三分類にタイプ対応を重ね、さらにRGB面の三項的循環を前提として縦軸を循環的に反復接続すると、斜め方向に、判定軸378 (肛門期)・虚軸459 (口唇期)・実軸126 (男根期) に対応する三群が現れる。これは、Weyl反射の位相として読み取られる。第三に、縦方向の回転軸の差異として、前後・上下・左右という三種の回転軸が列方向に潜在しており、これが情動三状態 (欲求不満258・満足369・不安147) に対応する。これは、ユニタリ回転の位相として読み取られる。

この意味で、第0層の配置は、単なるタイプ対応表ではない。それは、一方ではエニアグラムの既知の三センター構造を保持しつつ、虚軸・実軸・判定軸の三分類と発達三段階、そして回転軸と情動三状態との同型性を孕んだ、三重の三群構造を持つ配置面である。ここに、本研究における第0層配置の理論的意義がある。

次節では、ここで得られた発達段階の三群と情動三状態を基礎として、第0層の配置を第1～2層の身体化された実効配置へと変換し、発達三段階を縦軸に持つ3×3構造の中で、同じ九つの構造単位がどのように再配置されるのかを示す。

7. 第1～2層における生成子・判定軸の再配置

前節では、第0層の表に三つの三群構造が内在することを確認した。すなわち、行方向の三センター、斜め方向の発達三段階、そして列方向に潜在する情動三状態に対応する回転軸の三群である。本節では、このうち発達三段階の三群を縦軸として、情動三状態の三群を横軸として明示化することにより、第1～2層における生成子・判定軸の再配置を定義する。

まず、縦軸の基礎となるのは、前節で確認した発達三群である。すなわち、第0層において、虚軸群・判定軸群・実軸群という数学的三分類にタイプ対応を重ねると、それぞれ4・5・9、3・7・8、1・2・6という三つのタイプ群が現れ、これが春井（2023）のいう口唇期・肛門期・男根期の発達三段階と同型になることが確認された。したがって、本研究では、この三群を、第1～2層においてそのまま縦軸へと立て直し、発達三段階の軸として用いる。

次に、横軸の基礎となるのは、第0層の列方向に現れていた三群構造である。第0層のタイプ配置表を列ごとに読むと、前後軸の列には2・5・8、上下軸の列には3・6・9、左右軸の列には1・4・7が現れる。これは、春井（2023）で情動三状態で区分される三群と結果的に同型となった。したがって、本研究ではこの列方向の三群を、情動三状態と対応づけて理解する。すなわち、

- 2・5・8 = 欲求不満
- 3・6・9 = 満足
- 1・4・7 = 不安

である。

欲求不満は対象への接近と離隔の反復から生じるずれや不足として前後回転軸に、満足は位置づけと安定化に関わる状態として上下回転軸に、不安は比較や分岐の中で位置が定まりきらない状態として左右回転軸に、それぞれ対応するものとして整理される。したがって、第1～2層における欲求不満系・満足系・不安系の三列も、任意に付加された三分類ではなく、第0層における回転軸の差異が、第1～2層の機能相において状態差として現れたものとみなすことができる。

このことは、春井（2023）におけるエニアグラム理解とも整合的である。すなわち、春井（2023）では、エニアグラムタイプとは、乳幼児期において、どの発達段階で、どのような情動経験をしたかという二重の条件のもとで決定されるものとされている。そうであるならば、エニアグラムの九タイプは、構造的には、発達三段階と情動三状態という二つの三分割が交差する3×3の場の中で理解されるべきである。したがって、本研究では、第0層において斜め方向に現れていた発達三群を縦軸

に、列方向に現れていた情動三群を横軸に、それぞれ明示的に配置することにより、第1～2層の表を構成する。

本研究では、この再配置の結果を表として図示する（表3）。この表において、縦軸には、口唇期・肛門期・男根期という発達三段階が並び、横軸には、欲求不満・満足・不安という情動三状態が並ぶ。したがって、第1～2層の表は、第0層の3×3配置を単に並べ替えたものではなく、第0層において潜在していた二つの三群構造を、それぞれ発達と情動の軸として明示化した再配置表として理解されるべきである。

表3. 第1～2層における生成子・判定軸と九タイプの再配置

（縦軸は発達三段階、横軸は情動三状態を表す。第0層に潜在していた三つのうち二つの三群構造を、直交する二軸として明示化した配置である。）

	回転軸：前後軸 欲求不満	回転軸：上下軸 満足	回転軸：左右軸 不安
口唇期	λ 7 虚軸 T 5	λ 2 虚軸 T 9	λ 5 虚軸 T 4
肛門期	λ 3 判定軸 T 8	Hrb判定軸 T 3	Hgb判定軸 T 7
男根期	λ 4 実軸 T 2	λ 6 実軸 T 6	λ 1 実軸 T 1

この再配置において、第一行の口唇期には、前節で虚軸群として定義され、かつ口唇期と同型であることが確認された三つの構造単位、すなわち λ7・λ2・λ5 が並ぶ。第二行の肛門期には、判定軸群として整理された λ3・Hrb・Hgb が並ぶ。第三行の男根期には、実軸群として整理された λ4・λ6・λ1 が並ぶ。他方、横軸を見ると、第一列の欲求不満には λ7・λ3・λ4、第二列の満足には λ2・Hrb・λ6、第三列の不安には λ5・Hgb・λ1 が並ぶ。したがって、第1～2層の各位置は、「どの発達段階に属するか」と「どの情動状態に属するか」という二つの条件の交点として定義されることになる。

このように、第1～2層の表は、第0層に潜在していた二つの秩序を、直交する座標として顕在化したものである。第0層では、発達三段階に対応する群は斜め方向の動的軌跡として、情動三状態に対応する群は列方向の潜在構造として現れていた。これに対して第1～2層では、それらがそれぞれ縦軸と横軸として固定され、九つの構造単位が、発達と情動の交差の中で直接に読める配置へと変換される。この意味で、第1～2層への再配置とは、第0層の内容を捨てて新たな表を導入することではなく、第0層に内在していた二つの三群構造を、発達と情動の直交座標として明示化する操作である。

さらに、この再配置によって、第0層における「群としての一致」が、第1～2層では「行と列の一致」に変換されることも重要である。第0層では、口唇期・肛門期・男根期の三群は、自己他者結合を前提とした縦軸の循環反復の中で、斜め方向の連なりとしてしか現れなかった。また、欲求不満・満足・不安の三群も、列方向に潜在してはいたが、まだ発達三段階との直交関係としては明示されていなかった。これに対して第1～2層では、前者が行となり、後者が列となることによって、タイプ形成に関わる二つの三分割が、一つの3×3構造の中で同時に可視化される。ここに、第1～2層への再配置の本質的な意味がある。

また、この再配置によって、第0層で潜在していた三方向の読みのうち、縦方向の回転的読みが、ここで一段と具体的な表の軸として現れることになる。第0層では、横方向の三センターが恒等的保存の位相として、斜め方向の発達三群が Weyl反射の位相として現れていた。他方、第1～2層では、そこに介在していた縦方向の基底移り変わりが、発達三段階を支える構造軸として固定される。同時に、列方向に潜在していた情動三群も、心理学的意味を持つ横軸として明示される。したがって、第1～2層の表は、第0層において潜在していた複数の読みを、より明確な心理構造として整理し直したものとみなすことができる。

以上の再配置を通じて、第0層と第1～2層の役割の違いを改めて確認しておく。第0層は、SU(3)の内部構造を身体空間に配置する段階であり、各系列の判定点が座標的中心として前景化する座標相である。これに対して第1～2層は、発達三段階と情動三状態の直交構造の導入によって、置かれた構造の中でどの軸が実際に機能するかが決定される機能相である。この座標相から機能相への移行という視点は、以降の統合・分裂方向の導出において重要な前提となる。なお、第1～2層においてどの列が判定軸的意味を帯びるかについては、VI-4-4で改めて論じる。

8. 既存配置との比較と本章のまとめ

ここまで本章では、エニアグラムの九タイプを、SU(3)の身体化された配置構造として読み直すために、まず第0層における生成子・判定軸の配置を定め、ついで各タイプとの対応を与えた。その結果、第0層の中には、横方向に現れる三センター、斜め方向に現れる発達三段階と同型な三群、さらに列方向に現れる三群という、三つの三群構造が認められることを示した。さらに本研究では、このうち後二者を、それぞれ縦軸と横軸として明示化することにより、第1～2層の3×3配置を導いた。ここで横軸を成す列方向の三群は、第1～2層において、春井(2023)に従い、欲求不満・満足・不安という情動三状態として読み直される。本節では、これらの結果を踏まえ、既存の発達段階配置との比較を行い、本研究の配置の意義をより明確にする。

比較対象として取り上げるのは、リソ,D.R.(1992)に見られる発達段階の対応である。リソ,D.R.(1992)では、エニアグラムのタイプ群に対して、口唇期・肛門期・男根期の三段階を対応づける枠組みが提示されているが、本研究が採用する春井(2023)の配置とは、肛門期と男根期の位置づけに差がある。すなわち、本研究では、口唇期 = 4・5・9、肛門期 = 3・7・8、男根期 = 1・2・6と

いう対応を採用しているのに対し、リソ,D.R. (1992) では、口唇期 = 4・5・9、肛門期 = 1・2・6、男根期 = 3・7・8 という対応が与えられる。この違いは、一見すると肛門期と男根期のラベルの入れ替えに見えるが、本研究の立場から見るならば、単なる名称の差ではなく、配置構造そのものの整合性に関わる差である。

まず第0層において、本研究の配置では、口唇期が虚軸群、肛門期が判定軸群、男根期が実軸群にそれぞれ対応する。したがって、口唇期の保持・内面化、肛門期の判断・制御、男根期の外向的操作という発達段階の意味が、各群の構造特性と無理なく一致する。とりわけ重要なのは、肛門期が上下軸に対応している点である。上下軸は、三つの軸の中で、重力の作用により安定方向が一意に定まる軸であり、身体にとってもっとも基本的な安定／不安定の判定軸として働く。したがって、保持・制御・判断の契機が立ち上がり、身体的にも歩行が始まり重力と関係する肛門期が、判定軸群および上下軸と対応することは、身体化された SU(3) の構造としても、発達論的にも強い整合性を持つ。

これに対して、リソ,D.R. (1992) の対応を第0層の配置に重ねると、肛門期が1・2・6、男根期が3・7・8 となるため、肛門期が実軸群、男根期が判定軸群を担うことになる。すると、本研究が重視する、肛門期における保持・制御・判断と判定軸との一致、ならびに上下軸の重力的基準性と肛門期との一致が失われる。さらに、男根期は本研究では、複数の他者関係や規範的区別が立ち上がる段階として左右軸と対応づけられていたが、リソ,D.R. (1992) の対応では、男根期が判定軸群に置かれることになり、この意味対応も崩れる。すなわち、リソ,D.R. (1992) の対応は、発達段階のラベルを九タイプに割り当てること自体は可能であっても、第0層における軸の意味と発達段階の意味とを、同じ水準で整合的に支えることができないのである。

この差は、第1～2層においてさらに明瞭になる。本研究の配置では、第0層において斜め方向に潜在していた発達三群を縦軸に、列方向に潜在していた三群を、情動三状態として読み直したうえで横軸に置くことにより、第1～2層の3×3配置が構成される。そして、この表にヌーソロジーの自己他者結合構造を導入し縦軸を連続させると、第0層で横方向に現れていた三センター(8・9・1、2・3・4、5・6・7)が、斜め方向の連なりとしても読み取れる(表3)。

II-1で述べたように、ヌーソロジーでは、乳幼児期の発達を担う ψ_{10} は $\psi_{1\sim 8}$ をなぞる運動を行うが、その際、自己の $\psi_{7\sim 8}$ (男根期)は他者の $\psi_{1\sim 2}$ (口唇期)と結合して円環的構造を持つと考えられる。したがって、発達段階を表の中で単純な一回限りの上下関係として捉えるのではなく、最下段(男根期)が次の最上段(口唇期)へ接続する循環構造として捉えることが可能になる。この縦軸の反復的な連結を第0層表に適用すると、表は単なる静止した3×3の格子ではなく、周期的に連なる配置面として読まれるようになる。

このことは、本研究の配置が、第0層の幾何学的秩序を第1～2層へ移した後も、なお複数の構造的整列を保っていることを示している。つまり、本研究の配置では、発達三段階の秩序だけでなく、三センターの秩序もまた、再配置後に別の方向で保存されているのである。

これに対して、リソ,D.R. (1992) の対応で第1~2層表を構成した場合には、このような三センターの斜め整列は現れない。すなわち、リソ,D.R. (1992) の配置は、第1~2層において横方向の分類を与えることはできても、本研究が確認するような斜め方向の保存構造を示さない。その結果、第0層から第1~2層への移行を、単なる並べ替え以上の意味を持つ再配置として説明することが難しくなる。したがって、リソ,D.R. (1992) の対応は、第0層において軸意味の整合性を欠くだけでなく、第1~2層においても、本研究が確認する構造保存の一貫性を持たないのである。

この比較を通じて明らかになるのは、第0層から第1~2層への移行が、単なる図の回転ではないということである。第0層では、三センターは、前後・上下・左右という三系列が身体空間に埋め込まれた結果として、横方向の一次分類として現れる。これに対して第1~2層では、縦軸に発達三段階、横軸に情動三状態が採用されるため、三センターはもはや主軸そのものとしては現れない。しかし、自己他者結合構造を導入すると、三センターは斜め方向の連なりとして再び読み取られる。これは、三センターが第0層では配置の直接的分類として現れ、第1~2層では再配置後にもなお保存される構造として現れていることを意味する。したがって、三センターの「横方向から斜め方向への移行」は、構造の消失ではなく、主分類から保存パターンへの位相変化として理解されるべきである。

ここに、本研究の配置の特徴がある。本研究は、既存のエニアグラム理論に対して、外側から新しい象徴的意味を付け加えることを目的としているのではない。そうではなく、まず SU(3) の身体化された配置構造を定め、その配置の中にどのような秩序が現れるかを確認し、そのうえで発達段階や情動状態を対応づける、という順序を取っている。このため、本研究で採用される配置の妥当性は、単なる印象や語感ではなく、その配置が第0層および第1~2層の双方において、どのような構造的整合性を示すかによって評価される。リソ,D.R. (1992) との比較は、この方法論上の差を具体的に示している。

以上のことから、春井 (2023) の配置は、第0層においては軸の意味と発達三段階の意味を整合させ、第1~2層においては自己他者結合を含む再配置の中で、発達三段階と情動三状態、そして三センターについても構造を保存するという点で、リソ,D.R. (1992) の配置よりも、本研究の SU(3) モデルと深く整合していると結論づけられる。

以上を踏まえると、本章で明らかになったことは、次のように整理できる。第一に、エニアグラムの九タイプは、第0層において、SU(3) の身体化された配置の中に、生成子・判定軸として配置できる。第二に、その配置の中には、横方向の三センターに加えて、斜め方向の発達三群と、列方向の三群という、三つの三群構造が認められる。第三に、このうち後二者を、それぞれ発達三段階と情動三状態の軸として明示化することで、第1~2層の 3×3 配置が導かれる。第四に、第0層から第1~2層への移行は、単なる回転ではなく、同じ配置に対してどの方向を主軸として採用するかを切り替える再配置操作として理解される。第五に、この全体構造は、春井 (2023) の発達対応を採用したときに最も整合的に成立し、リソ,D.R. (1992) の対応では、同様の軸意味の一致や構造の保存が現れない。

この意味で、本章は、エニアグラムの九タイプ配置が、単なる慣習的な並びや経験的な整理ではなく、SU(3)の身体化された配置構造の中に、幾何学的に導かれる秩序であることを示した章であったと言える。とりわけ本研究が示したのは、九タイプの位置、三センター、発達三段階、情動三状態が、それぞれ別々の層の知識として寄せ集められているのではなく、一つの3×3構造の中で相互に整合し、しかも層の移行に応じてその現れ方を変えるということである。ここに、本章の理論的意義がある。

したがって、本章の到達点は、エニアグラムを「九つの性格記述」として理解する立場から一歩進み、それを、配置・層差・再配置の秩序を持つ構造系として再定式化した点にある。この再定式化によって、九タイプの位置づけだけでなく、今後扱うタイプ1～9の順序・隣接性・統合・分裂の方向といった問題も、単なる臨床的経験則としてではなく、配置構造から導かれる問題として扱うことが可能になる。本章で整えられた第0層と第1～2層の差、および両者をつなぐ再配置の論理は、その後の議論のための基盤を与えるものである。

VI. 順序・ウィング・統合分裂方向の構造的導出

1. 本章の課題

前章では、エニアグラムの九タイプを、SU(3)の身体化された配置構造の中に位置づけ、第0層および第1～2層における生成子・判定軸の配置を確定した。その結果、九タイプの位置は、単なる慣習的な並びではなく、身体化されたSU(3)構造の中に現れる秩序として理解できることが明らかになった。また、第0層には横方向の三センター、斜め方向の判定軸・虚軸・実軸（発達三群）、列方向の回転軸（情動三群）という三つの構造が潜在しており、それらが第1～2層において、発達と情動の直交座標として再配置されることも確認された。

本章の課題は、こうして前章で確定した配置を前提として、エニアグラムにおける三つの主要な秩序、すなわち「1～9の順番」「隣接性」「統合・分裂方向」を、SU(3)の配置構造から順に導出することである。ここで重要なのは、これらがそれぞれ別個の経験則として与えられるのではなく、同じ配置構造の中から、異なる水準の秩序として読み出されるという点である。したがって本章では、まず九タイプの基本的な並び順がどのように成立するのかを示し、次にその並びから隣接性の意味を整理し、最後にその上に重なる第二の循環として、統合・分裂方向がどのように現れるのかを論じる。

この順序を取る理由は明確である。エニアグラムにおいて、最初に問題となるのは、九タイプがなぜその順番で並ぶのかという、もっとも基礎的な配置の秩序である。隣接性や統合・分裂方向は、その基礎配置の上に現れる二次的な関係として理解されるべきである。したがって本章では、まず一次的な配置秩序としての「1～9の順番」を明らかにし、その後に局所的な連続性としての「隣接性」、さらに非隣接的な第二の循環としての「統合・分裂方向」へと進む。このように段階を追って整理す

ることにより、エニアグラムにおける複数の秩序が、相互に無関係な規則ではなく、一つの配置構造の中に重なって現れることを示すのが、本章の基本方針である。

したがって、本章で行うのは、既存のエニアグラム理論に見られる順番の説明を、そのまま繰り返すことではない。むしろ、それらがなぜそのような形で成立するのかを、前章までに整えた第0層および第1～2層の配置に立ち返って、構造的に説明することである。この意味で本章は、エニアグラムの実践的な読み方を解説する章ではなく、九タイプの秩序そのものがどのように成立するのかを、配置の内側から示す章である。そして、この章で得られる整理は、以後の考察において、エニアグラムの諸規則を単なる経験則ではなく、配置構造から導かれる必然的な関係として理解するための土台となる。

2. タイプ1～9の順番の導出

エニアグラムにおいて、九タイプは通常、1・2・3・4・5・6・7・8・9という数字順で呼ばれる。しかし、この数字順が単なる便宜的な番号付けなのか、それとも配置構造そのものに根拠を持つ順序なのかは、これまで必ずしも明確ではなかった。本研究の立場では、この順番は慣習的なラベルではなく、第0層において確定する身体化された SU(3) 配置の中から導かれる、基本的な巡回順序として理解される。

前章で述べたように、本研究では、身体化された対称性の破れの順序として、前後→上下→左右という軸順序が導入されている。この順序に従って、縦軸には RGB 面に対する垂直軸として、前後（RG 面）、上下（RB 面）、左右（GB 面）を取り、横軸には各参照面に付随する回転軸として、同じく前後、上下、左右を取る。こうして得られる垂直軸と回転軸の交差が、第0層の 3×3 配置、すなわち表1の基本表である。

この第0層の表に対して、さらに本研究では、各生成子・判定軸の構造的特性を考慮しながらタイプ対応を与える。すなわち、前後系列には 8・9・1、上下系列には 2・3・4、左右系列には 5・6・7 が配置される。したがって、表2に示されるタイプ配置は、最初から数字を並べたものではなく、まず SU(3) に由来する第0層の基本表があり、そのうえにタイプ対応を重ねた結果として得られる配置である。

この配置を、縦軸の前後→上下→左右という順序と、各行内部における回転軸の前後→上下→左右という順序に従って読むと、まず前後系列において 8 → 9 → 1 が現れる。次に、上下系列に移ると 2 → 3 → 4 が現れ、さらに左右系列に移ると 5 → 6 → 7 が現れる。したがって、第0層の表からは、

8 → 9 → 1 → 2 → 3 → 4 → 5 → 6 → 7 → 8

という、一つの閉じた巡回が得られる。

ここで重要なのは、この巡回が単に三行を順に読んだ結果ではなく、SU(3) に内在する三項的循環に支えられているという点である。IV-3で述べたように、本研究で前後・上下・左右に対応づけている三系列は、SU(3) の三成分 R・G・B から作られる二成分の組合せとして、三項的に閉じた系列群である。

このため、回転軸左右系列の終点から再び回転軸前後系列の始点へ戻る接続、すなわち 7 → 8 も、外から補われた便宜的な接続ではない。むしろそれは、前後→上下→左右→前後という三項循環が、第0層の配置の内部にすでに含まれていることの表現である。したがって、タイプ順の円環性は、数字の上でたまたま与えられたのではなく、身体化された SU(3) 配置そのものから生じている。

この巡回は、数字の並びとして見れば、通常のエニアグラムで見慣れた順序と一致している。すなわち、出発点を 1 に取り直せば、

1 → 2 → 3 → 4 → 5 → 6 → 7 → 8 → 9 → 1

となる。したがって、本研究の立場では、エニアグラムにおける 1~9 の基本順序とは、最初から数字がそのように並んでいたから成立しているのではなく、第0層における 8 → 9 → 1 → 2 → 3 → 4 → 5 → 6 → 7 → 8 という巡回を、1 を起点として読み替えた結果として成立しているのである。ここで重要なのは、数字の順番が先にあり、その後に構造が当てはめられるのではなく、逆に、身体化された配置の巡回が先にあり、その巡回に対して数字の順番が与えられるという順序である。

なぜタイプ1が起点となるのかについては、いくつかの構造的な事実が根拠候補として挙げられる。第一に、 λ_1 は Gell-Mann 行列の中で最も単純な構造を持つ。具体的には $\lambda_1 = [[0,1,0],[1,0,0],[0,0,0]]$ であり、第1・第2成分 (RとG) の実軸上の対称的な混合として、虚数部を持たず、固有値も ± 1 と 0 という最も素朴な形をとる。第二に、RG面はIV-3で述べたように、クォーク系における質量階層の類比から三面の中で最初に前景化する最も基底的な参照面である。 λ_1 (タイプ1) はそのRG面における実軸混合の生成子として、三面の中で最も基底的な面の、最も顕在的な位置を占めている。第三に、第0層の配置において λ_1 (タイプ1) はRG系列の最後の位置——すなわち第一の面 (RG面) が完結し、第二の面 (RB面) へと系列が移行する境界点——に位置している。この意味で、タイプ1は第一の系列の最も顕在的な終点であると同時に、全体の巡回が次の面へと開かれる接続点でもある。これらの事実は、タイプ1が起点として位置づけられることの構造的な根拠候補として示唆的である。ただし、これらをもってSU(3)の数学的構造からタイプ1の起点性を一意に導出することは現時点では困難であり、この点の厳密な検討は今後の課題としたい。

以上のように、エニアグラムにおける 1~9 の基本順序は、第0層において確定した身体化された SU(3) 配置を、縦軸と横軸の順序に従って巡回的に読むことによって導かれる。このとき、配置の内部では 8 → 9 → 1 → 2 → 3 → 4 → 5 → 6 → 7 → 8 という閉路が成立しており、通常の数値順 1 → 2 → 3 → 4 → 5 → 6 → 7 → 8 → 9 → 1 は、その同じ閉路を 1 を基点として読み替えたものである。し

たがって、エニアグラムの数字順は、外から与えられた慣習ではなく、第0層の巡回構造そのものから導かれる一次的秩序として理解されるべきである。

このことにより、九タイプの順番は、本研究のモデルの中で最初に成立する基本秩序として位置づけられる。そして、この一次的な巡回順序が確定することによって、次に問題となるのは、この順序の中で隣り合うタイプどうしが、どのような意味で互いに影響し合うのか、という点である。次節では、この1~9の基本順序を前提として、隣接するタイプどうしの関係がどのような構造的意味を持つのかを整理し、エニアグラムにおける隣接性の基礎を明らかにする。

3. 隣接性とウィングの基礎

前節では、エニアグラムにおける1~9の基本順序が、第0層において確定した身体化されたSU(3)配置を、縦軸と横軸の順序に従って巡回的に読むことによって導かれることを示した。本節では、この一次巡回を前提として、隣り合うタイプどうしの関係、すなわち隣接性がどのような構造的意味を持つのかを整理する。

エニアグラムにおいて、隣接するタイプどうしの関係は、一般にウィングや近接的な性格傾向の変形の基礎として理解されてきた。本研究の立場では、この隣接性もまた、経験的観察だけに依拠するのではなく、前節で確認した基本巡回の内部から説明できる。すなわち、一次巡回において、あるタイプに最も近いのは、その直前と直後に位置する二つのタイプである。したがって、タイプ1に対しては9と2、タイプ4に対しては3と5、タイプ7に対しては6と8が、それぞれ隣接する。

しかし、この隣接性は単に「円環上で隣り合っている」というだけではない。第0層の各位置は、垂直軸系列と回転軸系列の交差によって定まっている。したがって、隣接するタイプどうしとは、単なる番号の近さではなく、この配置の中で最も短く移行できる位置どうしとして理解されるべきである。この意味で、ウィングの基礎は、「似ているから影響し合う」という印象的説明ではなく、まず第0層の配置における構造的近接として捉えられる。

また、この隣接性は各行の内部だけに閉じているわけではない。前節で示したように、第0層の巡回は、前後系列から上下系列へ、上下系列から左右系列へ、さらに左右系列から再び前後系列へと閉じている。したがって、たとえば7→8という接続も、三系列の循環に支えられた構造的な隣接であり、外から補われたものではない。ここに、第0層の隣接性が、単なる平面的近接ではなく、SU(3)の三項構造に由来する循環的近接であることが示されている。

このように見ると、ウィングとは、あるタイプにとって両隣にある二タイプが、同じ巡回構造の中で最も近い移行先として存在していることを意味する。したがって、あるタイプが純粋な一点としてのみ表れるのではなく、両隣の型を部分的に帯びうるという古典的な解釈は、本研究の枠組みでは、一次巡回の内部で与えられる構造的近接性として言い換えられる。

なお、この隣接性は、後に扱う統合・分裂方向とは区別されるべきである。隣接性は、一次巡回の中で隣り合う点どうしの関係であり、あくまで連続的な近接性に属する。これに対して統合・分裂方向は、同じ九点配置の上に現れる別種の循環であり、より大きな跳躍を含む。したがって、本研究の構成上、まず隣接性を先に扱うのは、これが一次巡回に直接属する最も基本的な関係だからである。

以上のように、エニアグラムにおける隣接性は、第0層において確定した一次巡回の内部で、各点の直前と直後に位置する点との関係として導かれる。しかもその近さは、単なる番号の近さではなく、垂直軸系列と回転軸系列の交差によって定まる配置の中で成立する構造的近接である。この意味で、ウィングの基礎は、第0層の巡回構造そのものに求められるべきである。次節では、この隣接性とは異なる第二の循環として、統合・分裂方向がどのように現れるのかを整理する。

4. 統合・分裂方向の導出

4-1. 問題設定

前節までに、本研究では、エニアグラムにおける九タイプの基本順序と、その順序に内在する隣接性を、第0層において確定した身体化されたSU(3)配置から導いた。すなわち、九タイプは、まず1～9の一次巡回として並び、そのうえで、隣り合うタイプどうしのあいだに局所的な連続性が成立することが示された。これにより、エニアグラムの基本的な並びと近接関係は、単なる経験的な慣習ではなく、第0層の配置構造に根拠を持つことが明らかになった。

しかし、エニアグラムには、これとは別に、古くから統合・分裂方向として知られているもう一つの関係が存在する。これは、隣接するタイプどうしの関係ではなく、あるタイプが、成長あるいは退行の局面で、離れた別のタイプへと接続されるという関係として表現されてきた。したがって、ここで問題となるのは、すでに明らかにした一次巡回や隣接性とは異なる、第二の循環秩序が、九点配置の上になどのように成立しているのか、という点である。本節の課題は、この統合・分裂方向を、外から付加された経験則としてではなく、前章までに整えたSU(3)的配置の内側から導き出すことである。

このとき重要なのは、統合・分裂方向が、一次巡回の延長としてそのまま現れるわけではない、という点である。一次巡回は、1～9の順番として九点を一周するもっとも基本的な秩序であり、隣接性はその一次巡回の上で成立する局所的な連続性であった。これに対して統合・分裂方向は、そうした局所的な連続ではなく、九点配置の内部に潜在している別種のまとまり、すなわちSU(3)に固有の二つの生成子族への分解を前提として現れる。したがって、本節ではまず、SU(3)の構造からなぜ九タイプが二つの群に分かれるのかという根拠を確認し、そのうえで、それぞれが独自の循環を成すことを示す必要がある。

III-3、III-4で述べたように、SU(3)においては生成子は大きく二種類の役割を担う。一つは、状態に基準を与え、安定化させる対角側（カルタン部分代数）であり、もう一つは、その基準のもとで状態を動かし、別の位相へ移す非対角側（ A_2 ルート系）である。この役割差は、身体化された配置として読むとき、九タイプの上に「状態を定める側」と「状態を移す側」という二重構造として現れる。

統合・分裂方向を導くとは、この二つの生成子族が、それぞれどのような循環秩序を形成しているのかを明らかにすることにほかならない。

ただし、どの具体的なタイプが対角側（判定軸群）に属し、どのタイプが非対角側（遷移群）に属するかは、第0層基本配置の確認だけでは定まらない。その確定には、上下回転軸の構造的特殊性という追加の条件が必要となる。本節ではまずその前提となる構造的分解の論理を示し、具体的なタイプの確定は4-3・4-4において行う。

したがって、本節の問題設定は、次のように要約できる。すなわち、エニアグラムにおける統合・分裂方向とは、一次巡回や隣接性とは別に、九タイプがSU(3)に固有の二つの生成子族（対角側と非対角側）へ分かれることから生じる非局所的な循環構造であり、この二重循環の数理的根拠は第0層のSU(3)配置構造に由来する。第0層において既に内包されているこの潜在的構造が、上下軸前景化を経て、第1～2層における発達三段階と情動三状態の導入によって機能的・心理的な方向として顕在化する。本節では、この論理的順序——まず第0層での潜在的成立、次に第1～2層での機能的顕在化——にしたがって統合・分裂方向の導出を進める。

4-2. 二つの生成子族への自然分解

本節では、SU(3)の身体化された配置から、九タイプが二つの生成子族へ自然に分解されるという構造的根拠を示す。ここでいう「二つの生成子族」とは、(i) 判定軸に相当する側（対角側・カルタン部分代数）と、(ii) それ以外の遷移側（非対角側・ A_2 ルート系）という、SU(3)に固有の役割分担に対応するものである。なお、この分解においてどの具体的なタイプが判定軸側に属するかは4-3・4-4で行う。本節では、なぜ九タイプが「3点+6点」という形で分かれるのかという構造的根拠を示すことを目的とする。

SU(3)を身体化された配置として読むとき、そこには大きく分けて二つの働きがある。一つは、状態に基準を与え、その状態をラベルづけし、安定化させる働きである。もう一つは、その基準のもとで状態を動かし、別の位相へ移していく働きである。前者が判定軸側（対角側）、後者が遷移側（非対角側）に対応する。この役割差はSU(3)の代数構造に由来するものであり、身体化された配置においても同様に現れる。

この役割差が九点配置に現れるのは、本研究が採用する三系列（RG面：前後/RB面：上下/GB面：左右）の内部構造に由来する。各系列が三つの位置を持つとき、それが必ず「1つの判定軸」と「2つの遷移側」に分かれるという役割分化が成立する。直観的には、各系列は「基準を与える点」と「その基準のもとで状態が動く点」から成り、前者が判定軸、後者が遷移側に相当する。ここで重要なのは、三系列のどれを取っても、三点は「同質な三点」ではなく、1点が基準（判定）として立ち、残り2点はその周囲で動く（遷移）という非対称な役割分担を持つという点である。

すると、九点配置は、RG面（前後）・RB面（上下）・GB面（左右）という三つの系列から構成されるため、各系列の内部で生じる「1つの判定軸+2つの遷移側」という役割分担が、三系列それぞれに現れることになる。したがって全体としては、

■ 判定軸側：1点 × 3系列 = 3点

■ 遷移側：2点 × 3系列 = 6点

という分割が現れる。すなわち、「三点環」と「六点環」が成立することは、九タイプを外から分類する以前に、配置原理そのもの（三系列の身体化された配置）が要請する構造帰結となる。

ここで、この二環分解をSU(3)の側から改めて言い換えると、判定軸側の三点はカルタン部分代数に、遷移側の六点はA₂ルート系にそれぞれ対応する。A₂ルート系の六方向は二次元平面上で正六角形を成し、全体として閉路を構造的に含んでいる。したがって、遷移側の六点が六方向の閉路をなしうることはA₂ルート系の位相的性質から与えられる。また、判定軸側の三点は、RGB面の三項循環（RG→RB→GB→RG）のもとで閉じた三点環をなしうるものが構造的に示唆される。

なお、この二環分解において「三点環」が実際にどのタイプで構成されるかは、この段階では未確定である。この確定こそが4-3・4-4の課題であり、上下回転軸の構造的特殊性という追加の条件によって初めて定まる。次節では、まず第0層基本配置においてA₂ルート系との対応を確認し、その後上下軸前景化によって判定軸列がどのように読み替えられるかを論じる。

4-3. 第0層基本配置とA₂ルート系の対応

前節では、統合・分裂方向の前提として、九タイプが判定軸側（三点環）と遷移側（六点環）へ自然分解されることを確認した。本節では、この二分の数理的根拠を、第0層基本配置とA₂ルート系の対応として明示する。

第0層の3×3配置において、SU(3)の代数的構造に忠実な読み方（第0層基本配置）では、各参照面に固有の対角生成子が判定軸として機能する。すなわち、RG面に対してはλ₃ (T₈)、RB面に対してはHrb (T₃)、GB面に対してはHgb (T₇) が判定軸として位置づけられ、残る六点λ₁ (T₁)・λ₄ (T₂)・λ₅ (T₄)・λ₇ (T₅)・λ₆ (T₆)・λ₂ (T₉) が非対角生成子として遷移側に属する（表2）。

この分割のうち、判定軸側の三点 (T₃・T₇・T₈) はSU(3)のカルタン部分代数に、遷移側の六点 (T₁・T₂・T₄・T₅・T₆・T₉) はA₂ルート系にそれぞれ対応する。ただし、A₂ルート系との対応の自然な単位は個々のλ行列ではなく、実部と虚部のペアとして形成される複素対である。非対角六点は、{T₁, T₉}・{T₂, T₄}・{T₅, T₆}という三つの複素対に分かれ、それぞれA₂の三つのルート方向 (α₁・α₂・(α₁+α₂)) に対応する。

これら三つのルート方向 (±α₁, ±α₂, ±(α₁+α₂)) は二次元平面上で正六角形を成し、全体として閉路を構造的に含んでいる。非対角六点が「三つのルート方向の複素対」として組織されている以上、それらが六方向の閉路をなしうることはA₂ルート系の位相的性質から構造的に導かれる。この意味で、六点環は第0層基本配置において潜在的な閉路として構造的に内包されている。

したがって、本研究の六点環は、数理的には「状態を別の状態へ運ぶ非対角生成子（ルート方向）の連鎖」として表現できる。ここで重要なのは、この環が「固定点」そのものではなく、固定点間を

結ぶ変換の軌道を表しているという点である。六点環は、判定軸側（三点環）が与える基準のもとで、状態が別の位相へ移りうる"道筋"をSU(3)のルート構造に対応づけて具体化したものと位置づけられる。

ただし、この段階での判定軸はあくまでT3・T7・T8（各参照面の対角生成子）であり、エニアグラムの統合・分裂方向で実際に機能するT3・T6・T9とはまだ一致していない。また、六点環の具体的な節点の順序——すなわちどのタイプからどのタイプへという個別の矢印——は、A₂ルート系の閉路構造のみからは一意に定まらない。複素対の内部での実部と虚部の取り方、および三つの複素対をどの順で辿るかという選択が残るためである。

以上より、第0層基本配置においてA₂ルート系との対応から六点環の潜在的閉路が構造的に導かれることは示されたが、判定軸をT3・T6・T9へと読み替え、かつ六点環の具体的な順序を確定するためには、身体化された配置構造に由来する追加の条件が必要となる。次節では、この追加の条件として、上下軸（重力軸）の構造的特殊性がいかにして判定軸列の読み替えをもたらすかを論じる。

4-4. 上下軸前景化による判定軸列の読み替え

前節では、第0層基本配置においてA₂ルート系との対応から六点環の潜在的閉路が構造的に与えられることを示した。しかし、そこでの判定軸はT3・T7・T8（各参照面の対角生成子）であり、エニアグラムの統合・分裂方向で実際に機能するT3・T6・T9という判定軸列とは一致していなかった。本節では、この不一致を解消する条件として、3×3配置表における行方向と列方向の構造的役割の違いと、上下回転軸の物理的特殊性を論じ、上下回転軸列（T9・T3・T6）が判定軸の意味を帯びた列として前景化する根拠を示す。さらに、前景化によって確定した遷移側六点がRGB面の三項循環と組み合わさることで、具体的な循環順序として読み取れることを示す。

まず、第0層3×3配置表において行方向（面垂直軸）と列方向（回転軸）が変換において果たす構造的役割の違いを確認する。行方向は変換によって動く対象、すなわち参照面（RG・RB・GB）を規定するのに対し、列方向の回転軸は変換を通じて保持される不変量を規定する。回転変換において参照面は回転によって向きを変えるが、回転軸そのものは変換の中で動かない。判定軸の役割——比較・識別・安定化の基準を与えること——は、変換される側ではなく、変換を通じて保持される側が担う。したがって判定軸の意味を帯びるのは行方向（面垂直軸）ではなく列方向（回転軸）である。

次に、三つの回転軸の列方向の中でも、上下回転軸列が特に際立つ理由を示す。IV-3で論じたように、身体化された配置構造において上下軸は、重力によって安定方向が一意に定まるという物理的特殊性を持つ。前後軸・左右軸まわりの回転は質量を上下方向に移動させるため重力に抗する力を要するのに対し、上下軸まわりの回転は重力方向と直交するためエネルギー的に最も安定している。すなわち、上下回転軸は三つの回転軸の中で最も保持されやすい不変の軸として際立つ。

以上の二段階——変換を通じて保持される側が回転軸（列方向）であること、その中で上下回転軸が重力場において最も安定すること——が重なることで、上下回転軸列（T9・T3・T6）が判定軸的

意味を帯びた特権的列として第0層の構造の中に潜在していると理解される。この読み替えは外部から恣意的に持ち込まれるものではなく、第0層3×3配置表の構造的役割差と身体化された重力条件とが交差する地点に現れる統合的な読み方として位置づけられる。本研究ではこれを「上下軸前景化」と呼ぶ。この上下軸前景化によって、判定軸と遷移側の対応は次のように読み替えられる。

■ 第0層基本配置：判定軸 = T3・T7・T8（各参照面の対角生成子）、遷移側 = T1・T2・T4・T5・T6・T9

■ 上下軸前景化：判定軸列 = T3・T6・T9（上下回転軸列）、遷移側 = T1・T2・T4・T5・T7・T8

ただし、上下軸前景化によって遷移側の六点（T1・T2・T4・T5・T7・T8）が確定しても、これだけではその六点がどの順序で閉路を形成するかは定まらない。具体的な循環順序を定める役割を担うのは、VI-2で示したRGB面の三項循環構造である。

VI-2では、参照面がRG→RB→GB→RGという順序で循環的に更新される構造として記述した。上下軸前景化と組み合わせることで、遷移側六点は判定軸列（T3・T6・T9）を中央に挟みながら、この三項循環を辿る閉路として具体化される。

ここで重要なのは、遷移側六点による閉路はRG→RB→GB三段階では完結せず、GB→RGの境界をまたいでさらに一周、すなわちRG→RB→GB→RG→RB→GBという三項循環の二周分を辿ることを許す読み方を導入したときに閉路として読み取ることができるという点である。この結果として現れる循環が、T1→T7→T5→T8→T2→T4→T1という六点環であり、これが第0層における統合・分裂方向の潜在的構造として読み取れる（図4）。

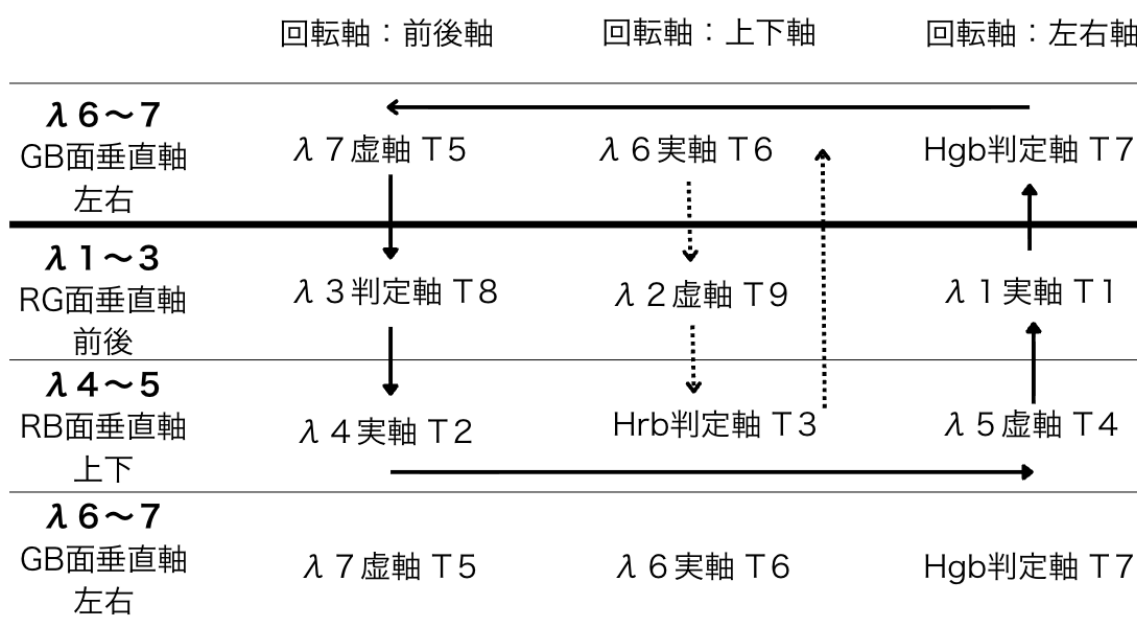


図4. 第0層における統合・分裂方向（上下回転軸前景化）

なお、この段階での六点環はあくまで潜在的・構造的なものであり、その心理的に意味ある方向としての機能的顕在化は、発達三段階と情動三状態の導入を待つ必要がある。次節では、この潜在的循環が第1～2層においてどのように機能的・心理的な方向として現れるかを示す。

4-5. 第1～2層における三点環・六点環の機能的顕在化

前節までに、第0層においてA₂ルート系の潜在的閉路として読み取れる六点環が、上下軸前景化とRGB面の三項循環の組み合わせによって、T1・T2・T4・T5・T7・T8という具体的な六点の環として構造的に内包されていることを示した。本節では、この潜在的循環が第1～2層において発達三段階と情動三状態の導入によってどのように機能的・心理的な方向として顕在化するかを示す。説明の順序として、まず判定軸列として確定する三点環を示し、次にそれを前提として六点環を導出する。

三点環の機能的顕在化

第1～2層への移行において決定的な役割を果たすのは、縦軸への発達三段階（口唇期・肛門期・男根期）の導入と、横軸への情動三状態（欲求不満・満足・不安）の導入による対称性の破れである。V章で示したように、この導入によって第0層の3×3配置は機能的に分化し、上下回転軸列（T9・T3・T6）が各発達段階の「有効安定点」すなわち満足系列の中央列として明示的に前景化する。

第0層で上下回転軸列として潜在していたT9・T3・T6は、第1～2層においてそれぞれ口唇期・肛門期・男根期の有効安定点として機能的に前景化する。すなわち、口唇期の判定点としてT9が、肛門期の判定点としてT3が、男根期の判定点としてT6が位置づけられる。

この三点が閉じた循環を形成するのは、II-1で述べたヌーソロジーの自己他者連結構造による。発達三段階は単なる時間的継起ではなく、 $\psi 7 \sim 8$ （男根期）と $\psi^* 1 \sim 2$ （口唇期）の連結を通じて男根期の完了が次の口唇期への移行条件として構造的に与えられており、閉じた循環として成立している。この循環が判定軸の三点として現れることで、T6（男根期）→T9（口唇期）→T3（肛門期）→T6（男根期）という三点環が確定する。三点環は変換の道筋そのものではなく、変換がその都度「どの基準で安定化し、どの枠組みで再び位置づけられるか」という判定枠組みの巡回として機能する。

六点環の機能的顕在化

三点環（T3・T6・T9）が判定軸列として確定することで、残る六点（T1・T2・T4・T5・T7・T8）が遷移側として機能的に前景化する。この六点が具体的な閉路を形成する様子を、第1～2層の反復配置（図5）を用いて確認する。この反復配置は、II-1で述べたヌーソロジーの自己他者結合構造にもとづき、口唇期・肛門期・男根期という発達三段階を縦方向に繰り返して配置することで、男根期から口唇期へとまたがる非局所的な接続を平面上で可視化したものである。

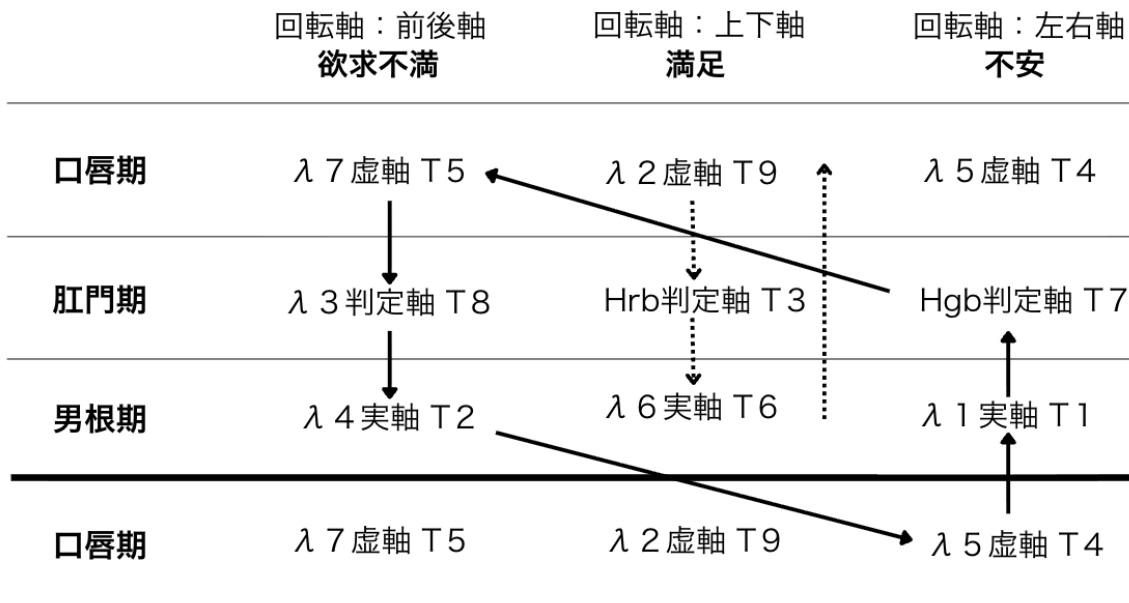


図5. 第1～2層における統合・分裂方向

反復配置された第1～2層の表において、六点環は中央列（満足系列・判定軸列）を經由せず、外周に置かれた六点のみを辿ることで得られる。具体的には、男根期不安列のT1を起点とし、同じ不安列を上方へ辿って肛門期不安列のT7に至る。次に、T7から対角方向に、反対側の欲求不満列上段にあるT5へ移る。ここで現れる対角方向の移動（T7→T5、および後に現れるT2→T4）は、同じ列の中を上下に辿る「列内移動」やタイプ1～9の一次巡回において現れる系列間移動とは性質が異なる。一次巡回では「前後→上下→左右→前後」という順序で隣接する系列へ一歩ずつ移動するのに対し、統合・分裂方向の対角移動は満足列（上下回転軸列）を飛び越えて欲求不満列と不安列を直接つなぐ非局所的な跳躍である。この『中央列を飛び越える』という性格こそが、六点環を一次巡回とは異なる第二の循環秩序として際立たせる構造的要点である。

欲求不満列上段のT5に至った後は、同じ欲求不満列を下方へ辿り、肛門期欲求不満列のT8を経て、男根期欲求不満列のT2に至る。次にT2から、再び対角方向に口唇期不安列のT4へ移る。最後に、T4から不安列を上方へ辿って起点のT1へ戻る。以上により、

T1 → T7 → T5 → T8 → T2 → T4 → T1

という六点循環が確定する。

この六点循環の特徴は、(i) 列内移動（同一系列内の連続）と、(ii) 対角移動（系列切替）という二種類の移動を含み、後者が循環の中に二回組み込まれることで閉路として成立している点にある。六点環は同一系列内の単純な巡回ではなく、系列間の切替を含むことで「状態が別の位相へ移る」ことを表す循環となっている。

以上より、第1～2層においては、第0層に潜在していた二重循環が機能的に顕在化する。三点環 T3→T6→T9→T3は「変換を受け止める判定枠組みの巡回」として、六点環 T1→T7→T5→T8→T2→T4→T1は「変換の道筋」として、それぞれ機能的役割を持つ循環として前景に立ち上がる。この二重循環が、エニアグラムにおける統合・分裂方向の機能的基盤である。

また図4、図5を確認すると、第0層では六点環の前後回転軸と左右回転軸、第1～2層では欲求不満列と不安列で矢印の向きが逆になっている。つまり、前後回転軸・欲求不満系列では「左右→前後→上下（→左右）」「口唇期→肛門期→男根期」と三項循環・発達段階の向きで進行するのに対し、左右回転軸・不安系列では「上下→前後→左右」「口唇期→男根期→肛門期」と逆向きの順序を取る。この関係は一見すると不整合に見えるが、A₂ルート系の構造を参照すると理解できる可能性がある。4-3で示したように、A₂の六方向は $\pm\alpha_1 \cdot \pm\alpha_2 \cdot \pm(\alpha_1 + \alpha_2)$ という正負のペアとして組織されており、六点環の一周において正のルート群と負のルート群がそれぞれ異なる列の通過方向を担う。これは外部から付加された非対称性ではなく、A₂ルート系の構造的対称性が閉路として現れた結果として理解される。すなわち、欲求不満系列は正のルート方向、不安系列は負のルート方向に対応する形で同一閉路が読まれていると解釈できる。

次節では、三点環と六点環の二重循環が第0層と第1～2層の間でどのように異なる見え方をするかを、境界越境タイプの位置の違いとして整理する。

4-6. 境界越境タイプと蝶番点の構造的意味

前節までに、第0層基本配置からA₂ルート系の対応を確認し、上下軸前景化を経て判定軸列（T3・T6・T9）と遷移側六点環（T1・T7・T5・T8・T2・T4）という二重循環が第0層に潜在的に成立すること（図4）、そしてこの潜在的循環が第1～2層において発達三段階と情動三状態の導入によって機能的に顕在化することを示した（図5）。本節では、この同一の二重循環が第0層と第1～2層においてどのように異なる「見え方」をするかを、境界越境タイプの位置の違いとして整理し、さらに両層で判定軸に残るタイプ3が循環構造全体においてどのような蝶番点として働くかを明確にする。

本研究でいう境界越境とは、臨床的な比喩に先立って、配置構造の上で循環が列内移動や同一系列内の連続だけでは閉じず、系列切替を含む接続として強く可視化される地点を指す。SU(3)的に言えば、これは一つの安定領域（chamber）内部で完結する運動ではなく、境界（wall）に触れる、あるいは境界の近傍で複数の成分が混ざることによって、通常安定配置に回収されにくい特異点として現れる現象である。重要なのは、境界越境が「例外」ではなく、むしろ循環が閉路として成立するために必要な切替点が、どこで表面化するかという構造問題だという点である。

この切替点「何の境界をまたぐか」は層によって異なる。第0層ではRGB面の三項循環（RG→RB→GB→RG）の境界をまたぐ箇所として現れるのに対し、第1～2層ではII-1で述べた自己他者結合構造によって導入される縦軸循環、すなわち自己と他者の境界をまたぐ箇所として現れる。本節ではこの層差を境界越境タイプの位置の違いとして整理し、さらに両層で判定軸に残るタイプ3が循環構造全体においてどのような蝶番点として働くかを明確にする。

この観点から見ると、まず第0層では、境界越境として目立つのがタイプ5・6・7である（図4）。第0層は、前後・上下・左右という身体軸を参照面に埋め込んだ座標相（embedding）であり、まだ情動三状態や機能選択が前景化していない。4-3で示したように、この段階での二分はあくまで第0層基本配置（T3・T7・T8が判定軸、T1・T2・T4・T5・T6・T9が非対角）であり、上下軸前景化による判定軸列（T3・T6・T9）の確定は潜在的なものにとどまる。そのため循環の切替点はRGB三項循環の境界として分散して現れ、特定の一点に凝縮するのではなく、複数点に境界干渉として現れやすい。臨床的にも、この分散性は興味深い一致を示す。すなわち、タイプ5・6・7はそれぞれ自分が属する情動系列の内部に位置しながら、当該系列の標準的な対人様式をそのまま引き受けない傾向を示す。

具体的には、欲求不満系列（2・5・8）の中でタイプ5だけは、現実世界の他者をコントロールして状況を押し返すよりも、むしろ対象を距離化し、観察・理解へ折り返す方向に向かいやすい。満足系列（3・6・9）の中でもタイプ6だけは、安定側に見えながら自己肯定感が低く、安定をそのまま所有できずに「確証」を求め続けるような緊張を含みやすい。不安系列（1・4・7）の中でタイプ7は、不安を他者への依存で処理するより、拡散・展開・逸脱によって処理しやすく、対人依存が相対的に弱く見える場合がある。三者に共通するのは、所属する系列の平均像をそのまま体現せず、系列内の規約から少し外れた処理様式を示すという点である。これを配置構造の言葉で言い換えれば、5・6・7は第0層においてchamber内部点ではなく、隣接する位相成分が混ざりやすい境界近傍として働き、そのため群内の例外的メンバーとして現れやすいということである。

これに対して第1～2層では、境界越境がタイプ4に凝縮して見える（図5）。第1～2層は、発達段階（縦軸）と情動三状態（横軸）の導入によって、どの系列がどの役割を担うかが実効的に確定する機能相（selection）である。この段階では、循環の切替点は自己と他者の境界をまたぐ箇所、すなわちII-1の自己他者結合構造によって男根期から口唇期へと縦軸が折り返す地点として一点に絞られる。多くの点は判定軸側（三点環）と遷移側（六点環）として整理され、配置は安定化する。その結果、第0層で分散していた境界干渉の多くは安定配置へ回収される。しかし、それでもなお回収されにくい残余が一点に凝縮するとき、境界越境は単独の特異点として表面化する。本研究の対応では、その凝縮点がタイプ4として現れている。臨床的にも、タイプ4は九タイプの中で存在様式・認知様式が際立って特殊であり、常識や社会的自尊心よりも、個性・衝動・存在確信、さらには生と死、性への感受性といった「存在の質感」に強く駆動されやすい。この特異性は、性格特徴の羅列として捉えるよりも、むしろ「共有された座標軸（共通基底）への回収に抵抗する点」として理解すると、本研究の配置論と接続しやすい。すなわち第1～2層におけるタイプ4の飛び出しは、単に感受性が強いというより、基準そのものをずらしてしまう要求点（基底変更要求点）として機能している可能性を示唆する。

このように、第0層では境界越境が5・6・7に分散し、第1～2層では4に凝縮する。両層は同じSU(3)的二重構造（判定軸側／遷移側）を共有しつつ、座標相ではRGB三項循環の境界干渉が複数点に分散しやすく、機能相では自己他者の境界として安定化・回収が進むため、残余が一点に凝縮して表面化しやすいという層差がある。この層差が、境界越境タイプの位置の違いとして読み取られるのである。

最後に、境界越境の議論と並んで重要なのが、タイプ3が第0層基本配置・上下軸前景化・第1～2層という三つの段階すべてで判定軸側に残るという事実である。4-4で確認したように、T3 (Hrb) は第0層基本配置においてRB面（上下垂直軸）の対角生成子として判定軸であり、かつ上下回転軸列の一員として上下軸前景化の判定軸列にも属する。そして第1～2層では三点環（3・6・9）が判定軸列として前景化し、タイプ3はその中心に位置する。この三段階を貫く一貫性は、タイプ3が構造上、第0層基本配置から上下軸前景化を経て機能相へと移行する全過程において、判定枠組みの連続性を与える蝶番（hinge）として機能していることを示す。

ここで注目すべきは、T3 (Hrb) が上下軸という観点から見ても構造的に特異な位置を占めているという点である。本研究では一貫して上下軸の特異性を論じてきたが、T3はこの上下軸との関係において四重の一致を示す。第0層においては、RB面の垂直軸（上下垂直軸）に属する判定軸であると同時に、上下回転軸列の一員でもある。さらに第1～2層においては、肛門期（上下対応）という縦軸上の位置と、満足（上下回転軸）という横軸上の位置の交点に置かれる。すなわちT3は、本研究で論じてきた二種類の「上下」——RB面上下垂直軸と上下回転軸——が、第0層・第1～2層の双方において重なる唯一の構造単位である。この四重の上下性こそが、T3を蝶番点たらしめる構造的根拠として理解することができ、タイプ3の蝶番性が偶然ではなく上下軸という一貫した構造的な特性から必然的に生じることを示している。

臨床的にも、タイプ3が社会的評価への同一化、比較による自己規定といった意味で最も判定軸的な特性を示しやすい点は、この構造的解釈と整合する。ただし、この社会的含意は、配置原理の導出から一歩進んだ議論になるため、ここでは蝶番点としての構造的意味に留め、詳細は考察（VII章）で扱う。

以上より、境界越境タイプの層差は、同じ二重循環が層によって異なる見え方を取ることを示す具体的指標である。第0層では5・6・7にRGB三項循環の境界干渉が分散し、各系列内で標準像からのズレとして現れる。第1～2層では自己他者の境界として安定化が進み、回収されにくい残余が4に凝縮して、存在様式の特異点として表面化する。そしてタイプ3が第0層基本配置・上下軸前景化・第1～2層の三段階を通じて判定軸側に残ることは、二層を同一の循環構造として接続する蝶番点が存在し、統合・分裂方向の向きづけと安定性が与えられることを意味する。

5. 統合方向／分裂方向の向きづけ

前節までに、統合・分裂方向の骨格が、判定軸側の三点環（T3・T6・T9）と遷移側の六点環（T1・T7・T5・T8・T2・T4）という二重循環として、第0層基本配置におけるA₂ルート系の潜在的閉路から出発し、上下軸前景化を経て、第1～2層において機能的に顕在化するという三段階の構造として整合的に再構成できることを示した。ここで補足すべき点は、これらの循環がいずれも閉路である以上、構造的には同じ閉路を逆向きに辿ることも可能であり、SU(3)の数学構造それ自体が「どちらが成長（統合）で、どちらが退行（分裂）か」という向きを一意に固定するわけではない、ということである。

しかし、エニアグラムの実践では、同じ閉路に対して「統合（成長）方向」と「分裂（退行）方向」という向きづけが与えられている。本研究の立場では、この向きづけは数学構造の内部だけで完

結するものではなく、身体化された軸の優先順序と、発達論にもとづく臨床的定義によって決定される。すなわち、抽象的SU(3)構造は「循環可能性」を与え、身体・発達・情動の導入が「向き」を与えるという役割分担がある。

本研究では、向きづけの第一の基盤として、前後(RG)・上下(RB)・左右(GB)が前後→上下→左右→前後の順に作用するという身体化された軸順序を採用した。この順序は、九タイプの一次巡回(1~9の順番)を定めるだけでなく、統合・分裂方向の読みの際にも、どの系列が次の系列へ基準を引き渡すか、どの切替が「前進的(生成的)」に読まれるかという方向性の基準を与える。第二の基盤として、本研究は、九タイプが発達三段階と情動三状態の相互作用から形成されるという春井(2023)の仮説にもとづき、統合方向を「判定の基準が成立した上で、遷移と再配置が可能になっていく向き」、分裂方向を「判定の基準が硬直し、遷移と再配置が閉ざされて偏りが固定される向き」として読む立場をとる。ここで言う統合/分裂は、特定のタイプや系列が優れているという意味ではなく、判定(三点環)と遷移(六点環)がそれぞれの役割を果たしながら協働できるか、あるいはその協働が崩れるかという運用の仕方を指す構造概念である。

ここで、六点環の向きづけについて一段だけ補足する。4-3で示したように、第0層基本配置の非対角六点はA₂ルート系の三つの複素対({T1,T9}・{T2,T4}・{T5,T6})に対応し、六方向の閉路が構造的に導かれる。しかしA₂ルート系それ自体は「どちらの向きに周回するか」という優先順位を与えない。正負の符号や「正のルート」の選択は、どのWeyl chamberを基本領域として採用するか(どの基底を「正面」とするか)に依存し、SU(3)の内部だけでは固定されない。したがって本研究では、六点環の向きを符号規約から導くのではなく、前後→上下→左右という身体化された軸順序が、どの基底(どのchamber)を「正」として採るかを固定し、その結果として六角形周回の向きが定まるという順序で理解する。言い換えれば、向きは数学だけでなく、身体化された選択によって初めて意味を持つ。

さらに言えば、本研究が採用する身体化された軸順序、すなわち前後(RG)→上下(RB)→左右(GB)→前後という系列更新は、SU(3)の内部対称性が身体空間へ埋め込まれた結果として得られる参照順序である。SU(3)におけるA₂ルート系は、このRGB三系列に関わる遷移(非対角作用)の全体を六方向の変換可能性として幾何学化したものである。したがって抽象的には時計回り/反時計回りの二つの周回が同値に存在するが、身体化によりRG→RB→GBという参照順序が固定されると、A₂六角形上でもそれと整合する周回の向きが事実上選択される。言い換えれば、A₂ルートが自動的に一方向へ決まるといふより、RGBの参照順序が固定されることにより、同値な向きの中から発達段階および身体拘束(重力・質量差など)と整合する向きが採択されるという関係にある。

また、エニアグラムの臨床的理解においては、判定軸側(三点環)・遷移側(六点環)いずれのタイプも、それぞれの仕方で見世界を見る枠組みとして機能する。本研究が「判定軸側」と呼ぶとき、それはあるタイプが他のタイプより優れた基準を持つという意味ではなく、SU(3)の配置構造において比較・識別・安定化の基準を与える構造的な位置を占めるという意味である。

以上を踏まえ、本研究における用語上の約束を次のように定める。六点環における統合(成長)方向とは、前後回転軸・欲求不満系列がRGB三項循環(RG→RB→GB)の向きで進行する方向、すなわちA₂ルート系の正のルート群に対応する向きとして定義される。前後→上下→左右という身体化さ

れた軸順序がこの向きを固定し、その結果として六角形周回の向きが定まる。なお、左右回転軸・不安系列が逆向きに通過されるのは、4-5で示した A_2 ルート系の正負対称性の構造的帰結であり、統合方向の定義と矛盾しない。三点環についても同様に、身体化された軸順序と発達三段階の進行方向に沿った向きを統合方向と定める。その逆向きを「分裂（退行）」とする。このとき重要なのは、閉路が両方向に辿れるという事実を否定することではなく、両方向が可能であることを前提にした上で、 A_2 の正のルート群・身体化された軸順序・発達段階の進行方向という三つの基準が一致する向きを、統合方向として選び出すという点である。

この節の役割は、向きづけを数学だけで決めようとすることでも、逆に臨床的経験則だけに還元することでもない。むしろ、第0層基本配置から上下軸前景化を経て第1～2層へと至る三段階の構造が与える「循環可能性」と、身体化・発達・情動が与える「方向付け」が接続される点に、統合・分裂方向の理論的根拠を置くことである。

以上の議論をまとめれば、エニアグラムの三つの秩序（順序・隣接性・統合分裂）は、互いに別個の経験則ではなく、 $SU(3)$ を身体化した配置構造がもつ (i) 前後・上下・左右という三系列（RG・RB・GB）が順に基準を引き渡すRGB参照面の循環、(ii) 参照面の循環と列方向の回転軸分割が交差して生じる最短の近接関係、(iii) 第0層基本配置における A_2 ルート系の潜在的閉路が上下軸前景化を経て第1～2層で機能的に顕在化する判定／遷移の二重構造、という三つの性質の反映として統一的に理解できる。本章で得られた結果は、次章の考察において、既存理論（リソ, D.R.など）との比較、ならびに臨床的含意を検討するための基盤となる。

VII. 考察

1. 本研究の到達点の再確認

本研究では、エニアグラムの九タイプ構造を、象徴的な図像や経験的な分類体系としてではなく、 $SU(3)$ 構造の対称性とその破れに基づく配置原理として再定式化することを試みてきた。とりわけ本研究が目指したのは、エニアグラムにおいて広く知られている九点配置、三センター、ウィング、統合・分裂方向といった基本構造が、どのような理論的骨格のもとで理解されうるかを明らかにすることであった。序論で示したように、本研究の目的は臨床的有効性の実証そのものではなく、エニアグラムの背後にある構造対応モデルを提示することに置かれている。

そのため本研究では、まず第0層において、 $SU(3)$ の生成子配置と判定軸の関係から、九タイプに対応する基本辞書を与えた。ここで重要であったのは、各タイプを最初から心理的性格特徴として定義するのではなく、九つの構造位置として捉えることである。この操作によって、第0層の内部には、エニアグラムという三センターに対応する三群構造が自然に現れ、さらに九点を一周する一次巡回の秩序もまた、配置の内部から導かれることが示された。すなわち、本研究において九分割や三分割は、外から付与された象徴的約束ではなく、 $SU(3)$ の内部構造が持つ配置可能性から生じる秩序として位置づけられたのである。

続いて本研究は、この純粹構造だけではなく抽象的な配置原理にとどまることを確認したうえで、それが身体化された現実の水準においてどのように機能する布置として表現されるかを論じた。ここで重要となるのは、第0層が配置の基盤を与える座標相であるのに対し、第1～2層では、その配置の中でどの軸が実際に機能するかが明示化される点である。こうしてエニアグラムの九タイプは、単なる静的配置ではなく、発達三段階と情動三状態のもとで作動する身体化された意識構造として読み直されることになった。

さらに本研究では、この第0層と第1～2層の対応関係を通して、三センター、順序、ウィング、統合・分裂方向といった、通常は別個の概念として扱われがちな諸要素を、ひとつの構造的連関の中で読み解くことを試みた。ウィング（隣接性）については、九点配置の一次巡回において各点の直前と直後に位置する関係として導かれ、それが統合・分裂方向とは異なる、より局所的な連続性の秩序であることが整理された。他方、統合・分裂方向については、九点配置の内部に重なる第二の秩序として捉えられ、とくに六点環と三点環の区別を通して、その非局所的な連結のあり方が明示された。したがって本研究で示されたのは、エニアグラム図式の諸要素を寄せ集め的に説明することではなく、それらが同一の配置原理の異なる表現として理解できるという点である。

以上を踏まえるなら、本研究の到達点は次のように要約できる。第一に、エニアグラムの九タイプ構造が、少なくとも構造論的には、 $SU(3)$ の内部に受け止めうる骨格を持つことを示した。第二に、その骨格は、身体化された対称性の破れを通して、発達段階および情動状態を含む具体的な配置へと読み替え可能であることを示した。第三に、その結果として、九点配置、三センター、ウィング、統合・分裂方向といったエニアグラムの基本構成要素を、相互に無関係な経験則としてではなく、ひとつの幾何学的・発達の秩序の中で理解する見通しを得た。ここで重要なのは、本研究がエニアグラムの心理学的妥当性を経験的に最終証明したということではなく、その構造的起源を記述するための理論的基盤を提示したという点にある。

さらに、ここで付け加えるべき重要な観察がある。表4が示すように、前後・上下・左右という身体軸は、RGB面・三センター・数学的三分類・発達三段階・情動三状態という五つの異なる三群構造すべてにおいて、唯一の共通基盤として機能している。

表4. 身体軸とRGB面・三センター・虚軸／判定軸／実軸・発達三段階・情動三状態の対応

身体軸	前後	上下	左右
対応RGB面	RG面	RB面	GB面
三センター	本能(8・9・1)	感情(2・3・4)	思考(5・6・7)
数学的三分類	虚軸群 ($\lambda 2 \cdot \lambda 5 \cdot \lambda 7$)	判定軸群 ($\lambda 3 \cdot \text{Hrb} \cdot \text{Hgb}$)	実軸群 ($\lambda 1 \cdot \lambda 4 \cdot \lambda 6$)
発達三段階	口唇期(4・5・9)	肛門期(3・7・8)	男根期(1・2・6)
情動三状態	欲求不満(2・5・8)	満足(3・6・9)	不安(1・4・7)

これは本研究における身体化の役割が単なる比喩的補助線ではないことを示している。身体軸はSU(3)とエニアグラムを直接に接続する媒介項ではなく、抽象的な数学構造が心理的現実として読み取られるための存在論的条件として位置づけられる。この意味で、本研究における『身体化されたSU(3)』とは、数学に身体的比喩を付け加えることではなく、身体という場においてのみ数学構造が心理的意味を持ちうるという主張である。

これは本研究における身体化の役割が単なる比喩的補助線ではないことを示している。本研究の構造全体を振り返ると、SU(3)の抽象的な数学構造は、前後・上下・左右の身体軸というフィルターを通すことで初めて、三センター・発達三段階・情動三状態といった心理的・臨床的な意味を持つ構造として読み取られる。言い換えれば、身体軸はSU(3)の数学的構造とエニアグラムの心理的構造を媒介する変換層として機能しており、この変換層を経由するからこそ、五つの異なる三群構造がすべて同一の前後・上下・左右という軸に収束して現れる。身体軸はSU(3)とエニアグラムを外から橋渡しする媒介項ではなく、数学構造が心理的意味として現れるための条件そのものであると考えられる。

以下の考察では、これらの導出結果そのものを繰り返し証明するのではなく、それらがヌーソロジーの意識発達理論に対してどのような含意を持つのか、またエニアグラムをいかなる理論的位置に置き直すことになるのかを検討していく。言い換えれば、ここからの課題は「導出の追加」ではなく、導出によって得られた構造の意味・射程・限界を整理することにある。

2. ヌーソロジー的含意

—意識発達と内部対称性のホログラフィック対応—

本研究のヌーソロジー的意義は、ヌーソロジーの意識発達理論を方法論的基盤として導入することによって、SU(3)とエニアグラムのあいだに同型対応構造を見出し得た点にある。ここで重要な

は、この対応が単なる象徴的類比や外面的な図形的一致として与えられたのではなく、意識発達と素粒子構造とのあいだにホログラフィックな同型対応を想定するヌーソロロジーの立場そのものから導かれているということである。したがって本研究の成果は、エニアグラムの再解釈にとどまらず、ヌーソロロジーが提示してきた意識発達理論に対して、構造論的な裏づけを与えるものとして理解される。

ヌーソロロジーでは、意識の発達は心理学的な成熟過程であると同時に、素粒子構造に対応する対称性の発現過程でもありと考えられている。とりわけ乳幼児期の発達三段階である口唇期・肛門期・男根期は、SU(3)の内部に含まれる三つのSU(2)的構造の起源に対応するものとして理解され、思春期段階において、それらが一つの全体構造として組織化・固定化されると考えられている。本研究は、このヌーソロロジーの基本仮説を前提に据え、さらにエニアグラムおよび春井（2023）の整理を組み込むことによって、思春期段階におけるSU(3)構造の内部に、九タイプの配置秩序を読み取ることが可能であることを示した。すなわち本研究の結果は、ヌーソロロジーにおいて想定されてきた「意識発達と内部対称性のホログラフィック対応」という考え方が、少なくともSU(3)とエニアグラムの対応範囲において、具体的な構造として記述可能であることを支持している。

本研究の導出において重要な役割を果たしたのは、ヌーソロロジーが想定する自己と他者の結合構造を、配置原理の内部に導入した点である。この自己他者連結構造は、数学的にはRG・RB・GBという三つのSU(2)部分群が順に基準を引き渡すRGB三項循環と対応関係にある。すなわち、自己の $\psi_7 \sim 8$ （男根期）と他者の $\psi^*1 \sim 2$ （口唇期）の連結によって発達三段階が閉じた循環を形成するという構造は、RGB面の三項循環（RG→RB→GB→RG）が数学的閉路として成立することと、異なる記述水準において同一の構造を表している。この意味で、自己他者連結構造はヌーソロロジーという理論的文脈において三項循環に意識発達の意味を与えるものであり、RGB三項循環はその数学的基盤を与えるものとして位置づけられる。したがって、本研究における循環性の導出は、ヌーソロロジーの自己他者連結仮説とRGB三項循環という身体化された数学的構造の両面から支持されるものとして理解される。

ヌーソロロジー的に重要なのは、このような配置構造が、単なる心理的記述にとどまらず、意識の成立そのものが内部対称性の配列として理解できるという見通しを与えることである。春井（2022）が提示したように、ヌーソロロジーにおける心理学の課題の一つは、素粒子構造の側から読み取られた超越論的無意識の構造を、一貫した意識発達仮説として再構成することにあつた。本研究は、その課題に対して、発達初期の身体経験と情動経験が、思春期段階においてSU(3)的全体構造として再配置されるという具体的なモデルを与えるものとみなすことができる。つまり、本研究におけるエニアグラムの再定式化は、性格類型論の再説明であるだけでなく、ヌーソロロジーにおける意識発達理論を、配置構造として可視化する試みでもある。

この意味で本研究の結果は、II-1で述べた、意識の発達が心理学的成熟過程であると同時に素粒子構造に対応する対称性の発現過程でもある、というヌーソロロジーの基本的立場に対して、一定の構造的裏づけを与えるものといえる。少なくとも、SU(3)とエニアグラムの同型対応構造を見出し得たことは、意識発達理論と内部対称性とのあいだに想定されてきたホログラフィックな対応関係に、具体的な記述モデルを与えたと評価できる。さらに言えば、本研究は、ヌーソロロジーの「意識発達は素粒

子構造とホログラフィックに同型対応している」という考え方に対して、少なくとも構造論的水準における一定の根拠を与えたものと位置づけることができる。

3. エニアグラム再定式化の意義

—象徴的類型論から配置原理へ—

本研究の意義の一つは、エニアグラムを、象徴的な類型論や経験的な性格分類の体系としてではなく、一定の配置原理に基づいて構成された構造モデルとして再定式化した点にある。従来、エニアグラムは、その九タイプの記述の豊かさ、自己理解や対人理解への応用可能性、さらには発達や統合・分裂の動態を含む包括的な人間理解の枠組みとして高く評価されてきた。他方で、その図式全体を成り立たせている形式的原理、すなわち、なぜ九点であるのか、なぜ三センターが成立するのか、なぜ特定の順序やウィング、統合・分裂方向が現れるのか、といった問いに対しては、必ずしも一貫した理論的説明が十分に与えられてきたとは言いがたかった。

これに対して本研究は、エニアグラムの基本構成要素を、個別の経験的知見の寄せ集めとしてではなく、ひとつの配置構造の異なる現れとして理解する視点を提示した。すなわち、九タイプの順序、三センター、隣接性、統合・分裂方向は、それぞれ独立に与えられた規則ではなく、SU(3)構造をもとにした配置原理の内部から相互に関連しながら導かれるものとして再記述されたのである。このことにより、エニアグラムは、象徴的意味づけを外側から付加された図式としてではなく、内在的秩序をもった幾何学的配置として把握されることが示された。

この再定式化の重要性は、第一に、エニアグラムの理論的基盤を強化する点にある。エニアグラムは実践的には広く用いられてきた一方で、その全体構造の根拠については、しばしば象徴論、神秘思想、経験則、臨床観察が混在した形で語られてきた。そのため、タイプ論としての有用性が認められる一方で、理論的には恣意的な体系、あるいは思弁的・神秘的構成物と見なされる余地も残されていた。これに対して本研究は、エニアグラムの諸構成要素がSU(3)構造に基づく配置原理から導出可能であることを示すことにより、エニアグラムを単なる外在的な象徴体系としてではなく、人間の意識構造に内在する秩序の一表現として再解釈する可能性を開くものである。ここで提示されたのは、エニアグラムの経験的有効性をただちに証明することではなく、その記述体系がいかなる内部秩序に支えられているのかを説明し得る基盤である。

第二に、この再定式化は、エニアグラムを単なる性格記述の枠を超えて、意識構造の配置モデルとして理解する道を開く。エニアグラムをめぐっては、タイプを生得的・先天的な傾向として捉える立場がある一方で、乳幼児期の親子関係や初期経験の中で形成されるものとみる立場もある。本研究の結果は、後者の立場、すなわち各タイプが発達初期の関係構造を基盤として形成されるという見方に対して、構造論的な支持を与えるものである。というのも、本研究では、各タイプは最初から固定した心理的実体として与えられるのではなく、発達三段階と情動三状態の交差の中で定まる構造的立場として理解されるからである。したがって、エニアグラムタイプとは生まれつき完結した本質というよりも、身体化された発達構造の中で成立する配置単位として捉えられる。この視点は、タイプを固

定的本質とみなす理解を避け、エニアグラムをより発達的かつ関係的な理論として捉え直すことを可能にする。

第三に、本研究の再定式化は、エニアグラムにおける「意味」の位置づけそのものを変える。従来の理解では、タイプの意味内容——たとえば恐れ、欲求、防衛、執着、徳といった主題——が先にあり、それらが九つに整理されているように読まれることが多かった。これに対して本研究が示すのは、まず配置があり、その配置の差異として意味が立ち上がるという方向である。つまり、意味が構造を支えるのではなく、構造が意味の分化を可能にしているのである。この転換は、エニアグラムを象徴解釈の体系としてではなく、意味生成の基盤を備えた構造モデルとして理解するために重要である。

もっとも、本研究の意義は、従来のエニアグラム理解を否定することにあるのではない。むしろ、臨床的観察、自己理解の実践、象徴的伝統のいずれもが、何らかのかたちでこの構造的基盤に支えられていた可能性を示す点にこそ意義がある。言い換えれば、本研究は、経験的・実践的に蓄積されてきたエニアグラムの知見を無効化するのではなく、それらをより深い配置原理の次元に位置づけ直すことを目指すものである。その意味で本研究は、エニアグラムを「神秘的体系」から「単なる経験則」へと還元するのではなく、また逆に「数学化」によって人間理解の豊かさを失わせるのではなく、両者を媒介する理論的足場を提供するものと考えられる。

以上のように、本研究におけるエニアグラムの再定式化は、九タイプ理論をより厳密な構造モデルとして捉え直す試みである。それは、エニアグラムを単なる性格分類や象徴図式として扱うのではなく、九点配置、三センター、隣接性、統合・分裂方向を一つの配置原理のもとで理解する視点を提示するものであった。このことにより、エニアグラムは経験則の集積としてではなく、意識と人格の秩序を記述するための幾何学的・発達の枠組みとして再評価される。したがって本研究の意義は、エニアグラムを新しく“解釈”したことにあるのではなく、その背後にある構造的条件を明示し、理論的記述の基盤を与えたことにある。

4. 本モデルの認識論的位置づけ

—導出・写像・解釈・検証可能性の区別—

本研究は、エニアグラムの妥当性そのものを統計的あるいは実験的に実証することを目的としたものではない。むしろ本研究の目的は、既存のエニアグラム構造に対して、その背後にありうる配置原理を提示し、それをSU(3)構造との対応関係のもとで記述することにあった。したがって、本研究の認識論的位置づけを明確にするためには、本研究で示された内容のうち、どこまでが構造的導出であり、どこからが理論的写像であり、どこからが心理学的解釈に属するのかを区別しておく必要がある。

まず、本研究において導出されたとはいえるのは、SU(3)構造の配置原理をもとに、エニアグラムにおける九点配置、三センター、タイプ順、ウィング、統合・分裂方向といった基本構成要素のあいだに、相互に整合的な対応関係を与えた点である。ここでの導出とは、個々のタイプ記述を経験的

データから帰納したという意味ではなく、一定の理論的前提のもとで、複数の構成要素をひとつの構造秩序の内部から一貫して説明しうることを示した、という意味である。その意味で本研究は、エニアグラムの諸要素を外在的に寄せ集めたのではなく、配置原理から内在的に再構成したといえる。

次に、本研究において写像に属するのは、ヌーソロジーの意識発達理論と春井（2023）を前提として、乳幼児期の発達三段階、情動三状態、さらにはそれらの交差として現れるタイプ配置を、SU(3)構造の内部へ対応づけた部分である。これらは恣意的な付会として導入されたものではなく、ヌーソロジーが想定してきた、意識発達と内部対称性とのホログラフィック対応という仮説と、春井（2023）によるエニアグラムの発達論的整理に基づいて配置されたものである。しかし同時に、それは数学的演算のみから自動的に一義的に出てくるものではなく、理論的前提を伴う対応づけでもある。したがって本研究の核心は、純粋数学のみで完結する形式体系を提示することにあるのではなく、ヌーソロジーの意識発達理論と春井（2023）の整理を媒介として、SU(3)とエニアグラムのあいだに構造的同型性を記述することにあると理解されるべきである。

さらに、本研究において解釈に属するのは、こうして得られた配置関係を、性格形成、情動傾向、意識発達、自己他者関係といった心理学的・発達論的意味へと読み下していく部分である。たとえば、各タイプを発達初期の関係構造の反映として理解することや、自己他者結合のあり方を通してエニアグラムの循環構造を読むことは、構造的対応に支えられた解釈ではあるが、それ自体がただちに経験的事実として確認されたわけではない。したがって本研究の解釈的水準は、導出や写像の結果に基づく理論的含意の提示として位置づけられるべきであり、実証的結論と同一視されてはならない。

このように見ると、本研究は、数学的構造、理論的写像、心理学的解釈という三つの水準を区別しつつ、それらを一つの論理的流れの中で接続する試みであったといえる。すなわち本研究は、エニアグラムの有効性を経験的に最終確認する研究ではなく、エニアグラムの全体構造がどのような配置原理によって理解されうるかを明らかにする構造対応モデルなのである。この点を明確にしておくことは、本研究の到達点を過不足なく評価するために重要である。

同時に、このようなモデルであるがゆえに、本研究は今後の検証可能性を開くものでもある。ただし、その具体的な方法や研究上の課題については、本研究の内部で完結するものではなく、今後の検討に委ねられる部分が多い。したがって本研究の意義は、エニアグラムの妥当性を最終的に証明したことにあるのではなく、何をどのような理論図式のもとで今後検討すべきかを示した点にある。

以上のことから、本モデルは、経験的事実の単純な要約でもなければ、数学的形式の自己完結でもない。それは、ヌーソロジーの意識発達理論と春井（2023）の整理を媒介として、SU(3)構造とエニアグラムのあいだに記述可能な同型対応を与え、その上で心理学的・発達論的解釈への見通しを開く、中間的な理論モデルとして位置づけられる。したがって本研究の認識論的位置づけは、証明済みの完成理論というよりも、構造的整合性を備えた仮説的モデルにある。しかしその仮説性は弱さではなく、むしろ理論・解釈・実証を架橋するための開かれた強みとして理解されるべきである。

5. 既存理論との比較

—イチャーツ・リソとの整合と差異—

本研究の位置づけをより明確にするためには、エニアグラムに関する既存の代表的理論と比較し、その整合点と差異を整理しておく必要がある。とりわけ重要なのは、イチャーツ,O.に始まる変容論的・実践的体系としてのエニアグラム理解と、リソ,D.R. (1992) に代表される発達心理学的整理との比較である。本研究はこれらを単純に否定するものではなく、むしろそれらが把握していたものを、SU(3)構造との対応のもとで再記述しようとする試みである。その意味で、本節の目的は、既存理論との優劣を直ちに判定することではなく、本研究がどの水準において既存理論を継承し、どの水準において再編成しているのかを明らかにすることにある。

まずイチャーツ,O.においては、エニアグラムは、人間が幼少期の経験を通じて本来の「本質 (Essence)」から離れ、自己防衛のための「人格 (Ego)」を形成するという過程として理解されている。イチャーツ,O.はこの人格の偏りを「固定化 (Fixations)」として九種に分類し、それぞれに対応する「聖なる理念 (Holy Ideas)」への回帰を変容の方向として提示した。また、思考・感情・本能という三センターの統合もその体系の中心に置かれている。この点において、イチャーツ,O.のエニアグラム論は、単なる性格分類にとどまらず、人間の变容可能性を問う実践的な体系として位置づけられる。

これに対して本研究は、イチャーツ,O.の体系では、九タイプと三センターの関係として提示されているエニアグラムの構造的骨格を、SU(3)の幾何学的・群論的な配置原理として明示的に記述しようとする点に特徴がある。また、イチャーツ,O.が「固定化からの解放」として記述した変容の方向性は、本研究の文脈では、SU(3)の対称性の破れを経て固定化されたエニアグラム構造をメタ認知的に観察できるようになるという発達論的過程として読み直すことができる。その意味で、本研究はイチャーツ,O.が実践的・変容論的に提示したものを、構造的・発達論的な水準で再記述しようとする試みといえる。なお、イチャーツ,O.の思想については現在入手可能な一次文献が限られており、本研究ではその思想的立場を二次的な資料に基づいて参照している。

次に、リソ,D.R. (1992) との比較は、本研究にとってより直接的である。というのも、リソもまた、エニアグラムのタイプ形成を乳幼児期の親子関係と結びつけ、フロイトの発達三段階を基礎にしてタイプ群を整理しているからである。実際、口唇期をタイプ459に対応させる点では、本研究とリソのあいだに一致がみられる。しかし、肛門期と男根期の対応に関しては明確な差異がある。本研究では、春井 (2023) とSU(3)構造との対応から、肛門期をタイプ378、男根期をタイプ126に対応させているのに対し、リソ,D.R. (1992) では肛門期をタイプ126、男根期をタイプ378に対応させている。すなわち、両者の違いは、肛門期と男根期の配置が逆転している点にある。

この差異は、単なる分類上の好みの違いではなく、フロイト解釈の重点の置き方の違いに由来している可能性が高い。リソ,D.R. (1992) が肛門期にタイプ126に対応させた背景には、フロイトが肛門性格を「几帳面」「頑固」といった特徴によって定義したことがあると考えられる。たしかに、タイプ126は、規律性、秩序性、厳密さといった特徴を帯びやすく、表面的には肛門性格と親和的に見

える。そのため、リソは「肛門性格」の表現的特徴を重視することによって、タイプ126を肛門期に配置したものと考えられる。

これに対して本研究では、春井（2023）に基づき、タイプ126は「こうあるべき」という善悪基準を強く含む世界観として理解されており、その意味で男根期に形成されるものと捉えられる。ここで重視されているのは、表面的な几帳面さや頑固さではなく、善悪判断や規範意識の成立である。そしてこの規範性は、フロイトの理論においてはまさに「超自我」に対応し、超自我は男根期に成立する機能とされている。したがって、本研究とリソとの違いは、フロイト理論における「肛門性格」の表現型を重視するか、それとも「超自我」の発生段階を重視するかの違いとして理解することができる。言い換えれば、リソの整理は肛門性格の記述的特徴を優先し、本研究は男根期における規範機能の成立を優先したものと見える。

この差異は、SU(3)構造との対応という観点からみると、決定的な意味を持つ。本研究では、第0層において三センターが行方向に現れるのに対し、第1～2層においてはそれが斜め方向に現れるという配置の転換が見られる（表3）。この転換は、三センターが第0層ではまず座標的な分類系列として与えられ、第1～2層ではタイプ配置全体を貫く機能的秩序として再編成されることを示していると考えられる。とりわけ、第0層においては8-9-1、2-3-4、5-6-7という三群が行方向のまとまりとして現れるが、第1～2層では同じ三群が斜め方向に現れることにより、三センター構造がより深い対称性方向に沿って組み直されていることが可視化される。

ここで付け加えるなら、本研究においてセンター三分割8-9-1、2-3-4、5-6-7が第1～2層で斜め方向に整列すること自体、SU(3)との整合性を考えるうえで重要な意味を持つ。この斜め方向は、本研究の数学的整理においては、Cartan平面上のWeyl反射方向と整合的に読まれる方向に対応している。したがって、三センターがこの方向に一致して現れることは、単なる見かけ上の配列ではなく、SU(3)の対称性構造に対して追加的な幾何学的一貫性を示す指標とみなすことができる。これに対して、リソ,D.R.（1992）の順序を採用した場合には、この斜め整列が保持されず、センター構造はWeyl反射方向との整合性を失う。その意味で、本研究の配置は、発達段階の臨床的解釈にとどまらず、群論的対称性との対応においてもより強い構造的な一貫性を示しているといえる。したがって、エニアグラムをSU(3)構造と対応づけるという本研究の立場においては、春井（2023）に基づく本研究の対応の方が、リソ,D.R.（1992）の整理よりも高い整合性を示すと考えられる。

もっとも、このことはリソ,D.R.（1992）の整理が無効であることを意味するわけではない。むしろリソの理論は、エニアグラムを発達心理学の文脈で理解しようとした重要な先行研究であり、本研究もその問題意識を共有している。ただし、本研究が示すのは、発達段階とタイプ群の対応をさらにSU(3)構造という形式的枠組みのもとで再検討したとき、リソの配置では説明しきれない層差と整列構造が現れるという点である。したがって両者の違いは、単なる対立というよりも、何を基準に発達段階を読むか、またどの構造水準を優先して見るかの違いとして理解されるべきである。

以上のように、既存理論との比較から明らかになるのは、本研究がイチャーソ,O.の象徴的体系とリソの発達論的整理の双方を継承しつつ、それらをSU(3)構造との対応という新たな水準で再編成し

ているということである。イチャーソ,O.との比較では、象徴的に提示されていたものの背後にある配置原理を構造的に記述した点に意義があり、リソ,D.R. (1992)との比較では、発達段階論を共有しながらも、肛門期と男根期の対応をめぐる差異が、SU(3)との整合性において本研究を支持する方向へ働いていることが確認された。したがって本研究は、既存理論を単に置き換えるのではなく、その成果を組み替えながら、エニアグラムをより一貫した構造理論として再定位する試みであるといえる。

6. SU(3)構造から導かれる各タイプの特徴

本研究では、ヌーソロジー的意識発達理論をもとに、SU(3)構造によってエニアグラムを読み解くことを目的としてきた。その過程で、まず第0層に各タイプを配置することにより、各生成子の構造特性、三センターの意味や、発達段階と虚軸・実軸・判定軸との対応関係をSU(3)側から導くことができた。さらに、RGB面の三項的循環とヌーソロジーにおける自己他者連結構造をモデル内部に導入することにより、第0層および第1～2層の配置の中に、三センターの斜め構造、さらに統合・分裂方向に対応する循環構造を見出すことが可能になった。重要なのは、こうして得られた構造が、エニアグラムの基本構成を説明するだけでなく、各タイプの特徴がなぜそのようなかたちで現れるのかを理解する手がかりにもなっている点である。このことは、各タイプの特徴が単なる経験的記述の集積ではなく、自己他者関係を含む、より深い構造秩序の表現である可能性を示している。

本節ではこの点について、SU(3)構造の水準と臨床観察の水準（春井, 2023）の両側面から考察を試みる。

まず、第0層への各タイプの配置（表2）の結果、各タイプは対応する各生成子・判定軸の構造から、その特徴が形作られている可能性がある。これについては付録Cで詳しく述べる。

次に、第0層において明瞭に現れるのはエニアグラムにおける三センターの構造である。すなわち、本能タイプ8・9・1はRG面および $\lambda_1\sim 3$ に対応し、前後方向の系列として配置される。感情タイプ2・3・4はRB面および $\lambda_4\sim 5$ に対応し、上下方向の系列として配置される。思考タイプ5・6・7はGB面および $\lambda_6\sim 7$ に対応し、左右方向の系列として配置される。ここで重要なのは、この三センターが、既存のエニアグラム理論において経験的に知られていた分類であるだけでなく、本研究のSU(3)配置を確定した結果として、第0層の行方向に自然に現れてくるという点である。すなわち、本能・感情・思考という区分は、後から心理学的に付与された解釈ではなく、RGB面と身体軸の差異に対応する構造的分類として読み直されることになる。

この対応には、各センターの意味内容とも一定の整合性が認められる。本能センターが前後方向と結びつくことは、接近と離隔、生存維持、身体的即応といった、本能的方向づけの基本性格と対応している。感情センターが上下方向と結びつくことは、価値づけ、評価、優劣、高低といった序列的感覚と結びつけて理解することができる。さらに、思考センターが左右方向と結びつくことは、比較、分岐、選択、位置取りといった差異化の働きと対応づけうる。したがって、本能・感情・思考という

三センターの差異そのものも、単なる経験的分類ではなく、SU(3)の三面構造と身体軸の差異に支えられた構造的区分として理解することができる。

また、同様に第0層の内部には、この三センターとは別に二つの三分類原理が存在している。一つは、判定軸・虚軸・実軸という三群である。各生成子・判定軸の構造的性質に着目すると、第0層の九つの構造単位はこの三群に分類される。判定軸群には $\lambda_3 \cdot \text{Hrb} \cdot \text{Hgb}$ が属し、差異を立て、基準を与え、方向を定める中心的機能を担う。虚軸群には $\lambda_5 \cdot \lambda_7 \cdot \lambda_2$ が属し、位相的保持、内面化、内部差異の形成に関わる。実軸群には $\lambda_1 \cdot \lambda_4 \cdot \lambda_6$ が属し、比較、実効的混合、外向きの安定化に関わる。ここで重要なのは、この三分類が、エニアグラムのタイプ群を先に想定して導入されたものではなく、あくまでSU(3)側の構造的性質から現れたものであるという点である。

そのうえで、この数学的三分類にタイプ対応を重ねると、虚軸群には4・5・9、判定軸群には3・7・8、実軸群には1・2・6が対応することになる。そしてこれは、春井（2023）における発達三段階の群分け、すなわち口唇期 = 4・5・9、肛門期 = 3・7・8、男根期 = 1・2・6と結果的に同型をなす。位相的保持と内面化に関わる虚軸群が第1～2層では口唇期に、判断・基準化・差異の立ち上げに関わる判定軸群が第1～2層では肛門期に、比較・実効的安定化・実混合に関わる実軸群が第1～2層では男根期に、それぞれ対応するのである。この一致は、発達段階を外から数学へ押しつけた結果ではなく、構造対応の結果として現れた同型性として理解されるべきである。

三つ目は、RGB参照面自体の回転軸の前後・上下・左右の三分類構造である。前後回転軸 = 2・5・8、上下回転軸 = 3・6・9、左右回転軸 = 1・4・7となるが、これは春井（2023）の情動三状態と結果的に同型をなす。第1～2層ではこの回転3軸が情動三状態（欲求不満・満足・不安）として意味づけられる。前後回転軸（欲求不満）は、対象への接近と離隔の反復から生じるずれや不足に関わり、上下回転軸（満足）は位置づけと安定化に関わり、左右回転軸（不安）は、比較や分岐の中で位置が定まりきらない状態に関わる。

したがって、本研究において各タイプの特性を考えると、タイプは単に三センターの中の一員として存在するだけでなく、同時に虚軸・判定軸・実軸（第1～2層の発達三段階）、そして、三つの回転軸（第1～2層の情動三状態）という三つの構造群に属していることになる。つまり、エニアグラムタイプにおいては基本的に、この3×3群構造が各タイプの性格的な厚みを生み出す基盤になっていると考えられる。

以上に加えて、SU(3)の三項循環とヌーソロジーにおける自己他者連結構造を導入し、第0層および第1～2層に統合・分裂の循環構造を与えると、それぞれ境界を越境するタイプが構造的、必然的に生じることが明らかになった。重要なのは、そこで現れた境界越境タイプの位置が、春井（2023）における各タイプの臨床的特性ときわめて高い整合性を示していたことである。すなわち、本研究で見出された越境性は、単なる図式上の例外処理ではなく、各タイプの性格的特徴を支える構造的条件として理解しうるものとなっている。

まず、第0層において境界越境タイプとして現れたのは、タイプ5・6・7である。これらはそれぞれ、欲求不満系・満足系・不安系の内部に属しながらも、その情動系列の中で他の二タイプとは異なる特化した性質を示す。欲求不満系に属するタイプ2・5・8は、外界を何らかのかたちでコントロールすることが生存戦略に組み込まれているが、タイプ5は、口唇期タイプとして抽象世界が外界に投影されるため、知識の取り込みや知的把握に関心が向かいやすく、タイプ2や8のように現実の他者や状況そのものを直接コントロールしようとする傾向は比較的弱い。したがってタイプ5は、同じ欲求不満系に属しながら、そのコントロール欲求が外界の直接操作ではなく、知的・抽象的把握へとずれて現れる点で、境界越境的な位置を占めているといえる。

同様に、満足系に属するタイプ3・6・9は、基本的には外界と一体化した安定した自己イメージを持ちやすく、自己肯定感を保ちやすい系列として理解される。しかしタイプ6は、タイプ3や9に比べて自己肯定感が低く、周囲の顔色をうかがい、自ら決定することに困難を抱えやすい。すなわち、満足系に属しながらも、安定した自己像を十分には享受できず、その系列の内部で例外的な揺らぎを担っている。この点でタイプ6は、満足系の内部に置かれつつ、同時にそこからはみ出すような越境性を示している。

さらに、不安系に属するタイプ1・4・7は、孤独感をベースにしており、他者との絆や関係性のあり方に自我の安定が左右されやすい系列である。そのため一般に依存的傾向を含みやすいが、タイプ7だけは、タイプ1や4に比べて他者への依存がきわめて少ない。むしろタイプ7は、不安系に属しながらも、関係への依存を軽やかに回避し、独自の運動性によって系列内で特異な位置を占める。したがってタイプ7もまた、不安系の中で境界越境的な役割を担っていると考えられる。

このように、第0層における境界越境タイプ5・6・7は、各情動系列の内部にありながら、その系列にもっともよく適合するタイプというより、むしろその系列の中で特異なずれや突出を担うタイプとして現れている。そして興味深いのは、第1～2層において、この境界越境性がタイプ4へと凝縮して現れる点である。春井（2023）においても、タイプ4は、エニアグラム九タイプの中でもっとも異質性・独自性の高いタイプとして理解されている。ほかの八タイプが、ある程度、常識的感覚や社会的な見え、自尊心の維持といった基準のもとで行動するのに対し、タイプ4はむしろそうした価値そのものを疑い、そこから逃れようとする傾向を持つ。資本主義的価値観や利益関係、偽善を嫌い、他者との本当の絆、個性、存在確信を求め、生と死の本質的問題に強い関心を示し、繊細な感性をもつ。このような臨床的特性が、第1～2層における構造的な境界越境性として現れてくることは、きわめて興味深い。

VI-4-6でも述べたように、第0層では境界越境が5・6・7の三点に分散して現れるのに対し、第1～2層ではそれがタイプ4に凝縮して現れる。両層は同じSU(3)的二重構造を共有しつつも、座標相では境界干渉が複数点に分散しやすく、機能相では安定化と回収が進むため、残余が一点に凝縮して表面化しやすい。この層差が、境界越境タイプの位置の違いとして読み取られるのである。したがって、タイプ4の異質性は単なる性格的特異さではなく、第0層に分散していた境界越境性が第1～2層で集中的に顕在化した結果として理解することができる。

また、第0層と第1～2層の変換を見たとき、特に重要なのが、タイプ3が判定軸に共通して現れる点である。春井（2023）では、タイプ3は、社会的基準や社会的評価軸、常識などにおける優劣を生存維持戦略として取り込むタイプであるとされる。この特徴は、SU(3)モデルにおける判定軸の意味と非常に近い。すなわちタイプ3は、単に一つの性格タイプとして存在するのではなく、判定軸そのものを体現するようなタイプであり、第0層と第1～2層の配置変換において共通に現れることで、構造全体の蝶番点として機能していると考えられる。ここでいう蝶番性とは、二つの層をつなぐ媒介というだけでなく、判定と配置、社会的基準と自己保持とを結びつける機能的中心という意味を持つ。

このことは、タイプ3の臨床的特徴を考えるうえでも示唆的である。タイプ3が社会的比較や評価、常識的成功基準に敏感であり、それを通して自己を維持しようとするのは、単なる達成志向の問題ではなく、構造上、判定軸をそのまま担う位置にあるからだと理解できる。したがってタイプ3は、九タイプの中で単に「よく適応するタイプ」なのではなく、自己の生存維持を、社会的な判定や優劣の体系そのものと直結させてしまうタイプである。その意味で、タイプ3の蝶番性は、現代社会における価値評価システムと自己形成の接点を象徴的に示しているともいえる。

以上の考察から明らかなのは、これまで各タイプの特性が、ある傾向の寄せ集めとして理解されることが多かったのに対し、本研究では、それらを生み出す基盤となる構造が、素粒子の構造と重なるかたちで存在している可能性が示されたという点である。各タイプの特性は、現実レベルでは発達三段階と情動三状態の相互作用から生み出されると考えられるが、それ以前に、各生成子の構造的性質、RGB面の三段階構造、回転軸、虚軸・実軸・判定軸の特性、第0層から第1～2層への転換、境界越境性、蝶番性などによって、すでに深い構造水準から方向づけられていると考える必要がある。すなわち、タイプ特性は単なる経験的記述ではなく、構造によってあらかじめ一定の制約を受けた表現形なのである。

このように、臨床観察から得られた各タイプの特性が、ニューロロジー的意識発達理論をもとにしたSU(3)によるエニアグラム解釈から導かれるという事実は、きわめて示唆的である。それは、ニューロロジー的意識発達理論、春井（2023）によるタイプ理解、そしてエニアグラムそのものが、それぞれ独立した偶然的体系ではなく、より深い同一の構造秩序を異なる相で表したものである可能性を高めるからである。したがって、本研究において各タイプの特性をSU(3)構造の側から読み直す試みは、エニアグラムを単なる経験的類型論としてではなく、構造的に根拠づけられた人間理解のモデルとして再定位するための重要な一歩であると位置づけることができる。

7. 限界と今後の課題

以上のように、本研究は、ニューロロジー的意識発達理論を媒介として、SU(3)構造とエニアグラムのあいだに同型対応を与え、九タイプ配置、三センター、ウィング、統合・分裂方向、各タイプの特性、さらには境界越境タイプや蝶番点の意味までを、一つの配置原理のもとで理解しうる可能性を示した。しかし同時に、本研究はなおいくつかの明確な限界を持っており、そのことを踏まえて今後の課題を整理しておく必要がある。

第一に、本研究で提示した対応関係は、構造的整合性の高いモデルではあるが、そのすべてが数学的に一義的に定まることを証明したわけではない。とりわけ、発達三段階・情動三状態とタイプ群との対応、統合・分裂の方向性の解釈、境界越境タイプの位置づけなどは、SU(3)構造の内部から導かれる配置可能性と、ヌーソロジーおよび春井（2023）に基づく理論的写像とを組み合わせることによって得られたものである。したがって本研究の成果は、厳密な数学的証明の完成というよりも、強い構造的整合性を備えた仮説的モデルの提示として理解されるべきである。

第二に、本研究で扱ったのは、エニアグラムの全領域ではなく、そのうちでも九タイプ配置、三センター、ウィング、発達三段階、情動三状態、各タイプの特性といった主要構造に関わる部分であった。したがって、本能のサブタイプ、トライタイプ、あるいは文化差・時代差のような諸問題については、なお十分に論じられていない。今後は、本研究で得られた構造原理が、そうした周辺領域に対してもどの程度まで拡張可能であるのかを検討する必要がある。

第三に、本研究の理論的核心である、ヌーソロジーの意識発達理論と春井（2023）による臨床的タイプ理解との接続についても、なお精緻化の余地がある。たとえば、SU(3)の生成子配置、RGB面、回転軸、判定軸などの数学的整理と、各タイプの具体的特性との対応関係については、さらに定義と記述を明確化し、どの水準までを構造から導かれるものと見なし、どの水準からを解釈的展開とするのかを、より厳密に区別していく必要がある。この点は、本研究が提起した構造モデルを、今後より安定した理論体系へと発展させるための課題である。

同時に、このようなモデルであるがゆえに、本研究は今後の検証可能性を開くものでもある。ただし、その検証は、通常の質問紙法のみで直ちに遂行できるものではない。春井（2023）に基づくタイプ判定は、自己申告内容だけでなく、顔貌、話し方、全体の雰囲気などを含む複合的所見と、それらの整合性を読み取る判定眼を必要とするため、現時点ではなお職人的性格の強い方法に属している。したがって今後の研究課題は、まずこの判定過程そのものを、記述可能で共有可能な手続きへと整理することにあると考えられる。

その第一段階として重要なのは、判定技法の明示化である。すなわち、春井（2023）におけるタイプ判定が、顔貌、声、語り方、自己申告内容、全体印象などのどのような観点から行われているのかを、できる限り言語化し、記録し、整理する必要がある。これは単なる技法のマニュアル化ではなく、熟練した判定眼の内部に含まれている判断基準を外化する作業であり、質的研究であると同時に専門技能の記述研究でもある。

第二段階として考えられるのは、複数判定者による一致度研究である。同一人物に対して複数の熟練判定者が独立にタイプ判定を行い、その一致と不一致を比較することで、どの特徴が一致を生み、どの特徴が判定のずれをもたらすのかを整理することができる。これは、職人的な判定法を単なる個人的直観の領域にとどめず、研究可能な形式へと移し替えるうえで重要な手続きとなる。

第三段階としては、複合データ化とAI補助の可能性が考えられる。映像、音声、語りの内容、自己申告テキストなど複数の情報を組み合わせて、熟練判定者の判断パターンをモデル化することができ

れば、将来的にはAIによる補助判定の可能性も開かれるだろう。ここで重要なのは、AIを単なる自動分類装置として導入することではなく、職人的直観のブラックボックスを構造化し、どの特徴が判定に寄与しているのかを可視化するための補助装置として位置づけることである。

そして、より長期的な課題としては、縦断的発達研究が挙げられる。理論的には、乳幼児期の親子関係や初期経験と、後年に現れるタイプ配置との関係を追跡することができれば、本モデルに対する強い検証的資料が得られる可能性がある。しかし現実には、そのような研究は十年以上にわたる長期縦断研究となり、実施上の困難が大きい。また、性格形成には遺伝的要因や、エニアグラム以外の親子関係・生活史的条件も大きく関与するため、それらを切り分けるには、単純な量的研究ではなく、慎重な事例分析と熟練した判定が不可欠となる。したがって、本モデルの検証は、短期的には大規模量的研究よりも、判定基準の明示化、熟練判定者による事例蓄積、一致度研究、さらにAI補助の可能性を含む複合的研究デザインとして進められるのが現実的である。

さらに理論的展望としては、本研究がSU(3)を中心に構築した構造モデルを、より広い群論的枠組みへ拡張する可能性も残されている。たとえば、SU(2)、SU(4)、SU(3)³などとの関係を検討することによって、本研究で示したエニアグラム構造が、より高次の対称性の中でどのような位置を占めるのかを問い直すことができるだろう。

以上のことから、本研究は、エニアグラムをSU(3)構造のもとで再定式化するための基礎モデルを提示したものであり、その意義は、完成された最終理論を与えたことにあるのではなく、構造・解釈・臨床観察・実証可能性を接続するための枠組みを与えたことにある。したがって、本研究の限界はそのまま今後の課題でもあり、本研究は、ニューロロジー、エニアグラム研究、心理学、さらにはAIを含む新たな判定技法の開発へと開かれた出発点として位置づけられるべきである。

VIII. 結論

1. 本研究の到達点

本研究は、エニアグラムの九タイプ構造が、SU(3)の構造原理に基づく幾何学的・群論的配置として体系的に再構成しうる可能性を示したものである。すなわち、本研究はエニアグラムを象徴的な類型論や経験的な性格記述の体系として扱うのではなく、その基本構造が一つの配置原理から導出される構造モデルとして再定式化することを試みた。

まず第0層において、SU(3)の生成子および判定軸と九タイプとの基本対応を定義し、この対応関係から、三センター、虚軸・実軸・判定軸の区別、さらに三つの回転軸といったエニアグラムの主要構造が、配置原理の帰結として立ち上がることを示した。

さらに第1～2層への展開では、発達三段階と情動三状態の直交配置を導入することにより、三センターの斜め構造、タイプ1～9の順序、ウィング関係、統合・分裂方向に対応する循環構造、境界越境

タイプ、蝶番点など、従来エニアグラムにおいて経験的に知られてきた諸特徴が、一つの統一的な配置原理のもとで理解可能であることを示した。

これらの結果は、従来互いに独立した経験則として語られてきたエニアグラムの諸要素が、実際には共通の構造的基盤に基づいている可能性を示唆するものである。本研究の核心は、エニアグラムを単なる経験的配置としてではなく、SU(3)の対称性構造に身体化という制約を導入することで、一貫した配置原理として再解釈しうることを示した点にある。

2. 本研究の理論的意義

本研究の第一の意義は、エニアグラムを幾何学的・群論的枠組みによって再定式化した点にある。エニアグラムは臨床的・実践的領域では広く用いられてきた一方、その全体構造の理論的根拠は、象徴論、経験的観察、心理学的解釈などが重なり合う形で語られることが多く、統一的な構造原理は必ずしも明示されてこなかった。本研究は、九タイプの順序、三センター、発達三段階、統合・分裂方向といった要素をSU(3)構造との対応のもとで再記述することにより、エニアグラムの背後にある配置原理を構造的に示した。

このことは、エニアグラムが単なる象徴図式や経験的類型論ではなく、内在的秩序を備えた理論モデルとして理解されうる可能性を示している。

第二の意義は、本研究がニューロロジーにおける意識発達理論を、エニアグラム構造との対応を通じて具体化した点にある。ニューロロジーでは、意識発達は心理学的成熟過程であると同時に、素粒子構造に対応する対称性の発現過程として理解され、両者はホログラフィックな対応関係にあると考えられてきた。本研究は、この理論的枠組みを方法論的基盤として導入することにより、SU(3)構造とエニアグラム構造のあいだに具体的な対応関係を見出した。

特に、春井（2023）が整理した発達三段階と情動三状態の枠組み、ならびに自己他者連結構造を導入することにより、九タイプの順序や三センターのみならず、タイプ特性や統合・分裂方向までが構造的に説明可能となることが示された。このことは、ニューロロジーの意識発達理論、臨床的エニアグラム理解、そして数理的対称性構造のあいだに、より深い共通構造が存在する可能性を示唆している。

第三の意義は、各タイプの特性を構造的制約のもとで理解する視点を提示した点にある。すなわち、本研究の枠組みにおいては、各タイプの心理的特性は単なる経験的傾向の集積としてではなく、より深い構造水準における配置条件によって方向づけられた表現形として理解される。発達三段階と情動三状態の相互作用によって具体的な心理表現が生じる一方、その背後には生成子構造、三平面構造、回転軸、境界越境性、蝶番点といったより基礎的な構造条件が存在していると考えられる。

この視点は、エニアグラムを単なる経験的類型論としてではなく、人格と意識の秩序を記述する構造理論として再評価する可能性を開くものである。

3. 今後の課題と展望

もっとも、本研究は完成された最終理論を提示するものではなく、構造的整合性をもった基礎モデルを提示した段階にある。したがって今後は、いくつかの重要な研究課題が残されている。

第一に、本研究で提示した対応関係の数学的整理をさらに精緻化する必要がある。とりわけ、Weyl反射方向、三センターの斜め整列、各群構造の意味づけなどについては、より明確な数理的記述が求められる。

第二に、本研究では十分に扱うことのできなかつたエニアグラムの周辺構造との接続が課題として残されている。本能サブタイプ、トライタイプ、文化差、時代差といった要素は、エニアグラム理論の拡張において重要な位置を占めるものであり、今後の理論的検討が期待される。

また、実証的・臨床的研究としては、春井（2023）に基づくタイプ判定方法をより共有可能な手続きとして整備していくことが重要である。判定基準の明確化、複数判定者による一致度研究、映像・音声・自己申告などを組み合わせた複合データ化、さらには将来的なAI補助判定の可能性などは、本モデルを心理学研究へ接続する上で重要な研究課題となる。

さらに理論的には、本研究が中心に据えたSU(3)構造を、より広い群論的枠組みへ拡張する可能性も考えられる。SU(2)、SU(4)、SU(3)³などの対称性構造との関係を検討することにより、エニアグラム構造がより高次の対称性体系の中でどのような位置を占めるのかを再考することが可能となるだろう。

以上のように、本研究はエニアグラムをSU(3)構造の枠組みのもとで再定式化することを通じて、その背後にある配置原理を明らかにし、ニューロロジー的意識発達理論と臨床的エニアグラム理解とのあいだに新たな構造的接点を提示することを試みた。

本研究が示唆するのは、エニアグラムが単なる象徴体系や経験則の集積ではなく、人格構造の生成秩序を記述しうる構造モデルとして理解可能であるという点である。もっとも、本研究はその妥当性を最終的に証明するものではなく、SU(3)の対称性構造、身体化、発達三段階、情動三状態、自己他者連結構造を媒介として、エニアグラムの諸要素を一貫して記述するための基礎的枠組みを提示したものである。

したがって、本研究の意義は、エニアグラムを完成された数学的体系として確定することにあるのではなく、これまで経験的・象徴的・臨床的に理解されてきた九タイプ構造を、より深い配置原理の次元から再考する可能性を開いた点にある。今後、この対応関係がさらに理論的・実証的に検討されるならば、エニアグラムの九タイプ構造は、単なる経験的性格類型ではなく、意識発達における対称性構造の一つの表現として再定位される可能性を持つ。

以上の意味で、本研究は、エニアグラムを人格理解の技法としてだけでなく、意識、発達、身体化、対称性構造の関係を問う理論的探究へと開く試みである。

付録

A. SU(3)の数学的基盤

1. SU(3) と su(3) の基本事項

本付録では、本研究で用いる SU(3) の数学的前提を、本論に必要な範囲で簡潔に整理する。

3次特殊ユニタリ群 SU(3)は、複素 3×3 行列のうち、ユニタリかつ行列式が 1 であるもの全体からなるリー群である。対応するリー代数 su(3)は、跡ゼロ反エルミート行列全体からなる 8 次元実リー代数である。

物理学では、これをエルミートなゲルマン行列 $\lambda_1, \dots, \lambda_8$ を用いて表すことが多い。本研究でもこの慣習に従い、 $\lambda_1, \dots, \lambda_8$ を su(3)の標準的な生成子系として用いる。これらは互いに線形独立であり、su(3) 全体を張る。

なお、本研究の本文では、 λ_3, λ_8 をそのまま用いる場面と、そこから導かれる対角方向を H 記号で再表現する場面とがあるが、数学的にはいずれも rank 2 の Cartan 部分代数の中の対角方向を扱っている。

2. Cartan部分代数・A₂ルート系・Cartan平面

SU(3)の階数は 2 であり、したがって su(3) には 2 次元の Cartan 部分代数が存在する。本研究では、これを λ_3 と λ_8 の張る対角部分として考える。

この 2 次元空間を基準にすると、su(3)の非対角成分は root direction に沿って分解される。SU(3) の root system は A₂型であり、正負を合わせて 6 本の root を持つ。幾何学的には、これらは 2 次元平面上で正六角形状の配置として表される。

本研究で重要なのは、この rank 2 の Cartan 平面が、抽象的な 8 次元代数の中における「方向づけの基準面」として働く点である。本文中で用いてきた前後・上下・左右という三方向の区別は、厳密な意味で root の名称そのものではないが、Cartan 平面上の三組の方向差を身体的な軸として読み替えるための構造的枠組みとして導入されている。

3. Weyl群と基底交換対称

SU(3)の Weyl 群は対称群 S₃に同型である。これは、3 つの基底状態の置換対称に対応しており、Cartan 平面上では反射対称として表現される。したがって SU(3)では、rank 2 の平面上に三種類の反射対称が存在することになる。

ただし、ここで注意すべきなのは、Weyl 群が $SU(3)$ のすべての変換を尽くすわけではないという点である。本研究で Weyl 反射という語を用いるとき、それはあくまで、Cartan 平面上で基底の位置関係を離散的に組み替える対称性を指す。本論において横方向・縦方向・斜め方向という複数の読みを区別したのも、この連続的回転、対角方向、基底交換対称といった異なる構造モードを、配置理解のために区別するためであった。

4. 斜め整列とWeyl反射方向

本研究では、第1~2層の 3×3 配置において、センター三分割 8-9-1,2-3-4,5-6-7が斜め方向に整列することを重視した。この斜め方向は、Cartan 平面上での基底交換対称、すなわち Weyl 群作用と整合的に読める方向に対応している。したがって、本研究で「Weyl反射方向」と呼んでいるのは、厳密な定理としてその斜め線が特定の Weyl 反射軸そのものだとは主張するというより、Cartan平面上の反射対称と整合的に読める構造方向であることを意味している。

この点で、本研究の配置が意味を持つのは、春井（2023）順序を採用した場合に限って、三センターの整列がこの斜め方向に一致することである。逆に、リソ,D.R.（1992）の順序を採用した場合には、この斜め整列は崩れる。したがって、この差異は単なる見かけ上の配置の違いではなく、どの発達段階順序が $SU(3)$ の対称性構造とより高い整合性を持つかを示す、追加的な幾何学的指標として理解される。

要するに、本研究でいう斜め方向とは、三センターや発達三段階が偶然にそこへ並んだということではなく、Cartan 平面上の基底交換対称との整合性を通して、配置全体の内部にある三重構造が可視化された方向である。本文ではこの点を簡潔に述べるにとどめたが、その背景には以上のような A_2 ルート系と Weyl 群の構造がある。

B. 対応表一覧

表B-1. 九タイプと生成子・判定軸の基本対応

注 発達三段階は、口唇期 = 4・5・9、肛門期 = 3・7・8、男根期 = 1・2・6 の対応に基づく。情動3状態は、第1～2層における 欲求不満・満足・不安 の配置に基づく。

タイプ	対応する生成子・判定軸	第0層での系列	三センター	発達三段階	情動3状態
1	$\lambda 1$	前後系列	本能	男根期	不安
2	$\lambda 4$	上下系列	感情	男根期	欲求不満
3	Hrb	上下系列	感情	肛門期	満足
4	$\lambda 5$	上下系列	感情	口唇期	不安
5	$\lambda 7$	左右系列	思考	口唇期	欲求不満
6	$\lambda 6$	左右系列	思考	男根期	満足
7	Hgb	左右系列	思考	肛門期	不安
8	$\lambda 3$	前後系列	本能	肛門期	欲求不満
9	$\lambda 2$	前後系列	本能	口唇期	満足

表B-2. 第0層・第1～2層の配置

表B-2-1. 第0層の配置

	回転軸：前後軸	回転軸：上下軸	回転軸：左右軸
$\lambda 1 \sim 3$ RG面垂直軸 前後	$\lambda 3$判定軸 T8	$\lambda 2$ 虚軸 T9	$\lambda 1$ 実軸 T1
$\lambda 4 \sim 5$ RB面垂直軸 上下	$\lambda 4$ 実軸 T2	Hrb判定軸 T3	$\lambda 5$ 虚軸 T4
$\lambda 6 \sim 7$ GB面垂直軸 左右	$\lambda 7$ 虚軸 T5	$\lambda 6$ 実軸 T6	Hgb判定軸 T7

表B-2-2. 第1～2層の配置

	回転軸：前後軸 欲求不満	回転軸：上下軸 満足	回転軸：左右軸 不安
口唇期	$\lambda 7$ 虚軸 T5	$\lambda 2$ 虚軸 T9	$\lambda 5$ 虚軸 T4
肛門期	$\lambda 3$ 判定軸 T8	Hrb判定軸 T3	Hgb判定軸 T7
男根期	$\lambda 4$ 実軸 T2	$\lambda 6$ 実軸 T6	$\lambda 1$ 実軸 T1

注. 第0層では九タイプは座標相として配置され、第1～2層では発達三段階と情動3状態の交差として再配置される。

表B-3. リソ,D.R. (1992) と本研究の比較

観点	本研究	Riso (1992)
口唇期	4・5・9	4・5・9
肛門期	8・3・7	1・2・6
男根期	1・2・6	3・7・8
肛門期と男根期	春井 (2023) と整合	本研究と逆転
第1～2層での斜め整列	成立する	成立しない
Weyl反射方向との整合	ある	崩れる
SU(3)との整合性	高い	相対的に低い
解釈の重点	超自我形成・規範機能	肛門性格の表現的特徴

注 本研究では、春井 (2023) の発達段階順序を採用した場合に限り、第1～2層におけるセンター三分割が斜め方向に整列し、Cartan平面上のWeyl反射方向と整合的に読める。

以上の諸表は、本研究で用いた主要な対応関係を一覧化したものである。本文ではこれらの対応を、順序、配置、発達段階、情動状態、境界越境性、既存理論との比較という複数の観点から論じたが、ここでは確認のため、その基本関係のみを集約して示した。

C. 各 λ と判定軸の構造的意味とタイプ対応の根拠

C-1. 付録Cの位置づけ

本文では、SU(3)の内部構造を身体空間・発達段階・情動三状態へと写像することにより、エニアグラムの九タイプ配置を幾何学的・構造的に再定式化してきた。その際、本研究では、まず第0層および第1～2層における配置原理を定め、ついで各生成子・判定軸の作用特性を媒介として、九タイプとの対応づけを与えた。したがって、本研究のタイプ対応は、単なる印象的類似や象徴的連想にもとづくものではなく、配置構造と作用特性の両面から整えられた構造的対応として提示されている。

しかしその一方で、本文では論述の流れを保つために、各 λ および判定軸がなぜそれぞれ特定のタイプに対応するのかという個別の根拠については、必要最小限にとどめた。すなわち、本文の主眼は、個々の対応を逐一詳述することよりも、九タイプ配置全体がどのような構造原理によって導かれるのかを明らかにするところに置かれていた。このため、読者によっては、「なぜタイプ1が λ_1 に、タイプ9が λ_2 に、タイプ8が λ_3 に対応するのか」といった個別対応の根拠を、より明示的に確認したいと感じる可能性がある。

本付録の目的は、まさにこの点を補うことにある。すなわち、ここでは各生成子・判定軸について、その数学的・構造的な作用と、本研究における心理学的読みとを対応させながら、九タイプとの対応づけの根拠を簡潔に整理する。ここで行うのは、各対応の「証明」を与えることではない。むしろ、各構造単位の作用特性と、春井（2023）における各タイプの臨床的特性とのあいだに見られる構造的整合性を、一覽的に示すことが本付録の役割である。

したがって、本付録は、本文で展開した配置論を置き換えるものではなく、その背後にある対応根拠を補足的に提示するものである。言い換えれば、本文が「九タイプ配置の全体構造」を示すのに対し、本付録は「各対応の局所的根拠」を整理する役割を担う。この意味で、本付録は、本文の議論を補助し、タイプ対応の妥当性をより見通しよくするための補論として位置づけられる。

また、本付録で扱う対応は、各 λ や判定軸を孤立した一対一対応としてのみ扱うものではない。各対応は、判定軸群・虚軸群・実軸群という三群構造や、発達三段階との対応関係の中でも相互に支え合っている。したがって、ここでの個別記述も、最終的には全体配置との整合の中で理解されるべきである。このことにより、本研究におけるタイプ対応は、個別的な連想の集積ではなく、全体構造の内部で相互に裏づけられた対応として読まれることになる。

以上を踏まえ、本付録では次節以下において、 λ_1 から λ_7 、および Hrb・Hgb について、それぞれの作用特性とタイプ対応の根拠を順に確認する。

C-2. 各生成子・判定軸の作用特性とタイプ対応

C-2-1. λ_1 とタイプ1

λ_1 は、SU(3) の標準的な Gell-Mann 行列表示では、次のように与えられる。

$$\lambda_1 = \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

この行列は、第1成分と第2成分のあいだに実係数の直接的な混合を導入する生成子であり、第3成分には作用しない。したがって、 λ_1 の基本的な作用は、ある差異を保ったまま、その二項を比較可能な形で向かい合わせ、相互に照合させることにある。言い換えれば、 λ_1 は、三成分全体を一挙に拡散的に混ぜるのではなく、二成分間の関係を明示化し、その差を扱うためのもっとも直接的な実軸的作用を担う。

本研究の身体化された配置において、 λ_1 は前後系列に属しつつ、左右回転軸を持つ構造単位として位置づけられる。すなわち、対象との一次的な接近・離隔の位相の中にありながら、その関係を左右的な比較・配列の運動へと開く位置にある。このため、 λ_1 は、本研究の構造モデルにおいて、単なる前後的な関係そのものではなく、その関係の中に比較・区別・整序の契機を導入する作用として理解される。前後的な一次関係に対して、左右的な比較軸が重なることにより、そこには「どちらが適切か」「どこがずれているか」「どのように整えるべきか」という形式的な基準化の働きが立ち上がる。

この点は、指数写像

$$U(\theta) = e^{i\theta\lambda_1}$$

を考えると、より明瞭になる。 λ_1 は二成分間の実軸的な交換を担うため、その作用は、差異を消去するのではなく、差異を保ったまま相互関係を操作可能にする。したがって、ここで前景化するのは、流動的な一体化ではなく、差異を見分け、それを一定の基準に照らして扱う作用である。この意味で、 λ_1 は、本研究の構造モデルにおいて、比較・基準化・整序の生成子として読むことができる。

この構造的特徴は、心理学的には、物事の正誤、適否、整合性に敏感であり、ずれや乱れをそのまま放置せず、基準に照らして修正しようとする傾向に対応する。すなわち、 λ_1 の働きは、関係の場

において何が正しいか、どこが不適切かを見分け、それをより整った状態へ近づけようとする方向性として表れる。この意味で、 λ_1 は、単に規範を保持するだけでなく、現実の差異を比較し、それを秩序へ向けて調整する作用として読まれる。

本研究では、この特性を、春井（2023）におけるタイプ1の臨床的特徴と対応するものとして理解する。タイプ1は、一般に「こうあるべき」という基準意識が強く、誤り、不正確さ、逸脱、乱れに対して敏感であり、それを正そうとする傾向を持つとされる。ここで重要なのは、その基準意識が抽象的理念にとどまるのではなく、現実の差異を比較し、評価し、整序しようとする実効的な働きとして現れる点である。この点において、 λ_1 の持つ比較・基準化・整序の構造的作用は、タイプ1の基本傾向と高い整合性を示している。

また、本研究の三群構造との関係から見れば、 λ_1 は実軸群に属し、男根期群（1・2・6）の一角を成している。実軸群とは、位相的保持や評価軸の固定よりも、差異を現実的に扱い、実効的な操作や安定化へ向かう作用を担う群である。したがって、タイプ1が、単に理念を内面に保持するだけでなく、それを現実の場で適用し、秩序として実現しようとする点も、 λ_1 が実軸群に属することと整合する。ここにおいて、タイプ1= λ_1 という対応は、構造的な位置、生成子作用、心理学的傾向、三群構造のいずれの水準から見ても、一貫した対応として理解される。

C-2-2. λ_2 とタイプ9

λ_2 は、SU(3) の標準的な Gell-Mann 行列表示では、次のように与えられる。

$$\lambda_2 = \begin{pmatrix} 0 & -i & 0 \\ i & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

この行列は、 λ_1 と同様に第1成分と第2成分のあいだにのみ作用するが、その作用は実係数の直接交換ではなく、虚係数をともなう位相的混合として与えられる。したがって、 λ_2 の基本的特徴は、二成分の差異を外的に比較して操作することよりも、そのあいだの関係を位相的に回転させ、全体の連続性を保ちながら変化させるところにある。言い換えれば、 λ_2 は、差異を切断して前景化するよりも、差異を内包したまま、全体の均衡や連続性を維持する方向に働く生成子として理解される。

本研究の身体化された配置において、 λ_2 は前後系列に属しつつ、上下回転軸を持つ構造単位として位置づけられる。すなわち、対象との接近・離隔というもっとも基礎的な前後関係の位相の中でありながら、その内部運動としては上下方向の安定化・均衡化の契機を担っている。このことは、 λ_2 が、対象との関係そのものを積極的に切り分けたり比較したりするというより、むしろその関係を壊さず保ち、揺れを吸収し、一定の安定した位相へ保とうとする働きを持つことを意味している。前後

的な一次関係のうちに、上下的な安定化の契機が重なることにより、そこには全体を散らさず、波立ちを鎮め、連続的な状態へ戻そうとする方向性が生じる。

この点は、指数写像

$$U(\theta) = e^{i\theta\lambda_2}$$

を考えると、より明瞭になる。 λ_2 の作用は、二成分のあいだに位相回転を与えるものであり、差異を粗く外在化するのではなく、ノルムを保ちながら内部的な回転を行う。したがって、ここで前景化するのとは、比較・裁断・規範化ではなく、全体のまとまりを壊さずに維持する働きである。この意味で、 λ_2 は、本研究の構造モデルにおいて、位相的保持・均衡維持・恒常化の生成子として読むことができる。

この構造的特徴は、心理学的には、対立や差異を鋭く前景化することよりも、それらを包み込みながら全体の平穏を保とうとする傾向に対応する。すなわち、 λ_2 の働きは、関係の場において衝突や分裂を拡大するのではなく、そこに連続性を回復し、安定した均衡状態を維持しようとする方向性として表れる。この意味で、 λ_2 は、積極的な比較や統制よりも、むしろ状態を散逸させず保つ働きとして読まれる。

本研究では、この特性を、春井（2023）におけるタイプ9の臨床的特徴と対応するものとして理解する。タイプ9は、一般に、対立を避け、全体の調和や安定を重んじ、状況をなるべく穏やかに保とうとする傾向を持つとされる。ここで重要なのは、その安定化が、強い基準意識による外的統制ではなく、むしろ関係全体を壊さず保とうとする内的均衡の志向として現れる点である。この点において、 λ_2 の持つ位相的保持・均衡維持・恒常化の作用は、タイプ9の基本傾向と高い整合性を示している。

また、本研究の三群構造との関係から見れば、 λ_2 は虚軸群に属し、口唇期群（4・5・9）の一角を成している。虚軸群とは、実効的な操作や評価軸の固定に先立って、関係を内包的に保持し、位相的な連続性を保つ作用を担う群である。したがって、タイプ9が、差異を現実的に裁断するよりも、全体の流れや関係のまとまりを保つ方向へ傾きやすい点も、 λ_2 が虚軸群に属することと整合する。ここにおいて、タイプ9 $\equiv\lambda_2$ という対応は、構造的な位置、生成子作用、心理学的傾向、三群構造のいずれの水準から見ても、一貫した対応として理解される。

C-2-3. λ_3 とタイプ8

λ_3 は、SU(3) の標準的な Gell-Mann 行列表示では、次のように与えられる。

$$\lambda_3 = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

この行列は、第1成分と第2成分に対して、それぞれ正と負の符号を与える対角生成子であり、第3成分には作用しない。したがって、 λ_3 の基本的特徴は、二成分のあいだにある差異を混合することではなく、差異そのものを極性として固定するところにある。 λ_1 や λ_2 が二成分間の混合や位相回転を担うのに対し、 λ_3 は、両者の差をそのまま保持し、どちらが優位であるか、どちらに力が傾いているかを明示する作用を持つ。この意味で、 λ_3 は、比較や均衡化に先立って、まず差の輪郭を立ち上げる生成子として理解される。

本研究の身体化された配置において、 λ_3 は前後系列に属し、かつ前後回転軸を持つ構造単位として位置づけられる。すなわち、対象との接近・離隔というもっとも基礎的な前後関係の位相に属しながら、その内部運動においても同じ前後方向を保持する。このことは、 λ_3 が、対象関係の中に差を導入するだけでなく、その差を前後方向の極性としてそのまま固定し、関係の力学を一方向に緊張させる働きを持つことを意味している。前後系列に属し、かつ前後回転軸を持つという二重の一致によって、 λ_3 には、他の生成子とは異なる強い自己同一的方向性が与えられる。

この点は、指数写像

$$U(\theta) = e^{i\theta\lambda_3}$$

を考えると、より明瞭になる。 λ_3 は対角生成子であるため、その作用は成分間を直接混ぜるのではなく、各成分に異なる位相因子を与え、両者の差を保存したまま、その差を一つの軸に沿って明示化する。したがって、ここで前景化するのとは、差異を曖昧化することではなく、力の偏り・優劣・優位性をはっきりと立ち上げる作用である。この意味で、 λ_3 は、本研究の構造モデルにおいて、極性化・差の固定・力関係の決定を担う生成子として読むことができる。

この構造的特徴は、心理学的には、関係の場において中立を保つことよりも、力の所在を明確にし、自らが優位な位置を占めることによって全体を掌握しようとする傾向に対応する。すなわち、 λ_3 の働きは、差異を単に感じ取るだけでなく、それを押し切るべき力関係として把握し、優劣や強弱を明確にしたうえで関係を動かしていく方向性として表れる。この意味で、 λ_3 は、均衡や調停よりも、まず差を明確にし、それを現実の関係の中で押し出す作用として読まれる。

本研究では、この特性を、春井（2023）におけるタイプ8の臨床的特徴と対応するものとして理解する。タイプ8は、一般に、力関係に敏感であり、自らの意志や影響力を強く発揮し、支配される側に回るよりも支配する側に立とうとする傾向を持つとされる。ここで重要なのは、その働きが単なる攻撃性ではなく、関係の中における力の偏りを明確化し、それを自らの優位性として引き受ける方向で現れる点である。この点において、 λ_3 の持つ極性化・差の固定・力関係の決定という作用は、タイプ8の基本傾向と高い整合性を示している。

また、本研究の三群構造との関係から見れば、 λ_3 は判定軸群に属し、肛門期群（3・7・8）の一角を成している。判定軸群とは、単に関係を保持したり操作したりするのではなく、差異を明示化し、評価・判断・方向づけを与える作用を担う群である。したがって、タイプ8が、関係の中で曖昧な均衡を保つよりも、まずどちらが強いのか、どこに主導権があるかを明らかにしようとする点も、 λ_3 が判定軸群に属することと整合する。ここにおいて、タイプ8= λ_3 という対応は、構造的な位置、生成子作用、心理学的傾向、三群構造のいずれの水準から見ても、一貫した対応として理解される。

C-2-4. λ_4 とタイプ2

λ_4 は、SU(3) の標準的な Gell-Mann 行列表示では、次のように与えられる。

$$\lambda_4 = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

この行列は、第1成分と第3成分のあいだに実係数の直接的な混合を導入する生成子であり、第2成分には作用しない。したがって、 λ_4 の基本的特徴は、二つの成分を切り離して対立的に扱うことではなく、両者を結びつけ、あいだに実効的な関係を成立させるところにある。ここで前景化するのは、差異を強く固定することでも、位相的に内面化することでもなく、異なるものどうしを実際の関係としてつなぐ働きである。この意味で、 λ_4 は、本研究の構造モデルにおいて、直接的な連結、媒介、実混合の生成子として理解される。

本研究の身体化された配置において、 λ_4 は上下系列に属しつつ、前後回転軸を持つ構造単位として位置づけられる。すなわち、上下方向の位相、すなわち安定／不安定や保持／崩壊の問題系の中にあるながら、その内部運動としては前後方向、すなわち対象との接近・離隔の契機を担っている。このことは、 λ_4 が、評価や安定化の位相の中に、他者や対象へ向かって近づき、関係を作ろうとする運動を導入することを意味している。上下系列に属しながら前後回転軸を持つという構造によって、 λ_4 には、単なる自己保持ではなく、関係を通して自己を安定化しようとする外向きの結びつきが与えられる。

この点は、指数写像

$$U(\theta) = e^{i\theta\lambda_4}$$

を考えると、より明瞭になる。 λ_4 は二成分間の実軸的な混合を担うため、その作用は、差異をそのまま保存するというより、二者を行き来可能なものとして結びつけ、相互に浸透させる方向を持つ。したがって、ここで前景化するのは、独立性の保持ではなく、接近・介入・関係形成である。この意味で、 λ_4 は、本研究の構造モデルにおいて、他者との結合を通して状態を成立させようとする生成子として読むことができる。

この構造的特徴は、心理学的には、自立した自己完結よりも、他者との関係を作り、その関係の中で自らの位置と価値を確かめようとする傾向に対応する。すなわち、 λ_4 の働きは、関係の場において距離を取るのではなく、むしろ積極的に働きかけ、助け、結びつき、必要とされることを通して、自らの位置を安定化しようとする方向性として現れる。この意味で、 λ_4 は、単なる感情的依存ではなく、関係形成そのものを実効的な働きとして担う作用として読まれる。

本研究では、この特性を、春井（2023）におけるタイプ2の臨床的特徴と対応するものとして理解する。タイプ2は、一般に、他者への関与が強く、助けること、世話をすること、必要とされることを通して自らの存在位置を確かめようとする傾向を持つとされる。ここで重要なのは、その志向が単なる受動的な同調ではなく、他者との関係を積極的に成立させる働きとして現れる点である。この点において、 λ_4 の持つ直接的連結・実混合・関係形成の作用は、タイプ2の基本傾向と高い整合性を示している。

また、本研究の三群構造との関係から見れば、 λ_4 は実軸群に属し、男根期群（1・2・6）の一角を成している。実軸群とは、位相的保持や評価軸の固定にとどまらず、差異を現実的に扱い、実効的な操作や安定化へ向かう作用を担う群である。したがって、タイプ2が、単に内面に感情を抱えるのではなく、実際の関係形成を通して他者に働きかける点も、 λ_4 が実軸群に属することと整合する。ここにおいて、タイプ2= λ_4 という対応は、構造的位相、生成子作用、心理学的傾向、三群構造のいずれの水準から見ても、一貫した対応として理解される。

C-2-5. λ_5 とタイプ4

λ_5 は、SU(3) の標準的な Gell-Mann 行列表示では、次のように与えられる。

$$\lambda_5 = \begin{pmatrix} 0 & 0 & -i \\ 0 & 0 & 0 \\ i & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

この行列は、 λ_4 と同様に第1成分と第3成分のあいだに作用するが、その作用は実係数の直接的混合ではなく、虚係数をともなう位相的混合として与えられる。したがって、 λ_5 の基本的特徴は、異なる二成分をそのまま的に結びつけることではなく、両者のあいだに内面的・位相的な差異を保ったまま、関係を回轉的に変換するところにある。言い換えれば、 λ_5 は、二者を現実的に接続するというより、関係を内面化し、その差を感受的・象徴的に保持する生成子として理解される。

本研究の身体化された配置において、 λ_5 は上下系列に属しつつ、左右回轉軸を持つ構造単位として位置づけられる。すなわち、安定／不安定、保持／崩壊という上下的な位相の中にありながら、その内部運動としては左右方向、すなわち複数の位置関係や差異を並列的に区別する契機を担っている。このことは、 λ_5 が、関係の場においてただちに他者へ接続していくのではなく、その差異を内面に引き受け、比較し、反芻し、独自の感受性として保持する方向を持つことを意味している。上下系列に属しつつ左右回轉軸を持つという構造により、 λ_5 には、安定化への欲求と、差異の内面的保持とが重ね合わされる。

この点は、指数写像

$$U(\theta) = e^{i\theta\lambda_5}$$

を考えると、より明瞭になる。 λ_5 は二成分間の虚軸的な混合を担うため、その作用は、二者の差異を即座に現実化して処理するのではなく、位相差として保存しつつ内部的に回轉させる。したがって、ここで前景化するのは、直接的な行為や結合ではなく、差異を内面の中で反復的に感じ取り続ける働きである。この意味で、 λ_5 は、本研究の構造モデルにおいて、内面化・感受的保持・象徴化された差異の維持を担う生成子として読むことができる。

この構造的特徴は、心理学的には、現実の关系到ただちに適応したり、差異を外的に処理したりするのではなく、むしろその差異を自己の内面に深く取り込み、独自の感情的意味として抱え続ける傾向に対応する。すなわち、 λ_5 の働きは、関係の場において何か欠けていること、ずれていること、満たされきらないことを、単なる不満としてではなく、自己固有の感受性や存在感覚として引き受ける方向性として表れる。この意味で、 λ_5 は、外的な関係形成よりも、差異そのものを自己の固有性へ変換する作用として読まれる。

本研究では、この特性を、春井（2023）におけるタイプ4の臨床的特徴と対応するものとして理解する。タイプ4は、一般に、他者との差異や自己の独自性に敏感であり、満たされなさや欠如の感覚を、自己の存在感覚そのものと深く結びつける傾向を持つとされる。ここで重要なのは、その傾向が単なる感情の強さではなく、差異を内面に保持し、それを自己の固有な意味として生きることとして現れる点である。この点において、 λ_5 の持つ位相的混合・内面化・感受的保持の作用は、タイプ4の基本傾向と高い整合性を示している。

また、本研究の三群構造との関係から見れば、 λ_5 は虚軸群に属し、口唇期群（4・5・9）の一角を成している。虚軸群とは、実効的な操作や評価軸の固定に先立って、関係を内包的に保持し、位相的な連続性や感受的差異を維持する作用を担う群である。したがって、タイプ4が、差異をただちに外化して解消するのではなく、それを自己の内面で深く感じ取り続ける点も、 λ_5 が虚軸群に属することと整合する。ここにおいて、タイプ4= λ_5 という対応は、構造的位相、生成子作用、心理学的傾向、三群構造のいずれの水準から見ても、一貫した対応として理解される。

C-2-6. λ_6 とタイプ6

λ_6 は、SU(3) の標準的な Gell-Mann 行列表示では、次のように与えられる。

$$\lambda_6 = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 \end{pmatrix}$$

この行列は、第2成分と第3成分のあいだに実係数の直接的な混合を導入する生成子であり、第1成分には作用しない。したがって、 λ_6 の基本的特徴は、二成分間の差異を単に固定することでも、位相的に内面化することでもなく、両者のあいだを現実的に往復可能なものとして開き、その関係を操作しうる状態に置くところにある。言い換えれば、 λ_6 は、異なる二項のあいだを結びつけつつ、その結合をつねに可逆的なものとして保つ生成子であり、そこには安定化への志向と同時に、揺れを含んだ実効的な接続の契機が含まれている。

本研究の身体化された配置において、 λ_6 は左右系列に属しつつ、上下回転軸を持つ構造単位として位置づけられる。すなわち、複数の位置関係や関係性の並列的区別を担う左右系列の位相の中にありながら、その内部運動としては上下方向、すなわち安定／不安定、保持／崩壊の契機を担っている。このことは、 λ_6 が、複数の関係の中でどこに身を置くべきかをめぐって揺れつつも、その揺れの中から安定点を探ろうとする働きを持つことを意味している。左右系列に属しつつ上下回転軸を持つという構造により、 λ_6 には、分岐した関係性の中で位置を定めきれずに揺れることと、その揺れを通して実効的な安定を確保しようとするのが同時に与えられている。

この点は、指数写像

$$U(\theta) = e^{i\theta\lambda_6}$$

を考えると、より明瞭になる。 λ_6 は二成分間の実軸的な交換を担うため、その作用は、関係を固定化して閉じるのではなく、往復運動を可能にしなが、その中で一定の安定状態を探索する方向を持つ。したがって、ここで前景化するの、確信に満ちた一方向的行為ではなく、結びつきと離脱、信頼と警戒のあいだを揺れながら、どこで均衡を取るかを探る働きである。この意味で、 λ_6 は、本研究の構造モデルにおいて、揺れの中での安定探索・可逆的接続・実効的均衡化を担う生成子として読むことができる。

この構造的特徴は、心理学的には、複数の関係や判断基準の中で、ただちに一つを断定することができず、つねに確認・照合・警戒を行いながら、自らが依拠しうる安定点を探ろうとする傾向に対応する。すなわち、 λ_6 の働きは、関係の場において単純に他者へ接近するのでも、完全に自立するのでもなく、そのあいだを揺れながら、なお現実の中で保たれるべき位置を模索する方向性として表れる。この意味で、 λ_6 は、単なる不安定さそのものではなく、不安定さの中でなお安定を求め続ける作用として読まれる。

本研究では、この特性を、春井（2023）におけるタイプ6の臨床的特徴と対応するものとして理解する。タイプ6は、一般に、不確実性や危険に敏感であり、信頼と疑い、従属と反発、依存と自立のあいだで揺れ動きながら、なお安全な基盤や確かな判断根拠を求める傾向を持つとされる。ここで重要なのは、その揺れが単なる優柔不断ではなく、不安定な関係の中でなお確かな支点を見出そうとする働きとして現れる点である。この点において、 λ_6 の持つ可逆的接続・揺れの中での安定探索・実効的均衡化の作用は、タイプ6の基本傾向と高い整合性を示している。

また、本研究の三群構造との関係から見れば、 λ_6 は実軸群に属し、男根期群（1・2・6）の一角を成している。実軸群とは、位相的保持や評価軸の固定に先立って、差異を現実的に扱い、実効的な操作や安定化へ向かう作用を担う群である。したがって、タイプ6が、単に内面で不安を感じるだけでなく、現実の関係や制度の中で依拠しうる基盤を探索しようとする点も、 λ_6 が実軸群に属することと整合する。ここにおいて、タイプ6= λ_6 という対応は、構造的な位置、生成子作用、心理学的傾向、三群構造のいずれの水準から見ても、一貫した対応として理解される。

C-2-7. λ_7 とタイプ5

λ_7 は、SU(3) の標準的な Gell-Mann 行列表示では、次のように与えられる。

$$\lambda_7 = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -i \\ 0 & i & 0 \end{pmatrix}$$

この行列は、 λ_6 と同様に第2成分と第3成分のあいだに作用するが、その作用は実係数の直接的混合ではなく、虚係数をともなう位相的混合として与えられる。したがって、 λ_7 の基本的特徴は、二成分間を現実的に往復させて操作することではなく、そのあいだの差異を内面的・位相的に保持しつつ、関係全体を静かに回転させるところにある。言い換えれば、 λ_7 は、対象や関係にただちに介入してそれを変えるのではなく、距離を保ったままその構造を観察し、差異のあり方を見届ける生成子として理解される。

本研究の身体化された配置において、 λ_7 は左右系列に属しつつ、前後回転軸を持つ構造単位として位置づけられる。すなわち、複数の位置関係や区別の並列性を担う左右系列の位相の中にありながら、その内部運動としては前後方向、すなわち接近と離隔の契機を持つ。このことは、 λ_7 が、関係の中へ直接入り込んで操作するというより、むしろ一定の距離を取りながら、対象とのあいだに適切な隔たりを保ち、その構造を把握しようとする働きを持つことを意味している。左右系列に属しつつ前後回転軸を持つという構造により、 λ_7 には、多数の関係可能性を前にしながら、それらへただちに参与するのではなく、まず観察し、見極め、必要なだけ関わるという方向性が与えられている。

この点は、指数写像

$$U(\theta) = e^{i\theta\lambda_7}$$

を考えると、より明瞭になる。 λ_7 は二成分間の虚軸的な混合を担うため、その作用は、現実的な交換や介入を前景化するのではなく、ノルムを保ちながら位相差を維持し、対象との距離を保ったまま関係を回轉的に把握する方向を持つ。したがって、ここで前景化するのは、積極的な接続や安定化ではなく、差異を急いで埋めることなく、そのまま保持しつつ観察する働きである。この意味で、 λ_7 は、本研究の構造モデルにおいて、距離の保持・観察・非干渉的把握を担う生成子として読むことができる。

この構造的特徴は、心理学的には、関係や対象にただちに巻き込まれるのではなく、一定の距離を保ちながら、それを理解し、把握し、必要に応じて最小限の関与にとどめようとする傾向に対応する。すなわち、 λ_7 の働きは、外界との関わりの中で、自らを過度に消耗させることなく、観察と理解を通して状況を内的に処理しようとする方向性として表れる。この意味で、 λ_7 は、単なる撤退や無関心ではなく、距離を取ることによって認識の自由度を保つ作用として読まれる。

本研究では、この特性を、春井（2023）におけるタイプ5の臨床的特徴と対応するものとして理解する。タイプ5は、一般に、対象や他者とのあいだに一定の距離を保ち、過剰な関与を避けながら、観察・理解・知的把握を通して世界に関わろうとする傾向を持つとされる。ここで重要なのは、その距離が単なる拒絶ではなく、自己を保ちながら対象を認識するための必要条件として現れる点である。この点において、 λ_7 の持つ位相的保持・距離の維持・非干渉的観察の作用は、タイプ5の基本傾向と高い整合性を示している。

また、本研究の三群構造との関係から見れば、 λ_7 は虚軸群に属し、口唇期群（4・5・9）の一角を成している。虚軸群とは、実効的な操作や評価軸の固定よりも、関係を内包的に保持し、位相的な連続性や差異を保存する作用を担う群である。したがって、タイプ5が、対象へ直接介入するよりも、まず距離を取りつつ認識を深めようとする点も、 λ_7 が虚軸群に属することと整合する。ここにおいて、タイプ5= λ_7 という対応は、構造的位相、生成子作用、心理学的傾向、三群構造のいずれの水準から見ても、一貫した対応として理解される。

C-2-8. Hrb とタイプ3

本研究で Hrb と記している判定軸は、RB 面に対応する対角的な評価軸であり、標準的な Gell-Mann 基底では λ_3 と λ_8 の線形結合として表される。すなわち、RB 面に沿った差異を判定する Cartan 的方向として、たとえば

$$H_{rb} = -\frac{1}{2}\lambda_3 + \frac{\sqrt{3}}{2}\lambda_8$$

と書くことができる。実際に λ_3, λ_8 の標準表示

$$\lambda_3 = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}, \quad \lambda_8 = \frac{1}{\sqrt{3}} \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & -2 \end{pmatrix}$$

を用いれば、

$$H_{rb} = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & -1 \end{pmatrix}$$

となり、第2成分と第3成分のあいだに明確な差を与える対角軸であることが分かる。

このことから、Hrb の基本的特徴は、二成分を混合したり回転させたりすることではなく、差異を評価軸として固定し、どちらが上位か、どちらが基準に近いかを判定可能にするところにある。 λ_4 や λ_5 が RB 面の内部で二成分間の結合や位相差を生み出すのに対し、Hrb は、その関係を最終的にどのような基準で読むかを定める軸である。言い換えれば、Hrb は、関係の中で生じた差異を、評価・達成・比較可能な秩序へとまとめ上げる判定軸として理解される。

本研究の身体化された配置において、Hrb は上下系列に属し、かつ上下回転軸を持つ構造単位として位置づけられる。すなわち、RB 面の垂直軸である上下方向に属しながら、その内部運動においても同じ上下方向を保持する。この二重の一致によって、Hrb には、安定／不安定、高低、優劣、達成／未達成といった差異を、曖昧なままにせず、明確な評価軸として固定する働きが与えられる。したがって、Hrb は、上下系列における判定軸群の代表として、状態を「どの位置に置くべきか」を決めるもっとも明示的な構造単位となる。

この点は、指数写像

$$U(\theta) = e^{i\theta H_{rb}}$$

を考えると、より明瞭になる。Hrb は対角軸であるため、その作用は二成分間を直接混ぜるのではなく、両者に異なる位相因子を与え、その差を評価軸として保持する。したがって、ここで前景化するのは、接続や観察そのものではなく、どの位置がより優れているか、どこが目標に近いか、どの状態が評価されるべきかを可視化する作用である。この意味で、Hrb は、本研究の構造モデルにおいて、評価・基準化・達成軸の固定を担う判定軸として読むことができる。

この構造的特徴は、心理学的には、自己や行為をつねに何らかの基準に照らして測り、その中で価値や成果を確認しようとする傾向に対応する。すなわち、Hrb の働きは、関係の場において単に存在するのではなく、「どのように見られるか」「どの程度達成しているか」「どこまで上昇できているか」という評価軸のもとで自己を位置づけようとする方向性として表れる。この意味で、Hrb は、単なる自己主張ではなく、評価可能な形で自己を成立させる作用として読まれる。

本研究では、この特性を、春井（2023）におけるタイプ3の臨床的特徴と対応するものとして理解する。タイプ3は、一般に、成果、評価、達成、社会的承認に敏感であり、何が価値あるものとして見なされるかを素早く察知し、その基準に沿って自己を形成しようとする傾向を持つとされる。ここで重要なのは、その働きが単なる承認欲求ではなく、評価軸そのものを敏感に読み取り、その軸の中で自己を最適化しようとする作用として現れる点である。この点において、Hrb の持つ評価・基準化・達成軸の固定という構造的作用は、タイプ3の基本傾向と高い整合性を示している。

また、本研究の三群構造との関係から見れば、Hrb は判定軸群に属し、肛門期群（3・7・8）の一角を成している。判定軸群とは、差異を単に保持したり混合したりするのではなく、それを評価・判断・方向づけの軸として固定する作用を担う群である。したがって、タイプ3が、単に何かを感じたり考えたりするだけでなく、それを社会的・実践的な基準の中で成果として表現しようとする点も、Hrb が判定軸群に属することと整合する。ここにおいて、タイプ3=Hrb という対応は、構造的位相、対角軸としての作用、心理学的傾向、三群構造のいずれの水準から見ても、一貫した対応として理解される。

C-2-9. Hgb とタイプ7

本研究で Hgb と記している判定軸は、GB 面に対応する対角的な評価軸であり、標準的な Gell-Mann 基底では λ_3 と λ_8 の線形結合として表される。すなわち、GB 面に沿った差異を判定する Cartan 的方向として、たとえば

$$H_{gb} = \frac{1}{2}\lambda_3 + \frac{\sqrt{3}}{2}\lambda_8$$

と書くことができる。実際に λ_3, λ_8 の標準表示

$$\lambda_3 = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & -1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix}, \quad \lambda_8 = \frac{1}{\sqrt{3}} \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & -2 \end{pmatrix}$$

を用いれば、

$$H_{gb} = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & -1 \end{pmatrix}$$

となり、第1成分と第3成分のあいだに明確な差を与える対角軸であることが分かる。

このことから、 H_{gb} の基本的特徴は、二成分を混合したり回転させたりすることではなく、差異を可能性の幅として判定し、どちらへ展開しうるかを選別可能にするところにある。 λ_6 や λ_7 が GB 面の内部で結合や位相差を担うのに対し、 H_{gb} は、その関係をどの方向へ開くか、どの可能性を前景化するかを定める軸である。言い換えれば、 H_{gb} は、関係の中で生じた差異を、閉じた評価秩序へ収束させるというより、選択肢・展開方向・自由度の軸としてまとめ上げる判定軸として理解される。

本研究の身体化された配置において、 H_{gb} は左右系列に属し、かつ左右回転軸を持つ構造単位として位置づけられる。すなわち、GB 面の垂直軸である左右方向に属しながら、その内部運動においても同じ左右方向を保持する。この二重の一致によって、 H_{gb} には、複数の位置関係、選択肢、分岐可能性を、曖昧なままにせず、どの方向へ展開するかを判定する働きが与えられる。したがって、 H_{gb} は、左右系列における判定軸群の代表として、状態を「どの可能性へ開くか」を決めるもっとも明示的な構造単位となる。

この点は、指数写像

$$U(\theta) = e^{i\theta H_{gb}}$$

を考えると、より明瞭になる。 H_{gb} は対角軸であるため、その作用は二成分間を直接混ぜるのではなく、両者に異なる位相因子を与え、その差を展開方向の軸として保持する。したがって、ここで前景化するの、安定した評価への収束ではなく、どの方向へ進みうるか、どの可能性を保持しうるか、を可視化する作用である。この意味で、 H_{gb} は、本研究の構造モデルにおいて、展開可能性・選択肢・自由度の判定軸として読むことができる。

この構造的特徴は、心理学的には、現に与えられている一つの状態にとどまることよりも、そこからさらに別の可能性へ開いていこうとする傾向に対応する。すなわち、 H_{gb} の働きは、関係や状況の中で一つの基準に自己を固定するのではなく、そこに潜む複数の方向性を見出し、より広がりのある選択肢へと自己を展開させようとする方向性として表れる。この意味で、 H_{gb} は、単なる逸脱や注意散漫ではなく、可能性そのものを活力として読み取り、そこへ身を開いていく作用として読まれる。

本研究では、この特性を、春井（2023）におけるタイプ7の臨床的特徴と対応するものとして理解する。タイプ7は、一般に、閉塞や制限を嫌い、選択肢、楽しみ、展望、可能性を敏感に察知し、それらへ向かって自己を拡張しようとする傾向を持つとされる。ここで重要なのは、その働きが単なる快楽追求ではなく、現在の状態を一つに固定せず、つねにより開かれた可能性の側へ自己を位置づけようとする作用として現れる点である。この点において、Hgb の持つ展開可能性・選択肢・自由度の判定軸としての作用は、タイプ7の基本傾向と高い整合性を示している。

また、本研究の三群構造との関係から見れば、Hgb は判定軸群に属し、肛門期群（3・7・8）の一角を成している。判定軸群とは、差異を単に保持したり混合したりするのではなく、それを評価・判断・方向づけの軸として固定する作用を担う群である。したがって、タイプ7が、単に可能性を夢想するだけでなく、実際にどの可能性へ自己を開くかを選び続ける点も、Hgb が判定軸群に属することと整合する。ここにおいて、タイプ7=Hgb という対応は、構造的位置、対角軸としての作用、心理学的傾向、三群構造のいずれの水準から見ても、一貫した対応として理解される。

C-3. 対応全体のまとめ

以上見てきたように、本研究における各生成子・判定軸とエニアグラム各タイプとの対応は、単なる印象的な類似や象徴的連想にもとづくものではない。それぞれの対応は、第一に、各構造単位が第0層において占める位置、第二に、その生成子または判定軸が持つ数学的・構造的作用、第三に、それを心理学的に読んだときに現れる傾向、という三つの水準の重なりの上に成立している。したがって、本研究のタイプ対応は、個別的な比喩の積み重ねではなく、配置構造と作用特性とを媒介とする構造的対応として理解されるべきである。

このことは、各対応を全体として見渡したとき、いっそう明瞭になる。すなわち、本研究で与えた

- λ_1 =タイプ1
- λ_2 =タイプ9
- λ_3 =タイプ8
- λ_4 =タイプ2
- λ_5 =タイプ4
- λ_6 =タイプ6
- λ_7 =タイプ5
- Hrb =タイプ3
- Hgb =タイプ7

という対応は、個々にばらばらに置かれているのではなく、群としても一定の秩序を持っている。

まず、本研究で判定軸群として整理した $Hrb \cdot Hgb \cdot \lambda_3$ は、それぞれタイプ3・タイプ7・タイプ8に対応している。この三者はいずれも、関係の中に差異を立て、方向づけ、評価軸や展開軸を明示する働きを持つ。したがって、これらが春井（2023）における肛門期群（3・7・8）に対応することは、判定軸群が単なる数学的分類にとどまらず、発達段階的な三群構造とも整合していることを示している。

次に、虚軸群として整理した $\lambda_5 \cdot \lambda_7 \cdot \lambda_2$ は、それぞれタイプ4・タイプ5・タイプ9に対応している。この三者はいずれも、差異を直ちに現実的操作へ移すのではなく、位相的に保持し、内面的・感受的に処理し、全体の連続性を保つ方向を担っている。したがって、これらが口唇期群（4・5・9）に対応することもまた、虚軸群の構造的意味と発達段階の読みとが一致していることを示している。

さらに、実軸群として整理した $\lambda_1 \cdot \lambda_4 \cdot \lambda_6$ は、それぞれタイプ1・タイプ2・タイプ6に対応している。この三者はいずれも、差異を現実的に扱い、比較し、関係を作り、あるいは揺れの中で安定点を探索するなど、実効的な操作や安定化へ向かう働きを持つ。したがって、これらが男根期群（1・2・6）に対応することも、実軸群の構造的意味と発達段階との整合を示している。

このように見れば、本研究で与えたタイプ対応は、単独の一対一対応としてだけでなく、判定軸群・虚軸群・実軸群という三群構造の水準でも一貫性を持つことが分かる。ここで重要なのは、この三群構造が、本文で論じた発達三段階、三センター、さらには第1～2層における再配置とも連動しているという点である。すなわち、各タイプ対応は、個別に見ても一定の根拠を持つが、全体として見たときには、より大きな配置秩序の内部で相互に支え合っている。したがって、本研究におけるタイプ対応は、個別的連想の総和ではなく、全体配置の中で相互に裏づけられた対応として読まれるべきである。

もちろん、ここで示した各対応は、厳密な意味での数学的証明として与えられているわけではない。本付録で行ったのは、各生成子・判定軸の作用特性と、春井（2023）における各タイプの臨床的特性とのあいだに見られる構造的整合性を整理することである。しかし、本研究で明らかにしてきたように、この整合性は、単なる表面的な印象の一致ではなく、身体化された $SU(3)$ の配置構造、発達三段階、情動三状態、三群構造といった複数の水準を通して繰り返し確認されるものである。この点において、本研究のタイプ対応は、少なくとも構造モデルとして十分な一貫性を備えていると考えられる。

以上より、各 λ と判定軸のタイプ対応は、個別の直観的な読みの寄せ集めではなく、本文で展開した全体構造の内部で相互に支えられた対応として理解されるべきである。このことは、エニアグラムの九タイプが、単なる象徴的性格分類ではなく、 $SU(3)$ の内部対称性と意識発達との対応のもとで記述しうる構造位置であるという、本研究全体の主張を、局所的な水準からも補強するものである。

参考文献

- 春井星乃．心理学史から見たヌーソロジーの位置付けとヌーソロジー研究の可能性
—アリストテレス的潮流・プラトンの潮流の変遷と構造主義的超越論的無意識研究の系譜—．
武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所．2022
,<https://lab.noos-academeia.com/wp-content/uploads/2023/10/46d13eae6bba5a35ce3f5c40fa0633a4.pdf>, (参照 2026-03-14) .
- 春井星乃．目覚めへの道の歩き方．ナチュラルスピリット，東京，2023，224p .
- 半田広宣．2013：人類が神を見る日 アドバンストエディション．徳間書店，東京，2008，453p .
- 半田広宣；福田秀樹；大野章．シュタイナー思想とヌーソロジー．ヒカルランド，東京，2017，752p .
- フロイト, S. . 新装版 フロイト著作集第5巻．懸田克躬ほか訳．人文書院，京都，2023，462p .
- リソ, D. R. . 性格タイプの分析．鈴木秀子監修．橋村礼助，俵晶子訳．春秋社，東京，1991，340p .
- リソ, D. R. . 性格のタイプ．鈴木秀子監修．橋村礼助，土居守，俵晶子訳．春秋社，東京，1992，515p .
- リソ, D. R. ; ハドソン, R. . エニアグラム—あなたを知る9つのタイプ【基礎編】．高岡よし子，ティム・マククリーン訳．角川書店，東京，2001，333p .
- Georgi, H. . Lie Algebras In Particle Physics: from Isospin To Unified Theories . CRC Press , Boca Raton, FL , 1999 , 320p .